

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集

駒板遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

第1分冊 古代～近世編

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

駒板遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡調査

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代文化をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。また広大な面積をもち、その大部分が山地である本県にとって、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は重要な施策であります。

貴重な文化財の保護・保存と、このような現代生活を豊かにするための開発事業との、調和のとれた行政施策が今日的課題となってきました。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター開設以来、埋蔵文化財保護の立場に立って、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和57・58年度に発掘調査した九戸郡軽米町駒板遺跡の調査結果をまとめたものであります。当遺跡は折爪サービスエリア予定地域の全面にわたるもので、広大な面積を有しており、縄文時代、奈良時代、中世・近世に及ぶ複合遺跡であります。調査の結果、多数の竪穴住居址やピット、陥し穴状遺構、そして近世の炭窯跡や、鋳鉄場跡を発見し、多くの縄文土器や土師器が出土しました。これらの調査結果は、北上山地北部地域はいうまでもなく本県の歴史解明の貴重な資料となるものと思います。

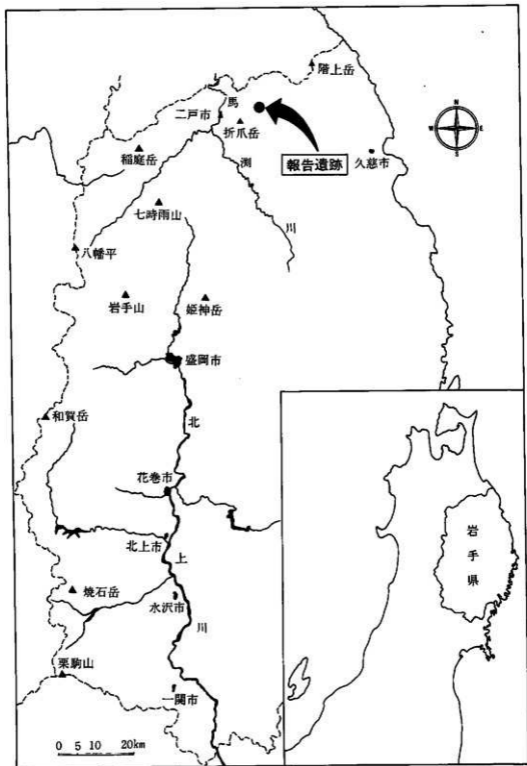
この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財への関心の喚起と理解に役立つことを期待いたします。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助・ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、県教育委員会、軽米町教育委員会をはじめ各研究機関や地元関係各位に感謝すると共に、今後のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

昭和60年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直



遺跡位置図

例 言

1. 本報告書は岩手県九戸郡軽米町大字山内第4地割字駒板111の1に所在する駒板遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 調査は東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急調査であり、日本道路公団仙台建設局の委託を受け、当財団法人岩手県埋蔵文化財センター（昭和60年から岩手県文化振興事業団）が発掘調査したものである。
3. 発掘調査期間は、第1次・昭和57年4月13日～11月10日、第2次・昭和58年4月13日～10月11日である。
4. 発掘調査面積は、78,700㎡である。
5. 調査担当者は、昭和57年度・遠藤勝博、鈴木恵治、岩渕久、光井文行、佐々木嘉直、三浦謙一、平井進、石川長喜、渡辺洋一、昭和58年度・近藤宗光、鈴木恵治、渡辺洋一、大原一則、岩渕久、光井文行、酒井宗孝である。
6. 検出された遺構は次のとおりである。

縄文時代竪穴住居址=66棟、奈良時代竪穴住居址=15棟、中世住居址=2棟、
炉址・焼土遺構=16基、埋設土器遺構=3基、ピット=264基、陥し穴状遺構=17基、
溝遺構=1条、近世炭窯跡=28枚、鋳鉄場跡=1箇所
7. 出土遺物の鑑定依頼等は次のとおりである。

石器の石質鑑定=岩手県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏
炭化物の年代測定（¹⁴C法）=学習院大学教授木越邦彦氏
焼土の年代測定（熱残留磁気推定）=青森県立八戸高等学校教諭松山力、新戸部隆氏
炭化材の樹種鑑定=岩手県木炭協会早坂松次郎氏
貝種鑑定=岩手県立博物館主任専門学芸調査員佐竹邦彦氏
8. 本調査にあたって御指導、御協力を賜ったのは次の方々である。記して感謝を表する。

青森県立八戸高等学校教諭松山力氏、弘前大学教授村越深氏、東北大学助教授須藤隆氏、
軽米町山内森林生産組合長大向市郎氏、軽米町教育委員会、日本道路公団八戸工事事務所。
9. 野外調査にあたり、地元軽米町をはじめ九戸村、二戸市の方々多数の協力を得た。
10. この報告書は3分冊にしてある。

目 次

第1分冊 古代～近世編

序	IVD39住居址	82
例 言	IVE37住居址	88
I. 序 論	IVG37住居址	92
1. 調査に至る経過	(2) 遺構外出土遺物	113
2. 調査方法と整理方法	2. 中世の住居址	114
3. 発掘調査経過	II J 76住居址	114
4. 遺跡の立地と環境	III A 76住居址	114
(1) 遺跡の位置	3. 近世以降の遺構と遺物	117
(2) 地形概観	(1) 鑄銭場跡	117
(3) 駒板遺跡の立地	(2) 炭窯跡	126
(4) 地質と基本層序	<西尾根> II B 47炭窯跡	126
(5) 軽米町の遺跡	II I 49炭窯跡	126
II. 検出された遺構と遺物	II J 46炭窯跡	126
1. 古代の遺構と遺物	II J 52炭窯跡	126
(1) 竪穴住居址	<西 谷> III B 53炭窯跡	128
<西尾根> II G 41住居址	<北尾根> IV A 31炭窯跡	128
II G 46住居址	IV A 36炭窯跡	128
II H 41住居址	IV B 39炭窯跡	130
II I 44-1住居址	IV E 31炭窯跡	130
II I 44-2住居址	IV E 35炭窯跡	130
III A 45住居址	IV F 22炭窯跡	130
<西 谷> III B 54住居址	IV I 25炭窯跡	132
III C 53住居址	IV I 28-1炭窯跡	132
III G 45住居址	IV I 28-2炭窯跡	132
<北尾根> IV B 36住居址	V E 30炭窯跡	132
IV D 34住居址	<中央尾根稜線部・東斜面>	
IV D 36住居址	IV B 77炭窯跡	134

IV B 81炭窯跡……………134	IV E 87炭窯跡……………143
IV D 74炭窯跡……………136	(3) 土 壘……………143
IV E 75炭窯跡……………136	4. 時期不明の溝跡……………144
IV I 83炭窯跡……………136	II E 58溝跡……………144
IV J 79炭窯跡……………136	III. まとめ……………146
V B 65-1炭窯跡……………136	1. 古代の遺構と遺物について……………146
V B 65-2炭窯跡……………140	2. 鋳銭場跡について……………152
V E 65炭窯跡……………140	3. 炭窯跡について……………159
〈中央尾根南斜面〉	IV. 科学分析……………160
II F 96炭窯跡……………140	・ 岩手県軽米町駒板遺跡の焼土
II J 95炭窯跡……………140	熱残留磁気測定の結果……………160
III D 88炭窯跡……………140	

表 目 次

第1表 検出遺構数…………… 3	第4表 軽米町遺跡一覧表……………24
第2表 昭和57年度発掘調査経過表…………… 7	第5表 奈良時代竪穴住居址一覧表……………151
第3表 昭和58年度発掘調査経過表…………… 7	第6表 岩手県内所在の銭座一覧……………153

第2分冊 縄文時代遺構編

第3分冊 縄文時代遺構外出土遺物編

図 版 目 次 (第1分冊)

第1図 土器実測図凡例…………… 6	第5図 軽米町遺跡分布図……………19
第2図 遺跡周辺地形区分図…………… 9	第6図 遺構配置略図……………27
第3図 遺跡周辺地形図……………11	第7図 遺構配置図1(西尾根・西谷右岸) ……29
第4図 土層断面柱状図……………15	第8図 遺構配置図2(西谷左岸)……………31

第9図	遺構配置図3(北尾根)……………33	第41図	II H41・II I 44-1住居址出土遺物 ……96
第10図	遺構配置図4(中央尾根稜線部)……35	第42図	II I 44-1住居址出土遺物……………97
第11図	遺構配置図5(中央尾根南斜面)……37	第43図	II I 44-1住居址出土遺物……………98
第12図	II G41住居址……………40	第44図	II I 44-1・III A45住居址出土遺物 ……99
第13図	II G46住居址……………42	第45図	III B54・III C53住居址出土遺物 ……100
第14図	II G46住居址埋土断面・カマド ……43	第46図	III C53住居址出土遺物……………101
第15図	II G46住居址炭化材出土状況……………44	第47図	III C53・III G45住居址出土遺物 ……102
第16図	II G46住居址炭化材断面……………45	第48図	IV B36住居址出土遺物……………103
第17図	II H41住居址……………47	第49図	IV D34住居址出土遺物……………104
第18図	II H41住居址カマド断面……………48	第50図	IV D34住居址出土遺物……………105
第19図	II I 44-1住居址……………49	第51図	IV D34・IV D36住居址出土遺物 ……106
第20図	II I 44-1住居址カマド……………52	第52図	IV D36・IV D39住居址出土遺物 ……107
第21図	II I 44-1住居址炭化材出土状況……………53	第53図	IV D39住居址出土遺物……………108
第22図	II I 44住居址遺物出土状況……………55	第54図	IV D39住居址出土遺物……………109
第23図	II I 44-2住居址……………59	第55図	IV E37住居址出土遺物……………110
第24図	III A45住居址……………60	第56図	IV E37・IV G37住居址出土遺物 ……111
第25図	III B54住居址……………62	第57図	遺構外出土遺物……………112
第26図	III B54住居址カマド断面……………63	第58図	II J 76住居址……………115
第27図	III C53住居址炭化材出土状況……………65	第59図	III A76住居址……………116
第28図	III C53住居址……………66	第60図	鑄銭場跡……………119
第29図	III C53住居址埋土・カマド断面 ……67	第61図	出土遺物(埴埴)……………121
第30図	III G45住居址……………70	第62図	出土遺物(埴埴)……………122
第31図	IV B36住居址……………73	第63図	出土遺物(埴埴・羽口) ……123
第32図	IV D34住居址1……………76	第64図	出土遺物(銭・湯放ち銭) ……124
第33図	IV D34住居址2……………77	第65図	出土遺物(銭竿・鉄製品) ……125
第34図	IV D36住居址……………81	第66図	II J 52・II B47・II I 49・III B53炭窯跡 ……………127
第35図	IV D39住居址1……………84	第67図	II J 46炭窯跡……………129
第36図	IV D39住居址2……………85	第68図	IV A31・IV A36・IV B39・IV E31炭窯跡 ……………131
第37図	IV E37住居址1……………90	第69図	IV E35・IV F22・IV I 25炭窯跡……………133
第38図	IV E37住居址2……………91	第70図	IV I 28-1.2・IV E30炭窯跡 ……135
第39図	IV G37住居址……………93		
第40図	II G41・II G46住居址出土遺物 ……95		

第71図 IV B77・IV B81・IV D74・IV E75炭窯跡	137	第75図 II E96・II J95・III D88・IV E87炭窯跡	142
第72図 IV I83・IV J79炭窯跡	138	第76図 土壘断面図.....	143
第73図 V B65-1・V B65-2炭窯跡	139	第77図 II E58溝跡.....	144
第74図 V E65炭窯跡.....	141	第78図 奈良時代竪穴住居址規模図.....	150

写真図版目次 (第1分冊)

1. 遺跡全景.....	109	25. IVD39住居址(1).....	203
2. 西谷・西尾根調査状況	100	26. IVD39住居址(2).....	204
3. 北尾根調査状況.....	101	27. IVD39住居址(3).....	205
4. 中央尾根調査状況.....	102	28. IVE37住居址(1).....	206
5. 土層断面.....	103	29. IVE37住居址(2).....	207
6. II G41住居址.....	104	30. IVE37住居址(3).....	208
7. II G46住居址(1).....	105	31. IV G37住居址.....	209
8. II G46住居址(2).....	106	32. II G41・II G46住居址出土遺物	210
9. II G46住居址(3).....	107	33. II H41・II I44-1住居址出土遺物	211
10. II H41住居址(1).....	108	34. II I44-1住居址出土遺物.....	212
11. II H41住居址(2)・II I44-1住居址(1)	109	35. II I44-1住居址出土遺物.....	213
12. II I44-1住居址(2).....	110	36. II I44-1・III A45住居址出土遺物	214
13. II I44-1住居址(3).....	111	37. III B54・III C53住居址出土遺物	215
14. II I44-1住居址(4)・III A45住居址	112	38. III C53住居址出土遺物.....	216
15. III B54住居址(1).....	113	39. III C53・III G45住居址出土遺物	217
16. III B54住居址(2)・III C53住居址(1)	114	40. IV B36住居址出土遺物.....	218
17. III C53住居址(2).....	115	41. IVD34住居址出土遺物.....	219
18. III C53住居址(3)・III G45住居址	116	42. IVD34住居址出土遺物.....	220
19. IV B36住居址(1).....	117	43. IVD36・IV D39住居址出土遺物	221
20. IV B36住居址(2).....	118	44. IVD39住居址出土遺物.....	222
21. IVD34住居址(1).....	119	45. IVD39・IVE37住居址出土遺物	223
22. IVD34住居址(2).....	120	46. IVE37・IV G37住居址出土遺物	224
23. IVD36住居址(1).....	121	47. 遺構外出土遺物.....	225
24. IVD36住居址(2).....	122	48. II J76・III A76住居址	226

49. 鑄錢場跡	227	57. IVA31・IVA36・IVB39炭窯跡	225
50. 出土遺物(埴塙)	228	58. IVE31・IVE35・IVI28-1.2炭窯跡	226
51. 出土遺物(埴塙)	229	59. IVF22・VE30炭窯跡	227
52. 出土遺物(埴塙・羽口)	230	60. IVB77・IVD74・IVE75炭窯跡	228
53. 出土遺物(錢・湯放ち錢)	231	61. IVI83・IVJ79・VB65-1・VE65炭窯跡	229
54. 出土遺物(錢竿・鉄製品)	232	62. IIE96・IIJ95・IIID88・IVE87炭窯跡	240
55. IIB47・II I49・IIJ52炭窯跡	233	63. 土壘断面・IIE58溝跡	241
56. IIJ46・IIIB53炭窯跡	234		

I. 序 論

1. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、青森線と二戸郡安代町で分岐して青森県八戸市に至る約68kmの高速道路である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は延長距離27.6kmであり、二戸郡一戸町で国道4号と接続する一戸インターチェンジを起点とし、折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村・軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和48年10月に第7次施行命令が出され、その間の埋蔵文化財の取扱いについて、県教育委員会事務局文化課と日本道路公団仙台建設局との協議が重ねられた。文化課においては昭和50年から51年度にわたり道路公団の協力を得て実施計画路線沿い400m幅を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。その結果にもとづき更に協議を重ね、遺跡保存とルート設定についても協議した。

昭和52年9月に路線発表となり、用地杭設置作業が開始され、昭和54年9月から用地買収へと進展していった。その間、文化課は発表された路線幅内における遺跡確認調査を実施した。しかし、山林地帯における分布調査や確認調査であったため、完全を期せず、その分は改めて山林伐採後に行うことにした。この時点における計画路線内の遺跡数は14遺跡約81,700㎡であった。

昭和55年度からは、文化課の調整と指導のもとに、第7次区間の発掘調査が当埋蔵文化財センターに委託され、同年には九戸村田代遺跡、軽米町吠屋敷Ia・君成田IV遺跡を発掘調査した。また9月には工事用道路予定地の分布調査も行われ、一戸町沼山・滝野来田遺跡が追加となったが、滝野来田遺跡は文化課の立会調査となった。

昭和56年には、軽米町土弓I・吠屋敷Ib・同II・同III・馬場野I・同II遺跡、九戸村道地II・同III・嶽I・同II・江刺家・同IV・同V・滝谷III遺跡、一戸町沼山・小井田IV遺跡を発掘調査した。この中で吠屋敷III・馬場野II・江刺家V遺跡は山林伐採後に遺跡確認されたものである。

昭和57年には、軽米町馬場野I・同II・駒板遺跡、九戸村嶽II遺物、一戸町小井田III・同IV・平船III遺跡を発掘調査した。この中で駒板遺跡は山林伐採後に遺跡確認されたものである。

昭和58年には、軽米町馬場野II・駒板遺跡、一戸町小井田III遺跡を発掘調査した。この年度で第7次区間におけるすべての発掘調査を終了し、当センターの調査遺跡数は22で231,010㎡であった。

2. 調査方法と整理方法

(1) 調査方法

① 調査区の設定

日本道路公団が実施した調査区域の測量成果を利用し、平面直角座標 $X = +50.45\text{m}$ 、 $Y = +32.90\text{m}$ の点を原点とした。この原点から南北方向の Y 軸、東西方向の X 軸を設定し、それぞれを50m毎に区切り、遺跡の北端から南端に向って01、11、21、……101とし、遺跡の西端から東端に向かってⅠ、Ⅱ、Ⅲ、……Ⅵとした。この両者の組み合わせによる呼称で大区画 $50 \times 50\text{m}$ を設定した。大区画の呼称はⅠⅠ区、Ⅱ11区などとなる。大区画内は5m間隔で10等分し、北から南へ向かって1、2、3、……10、西から東へ向かってA、B、C、……Jと呼び、両者の組み合わせによる呼称で小区画とした。これらの小区画の呼称はⅠA01、ⅡA02などとなる。原点はVA41である。なお Y 軸は真北を示す。

(2) 調査地域の略称区分

調査対象地域が広大で地形が複雑なことや、いくつかの班に分かれて調査したこともあって、地形に応じて調査区域を分けて、次のように略称した。

北尾根：調査区域の北にあって、東から西にのびる尾根稜線部とその北側・南側斜面の略称である。北側斜面は急傾斜で面積が小さい。南側斜面は緩斜面で面積は大きい。

西尾根：調査区域の北西にあって、北尾根が屈曲して南方にのびる尾根の略称である。この尾根の調査区域は斜面で、北西～西～南～南東側である。

東尾根：調査区域の東側にあって、南北にのびる尾根である。北尾根や中央尾根（後述）はこの尾根の枝尾根となっている。調査区域はこの尾根の裾の部分である。

中央尾根：東尾根から枝尾根として南西にのびる尾根で、その最頂部がほぼ調査区域の中央部にある。稜線部とその斜面の略称である。この尾根で発見された遺構は多く、地区を更に稜線部、南斜面に分けている。

北谷：北尾根の北側の谷部の略称である。

西谷：西尾根と中央尾根の間の谷部の略称である。更に右岸と左岸にわけてある。

東谷：東尾根と中央尾根の間の谷部の略称である。

③ 遺構名

遺構の名称は、遺構が発見された小区画名に、遺構の種別名を付して表わした。同一小区画内に同種の遺構が発見されたときは、末尾に発見順に番号を付して区別した。例えばⅢC87-1住居址、ⅢC87-2住居址、ⅢC87-3住居址である。

④ 粗掘・検出

最初に、重機を使用してトレンチ掘りによる粗掘りをし、遺構の発見された地区は全面表土除去を行なった。遺構・遺物が発見された地区は、北尾根（稜線部・南斜面）、西尾根（南～南東側斜面）、東谷の一部（谷頭・中央尾根東斜面＝以下中央尾根稜線部に含める）、中央尾根（稜線部・南斜面）、西谷であり、その検出数は次表のとおりである。

北谷、西尾根～西側・東斜面、東尾根、東谷の大部分、中央尾根北西斜面斜面からは遺構が検出されず、検出作業後土捨場とした。

第1表 検出遺構数

種別	地区	北尾根	西尾根	西谷右岸	西谷左岸	中央尾根稜線部	中央尾根南斜面	計
縄文時代竪穴住居址		8	4	4	0	4	46	66
奈良時代竪穴住居址		6	6	3	0	0	0	15
中世住居址		0	0	0	2	0	0	2
石址・焼土遺構		3	1	2	2	2	6	16
埴段土器遺構		0	0	0	0	0	3	3
ピット		68	24	11*	2	104	55	264
竪し穴状遺構		7	1	0	0	6	3	17
溝遺構		0	0	1	0	0	0	1
近世炭灰跡		10	4	1	0	9	4	28
鋳銭場跡		0	0	0	0	0	1	1

* 11基のうち7基は竪坑状のものである。

⑤ 精査・記録

昭和57年度精査地区は、北尾根東半分、西谷右岸、中央尾根最頂部から東側の稜線部及びそれに連なる東谷谷頭、尾根東斜面、南斜面東半分である。昭和58年度の精査は大略残りの西半分、北尾根西半分、西尾根、中央尾根最頂部から西側及び南斜面西半分、西谷左岸である。

遺構の平面図・断面図の実測は縮尺20分の1で記録した。住居址のカマド・炉などの断面図・焼土遺構平面図・断面図等の実測は縮尺10分の1で記録した。また細部の詳細図も縮尺10分の1で記録した。炭窯跡で大型のものや、溝、鋳銭場跡などは縮尺40分の1で記録した。

土層の色調は「新版標準土色帖」を利用した。

写真による記録は、モノクロ35mm版・6×7cm版、カラーズライド35mmの3種である。空中写真は57年、58年の2回調査終了時に撮影した。

(2) 整理方法

① 本文の記述

原則として、各調査員が担当した発掘調査地点をそれぞれ記述したが、昭和57年度発掘調査分は、昭和58年度発掘調査担当者が分担して記述した。

記述分担は次のとおりである。

第1分冊 (古代～近世編)

I 序論……………近藤宗光

II 検出された遺構と遺物

1、古代の住居址と遺物……………鈴木恵治 (西尾根・西谷)、大原一則 (北尾根・遺構外)

2、中世の住居址と遺物……………鈴木恵治

3、近世以降の遺構と遺物

(1) 鑄銭場跡……………鈴木恵治

(2) 炭窯跡……………鈴木恵治 (西尾根・西谷・中央尾根東斜面)、大原一則 (北尾根・中央尾根稜線部)、酒井宗孝 (中央尾根南斜面)

(3) 土塁……………岩淵 久

4、時期不明の溝跡……………鈴木恵治

III まとめ

1、古代の遺構と遺物について……………大原一則

2、鑄銭場跡について 3、炭窯跡について……………鈴木恵治

IV 科学分析……………青森県立八戸高等学校 松山 力

第2分冊 (縄文時代遺構編)

I 検出された遺構と遺物

1、竪穴住居址……………渡辺洋一 (西尾根)、鈴木恵治 (西谷)、岩淵 久 (北尾根・中央尾根稜線部)、光井文行 (中央尾根南斜面)

2、焼土遺構・炉跡……………渡辺洋一 (西尾根)、鈴木恵治 (西谷)、岩淵 久 (北尾根)、大原一則 (中央尾根稜線部)、酒井宗孝 (中央尾根南斜面)

3、埋設土器……………酒井宗孝

4、陥し穴状遺構……………渡辺洋一 (西尾根)、岩淵 久 (北尾根)、鈴木恵治・大原一則 (中央尾根稜線部)、酒井宗孝 (中央尾根南斜面)

5、ピット……………鈴木恵治 (西尾根・西谷・中央尾根稜線部)、岩淵 久 (北尾根)、大原一則 (中央尾根稜線部)、酒井宗孝 (中央尾根南斜面)

II まとめ

1、竪穴住居址……………光井文行 (縄文後期)、岩淵 久 (縄文晩期)

2、陥し穴状遺構……………近藤宗光

3、ピット……………近藤宗光

III 科学分析……………学習院大学 木越邦彦

第3分冊（縄文時代遺構外出土遺物編）

I 遺構外出土遺物

- 1、土器
- 2、土製品
- 3、石器・石製品

II まとめ

- 1、土器
- 2、土製品
- 3、石器・石製品
- 4、遺跡全体について

② 遺構図

遺構配置図：遺跡全体を示すものと各地区毎のものがある。遺跡全体を示すものは2000分の1の縮尺の略図で掲載した。各地区毎のものは、西尾根及び西谷右岸、西谷左岸、北尾根、中央尾根稜線部、中央尾根南斜面の5葉に分け、縮尺300分の1で掲載した。これらの図面は野外調査で作成した遺構平面図をもとに縮尺100分の1で作成した。

各遺構図：野外調査時の実測図をトレースし、住居址やピット類などの平面図、断面図は縮尺40分の1で載せてある。炉やカマドなど小規模なものの断面図は縮尺20分の1で載せ、鋤鋤場跡や大型の炭窯跡の平面図、断面図は縮尺80分の1で載せてある。住居址の埋土の単純なもの、ピット類の埋土などの断面図は1方向のみ載せた。図中の記号等は次のとおりである。

：地山、：焼土、：炭化材、Gまたは：礫
：十和田a降下火山灰（略称 To-a）、P：土器、P₁、P₂…P_n：柱穴

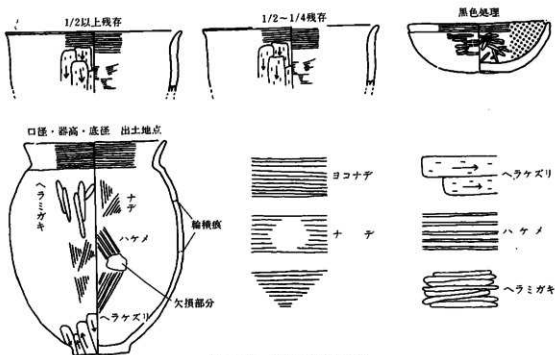
写真図版：原則として遺構図版に対応させて載せた。

③ 遺物図版

実測図：土器の法量、出土地点、残存程度、輪積み痕、欠損部分の表わし方や土師器の調整痕、黒色処理の表わし方は下図のとおりである。隆帯と沈線の表わし方は平面図では同じであるが断面図にその違いを表わした。残存程度4分の1以下のものは報告を省略したものと平面実測や拓本で載せたものがある。

土製品、石器、石製品は、表、裏、横の3方向から表わすことを原則としているが、上方や下方から表わしたのものもある。

図版：土器は3分の1、石器、石製品、土製品は2分の1で掲載することを原則としたが、原則によらないものもある。それぞれの図版には縮尺を示してある。



第1図 土器実測図凡例

3. 発掘調査経過

本遺跡は、山林伐採後の昭和56年に発見され、遺跡として登録されたものである。発掘調査は、当初対象面積35,000㎡でスタートしたが、調査と併行して遺跡範囲の確認を行った結果、78,700㎡の面積を調査することとなった。昭和57年度は、4月13日に野外調査を開始し、ほぼ全域の粗掘りと東側地区51,000㎡の精査を行い、11月10日に終了した。精査した部分の大部分は委託者に引き渡しをした。

昭和58年度は残り西側地区27,700㎡の一部の粗掘りと全面的精査を行った。調査は4月11日に開始し、10月11日で終了した。その間に精査の終了した地区を委託者に引き渡した部分がある。

(1) 昭和57年度

調査の経過の概略は次表のとおりである。調査対象面積や調査終了地区の引き渡し、来年度の調査などについては、県教委文化課立合いのもと、日本道路公団八戸工事事務所と9月30日に話し合いをもった。その結果、大略東半分を調査終了時に引き渡しすることとし、この年度は東半分の調査を重点的に行うこととした。

第2表 昭和57年度発掘調査経過表

月	4	5	6	7	8	9	10	11	備考
補物撤去		全面							
粗掘		全面							
検出		各地区							
精査			東谷 西谷 中央尾根 東谷管頭 中央尾根頂部 北尾根	西谷 中央尾根 中央尾根 中央尾根頂部 北尾根	西谷 中央尾根 中央尾根	西谷		中央尾根	右岸 遺構なし
			東谷	東谷管頭 中央尾根頂部			北尾根 中央尾根南斜面 西谷		終了 " 東半分終了 " " " 右岸終了

(2) 昭和58年度

57年度に調査を終了し、委託者に引き渡した東半分での道路工事が進行するなかで、西半分の地区を発掘調査した。調査は57年度に残した西尾根の一部の粗掘りと各地区の再検出・精査である。道路工事予定との調整をはかるなかで、年度途中、精査の終了した地区である西谷左岸を6月1日、中央尾根線部を7月12日に委託者に引き渡した。調査は10月11日に終了した。本年度の調査経過の概略は次表のとおりである。

第3表 昭和58年度発掘調査経過表

月	4	5	6	7	8	9	10	11	備考
粗掘						西尾根			57年度残り分
検出		中央尾根線部 中央尾根南斜面 西谷左岸	西尾根	北尾根					
精査		中央尾根線部 中央尾根南斜面 西谷左岸		北尾根					7月12日引渡し 6月1日引渡し

4. 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置

駒板遺跡は、岩手県九戸郡軽米町大字山内第4地割字駒板地内にあり、北緯40°17'34"、東経141°25'35"に位置する。軽米町役場の南西4.5kmにあたる。軽米町は岩手県北部にあり、北は県境で青森県名川町・南郷村に接し、東は種市町・大野村、西は二戸市、南は九戸村・山形村に接している。

(2) 地形概観

軽米町は、北上山地の北部にある。北上山地は南北に延びる紡錘形を呈する高原状の山塊で、北端は青森県八戸市、南端は宮城県牡鹿半島であり、岩手県の東側を占め、県全面積のおよそ3分の2にあたる。この山地は中央部が最も高く、北方と南方は次第に低くなる。

軽米町は、東を久慈平岳(706m)、南を鷲岳(567m)、西を折爪岳(852m)などの残丘状山地によって囲まれた、標高200~400mの地塊性の丘陵地である。北は徐々に標高を低くし青森県東南部となる。この付近は松山力によって蒼前平段丘と呼ばれる段丘が発達しており、その一部は軽米町北西部にもある。

軽米町西部には瀬月内川、東部には雪谷川があり、これによってこの丘陵は開折されている。瀬月内川は葛巻町北部の多々良山と明神岳の間付近に源を発し、南北に延びる就志森(770m)一傾城峠(736m)一小倉岳(652m)一折爪岳を結ぶ分水嶺の東側山麓に沿って北流する。その後軽米町北西部・晴山付近で北東に向きを変え、軽米町北部・長倉付近で雪谷川と合流し、新井田川と名を変えて北流し、八戸市で太平洋に注ぐ。一方雪谷川は九戸村雪屋付近に源を発し、北東に流れ、軽米町小軽米付近で小玉川と合流して北西に向きを変え、更に軽米町市街を過ぎた後北流して瀬月内川と合流する。瀬月内川の長さ約49km、雪谷川の長さは約31kmである。いずれの流域にも段丘はあまり発達せず、小規模な谷底平野などが見られる程度である。高家、円子、小軽米、軽米町市街はそのうちでも比較的大きい沖積地である。

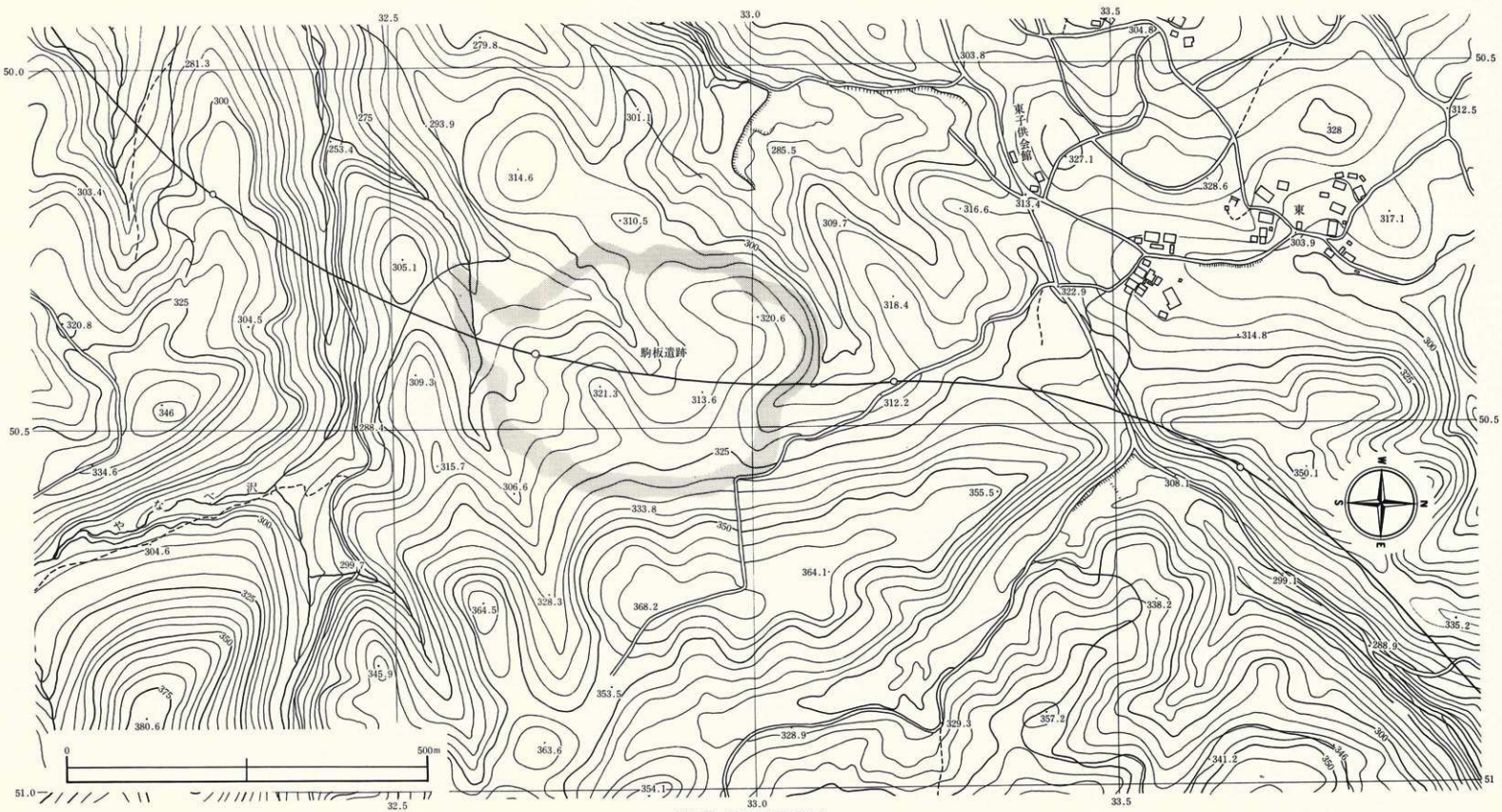
(3) 駒板遺跡の立地

駒板遺跡は瀬月内川と雪谷川に挟まれた丘陵(200~400m)の西斜面にある。この丘陵には瀬月内川に注ぐ支流や沢が東西にいくつも入っており、そのうち新井田付近で瀬月内川に注ぐやなべ沢を約1.5km溯った付近にある小規模な尾根と沢に遺跡は広がっている。遺跡は東北縦貫自動車道八戸線の折爪サービスエリア予定地であり、発掘対象となった地域は、北側にある東から西にのびる尾根とその斜面(北尾根と略称)、北尾根が屈曲して南西方向にのびる西側尾根の斜面部分(西尾根と略称)、南北方向にのびる東側尾根の西側斜面(東尾根と略称)、東尾根から西に張り出している遺跡中央部の尾根とその斜面(中央尾根と略称)、西尾根と中央尾根に



第 2 図 遺跡周辺地形区分図

若手編「土地分類基本調査・一冊」による



第3図 遺跡周辺地形図

挟まれた谷の部分（西谷と略称）であり、4つの尾根と3つの谷によって構成されている。遺跡の現状は山林である。昭和の初期には馬の放牧地であったところである。

(4) 地質と基本層序

軽米町付近は古生代二疊紀の地層と見られる北上山地北部型古生層で、チャート、粘板岩、砂岩を主体とし、輝緑凝灰石や石灰岩が層状やレンズ状で小さく分布している。軽米町の西側二戸市付近になると新世代第三紀層で安山岩類、砂岩、礫岩などを主体とする層に変わる。いずれの地域も、その上位は十和田・八甲田系と推定される火山砕屑物によっておおわれている。これは古い順に、洪積世では天狗袋火山灰層、高館火山灰層、八戸火山灰層、沖積世では二ノ倉火山灰、南部浮石、中沢浮石、十和田b降下火山灰、十和田a降下火山灰である。

本遺跡でも、この火山砕屑物が厚い堆積を示し、基本土層もそれを主体としている。調査対象面積が78,800㎡と広く、地形的にも4つの尾根と3つの谷に分かれるなど、地区によって相違がみられるが、次のような基本土層になっている。なお、地区毎の特徴は後に述べる。

〈基本土層〉

- I層：表土。「クロボク」。腐植物を多く含み黒色～黒褐色を呈する。尾根稜線部では薄く、谷部では厚い。
- II層：白色粉末状火山灰。「十和田a降下火山灰」。小ブロックでは遺跡内各所に見られるが、面的な広がりを持つ場合は古代住居址埋土に限られる。
- III層：小粒の白色浮石を含む黒色砂質土。「十和田b降下火山灰」を含む層。遺跡内各所で見られるが、この火山灰は含まれる量が少ない。斜面下位では層状を呈する場合もある。
- IV層：暗褐色～明褐色砂質土ないし砂。「中沢浮石（アワズナ）」及びそれを含む層。尾根稜線部では見られない。
- V層：浮石を含む黒褐色～暗褐色砂質シルト。稜線部には見られない。
- VI層：黄褐色パミス。軟らかい軽石。「南部浮石（ゴロク）」。
- VII層：褐色の粘土質シルトないしシルト質粘土。「八戸火山灰（カベ）」。稜線部には見られない場合がある。
- VIII層：八戸火山灰より古期の火山灰。

遺跡の大部分は傾斜地のため、表土の移動があり、稜線部ではVIII層が露出している所があり、斜面部には二次堆積が一般的に見られ、下位ではそれが厚く堆積している。以下に各地区の土層を述べる。

〈北尾根〉

北斜面は急傾して北谷に落込んでおり、南斜面はゆるやかに下がり西谷となる。土層につい

て両者に違いがあるので分けて述べる。

① 北尾根北斜面

I 層 7.5YR1.7/1 黒色土。表土で腐植土である。黄褐色パミス（径1～10mm）を微量混合している。斜面下位では厚い。層厚15～70cm。

II 層 十和田a降下火山灰。斜面上位に部分的に見られる。

III 層 欠く。

IV 層 10YR2/1 黒色土。中振浮石層及びその再堆積層である。黄褐色パミス（径1～5mm）を微量含み、さらさらしている。層厚40～50cm。

V a 層 10YR2/2 黒褐色土。黄褐色パミス（径1～10mm）を含み、しまりがある。層厚10～50cm。斜面下位ほど厚い。

V b 層 10YR3/3 暗褐色土。黄褐色土パミス（径1～20mm）を含み、南部浮石の再堆積層である。しまりなくくずれやすい。層厚5～25cm。斜面下位では厚い。

VI 層 7.5YR8/8 黄橙色土。南部浮石層である。層厚20～30cm。

VII a 層 10YR2/2 黒褐色土。黄褐色パミス（径1～5mm）を微量含み、しまっている。層厚5～20cm。

VII b 層 10YR4/4 褐色土。八戸火山灰層。しまっている。層厚20～30cm。

VII c 層 10YR5/4 によい黄褐色土。八戸火山灰層。しまっている。層厚20～35cm。

② 北尾根南斜面

I 層 7.5YR2/1 黒色土。表土で腐植土である。黄褐色パミス（径3～5mm）を微量含む。層厚10～20cm。斜面下位では厚い。

II 層 十和田a降下火山灰。奈良時代竪穴住居址の埋土には厚く堆積しているが、一般的にはない。

III 層 十和田b降下火山灰を含む層。一般的にはないが斜面下位に見られるところがある。

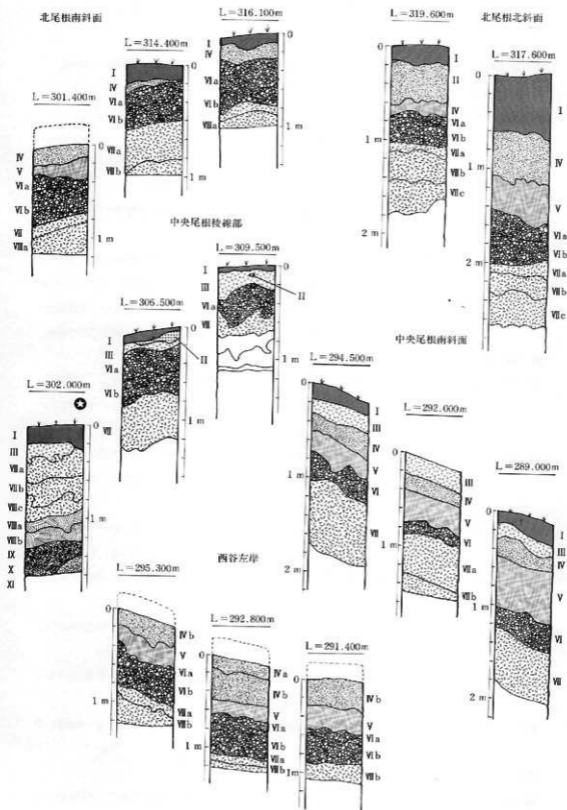
IV 層 7.5YR3/4 褐色土（斜面下位では黒色土）。黄褐色パミス（2～10mm）を微量含み、中振浮石の再堆積層である。層厚2～20cm。

V a 層上位 7.5YR5/6 明褐色土。 } 斜面下位に見られる。黄褐色パミス（5～30mm）と中振
V a 層下位 7.5YR4/4 褐色土。 } 浮石を含む再堆積層と思われる。層厚10～20cm。

V b 層 7.5YR5/8 明褐色土。風化された南部浮石の再堆積層である。層厚10～30cm。

VI 層 7.5YR5/8 明褐色土。南部浮石層である。層厚15～35cm。斜面下位が厚い。

VII a 層 7.5YR5/6 明褐色土。黄褐色パミス（5～30mm）を少量含む。このパミスは上位ほど多い。層厚10cm前後。斜面中位にはない。



第4图 土层断面柱状图

Ⅶb層 7.5YR4/4 褐色土。八戸火山灰層。上位に黄褐色パミスを含む。層厚10~40cm。

Ⅶc層 7.5YR4/6 褐色土。八戸火山灰層。粘土質である。

〈中央尾根稜線部〉

中央尾根稜線から西斜面にかけての土層断面である。

Ⅰ層 10YR3/2 黒褐色シルト。表土であり、砂礫が若干混入している。稜線部はうすく、斜面下位ほど厚くなる。層厚5~20cm。

Ⅱ層 十和田b降下火山灰。ブロックで混入するところや、うすい層をなすところがあるが、純層ではない。

Ⅲ層 10YR3/3 暗褐色シルト。上位ほど暗褐色を呈し、下位ほど褐色がかってくる。十和田a降下火山灰が粉末状でまばらに混入するところがある。十和田b降下火山灰は殆んど観察されない。黄褐色パミス微量混入。径1~10mmの礫若干混入。層厚5~30cm。

Ⅳ層 欠く。

Ⅴ層 10YR4/6 褐色土。黄褐色パミスを含む再堆積層である。しまりがなく、くずれやすい。径1~10mmの礫を混入する。下位の傾斜が急になる肩部にはこの層及びⅥ層はない。層厚10~30cm。

Ⅵ層 南部浮石層。10YR4/6 褐色土を多量に含み、純層ではない。上位の稜線の背にあたる部分にはこの層は見られない。また上記のように下位でも見られない。層厚20~30cm。

Ⅶ層 10YR5/6 黄褐色土。八戸火山灰層。砂質土を混入した粘土質で、かたくしまりがあつた。径1mmほどの礫や南部浮石も混入している。

このⅦ層を細分すると(第4図の④印)次のとおりである。この観察地点は上述のように稜線部から南斜面にかわる肩部にあたり、南斜面でも同様の層序になる。

Ⅶa層 10YR5/8 黄褐色土。八戸火山灰の汚れ再堆積層である。やわらかく粘性がない。黄褐色パミス(2~10mm)を微量含む。

Ⅶb層 10YR6/8 明黄褐色土。八戸火山灰の再堆積層である。粘性がない。黄褐色パミス(2~10mm)を少量含む。

Ⅶc層 10YR6/8 明黄褐色土。八戸火山灰層である。上位に黄褐色パミス(2~10mm)を微量含む。

Ⅶ層の下位は次のとおりである。

Ⅶa層 10YR5/6 黄褐色土。八戸火山灰より下位の火山灰層の漸移層である。粘性が少しある。

Ⅷb層 10YR5/8 黄褐色土。八戸火山灰より下位の火山灰層。粘性がある。

Ⅸ層 10YR5/6 黄褐色土。粘土質のやわらかい火山灰層である。

Ⅹ層 10YR6/8 明黄褐色土。粘土質細粒火山灰である。粘性がある。

Ⅺ層 泥岩。

〈中央尾根南斜面〉

Ⅰ層 10YR3/2 黒褐色土。表土である。やわらかく粘性が少ない。黄褐色バミス（径2～3mm）や炭化物を微量含む。層厚10～20cm。

Ⅱ層 十和田a降下火山灰。この地区では層として一般的でないが、遺構内に再堆積層としてうすくみられ、下位の沢沿いのところどころに帯状に見られる。

Ⅲ層 10YR2/3 黒褐色土。十和田b降下火山灰が微量含まれる。粘性はない。黄褐色バミス（径3mm前後）や炭化物を微量含む。層厚10～20cm。

Ⅳ層 10YR4/6 褐色土。中塚浮石を起源とする再堆積層で、腐植土が混合。粘性はない。黄褐色バミス（径2～15mm）や炭化物を微量含む。層厚15～30cm。

Ⅴ層 10YR3/4 暗褐色土。中塚浮石及び南部浮石（径2～15mm）を母体とする腐植土である。黄褐色バミスはブロックで含まれているところもある。層厚20～55cm。

Ⅵ層 10YR5/6 黄褐色土。南部浮石層である。層厚10～30cm。

Ⅶ層 10YR5/8 黄褐色土。八戸火山灰層である。細分については上述のとおりである。層厚50～80cm。

〈西谷左岸＝中央尾根西側緩斜面〉

中央尾根の西斜面は、緩かに下降した後急激に下がり、また緩斜面を形成しており、この部分にも遺構が確認された。次にその部分の土層を示す。なお、この緩斜面の先は西谷によって浸蝕されている。この地区の表土は厚いが、土層断面ではⅠ～Ⅲ層を省略してある。

Ⅳa層 10YR3/3 暗褐色土。中塚浮石再堆積層。やわらかく、粘性がない。層厚は15～35cm。

Ⅳb層 7.5YR2/2 黒褐色土。中塚浮石起源の再堆積層である。黄褐色バミス（径10～20mm）を微量含む。やわらかい。層厚30cm前後。

Ⅴa層 7.5YR2/2 黒褐色土。黄褐色バミス（径10～20mm）を微量含む。やわらかい。層厚15～25cm。

Ⅴb層 10YR5/6 黄褐色土。黄褐色バミス（径10～20mm）を多量に含む。層厚10～20cm。

Ⅵ層 南部浮石層。層厚20～30cm。

VII a 層 10YR3/4 暗褐色土。八戸火山灰層。黄褐色バミス（径10～20mm）が上位に少量含まれる。

VII b 層 10YR4/6 褐色土。八戸火山灰層。黄褐色バミス（径2～5mm）を微量含む。しまりがある。

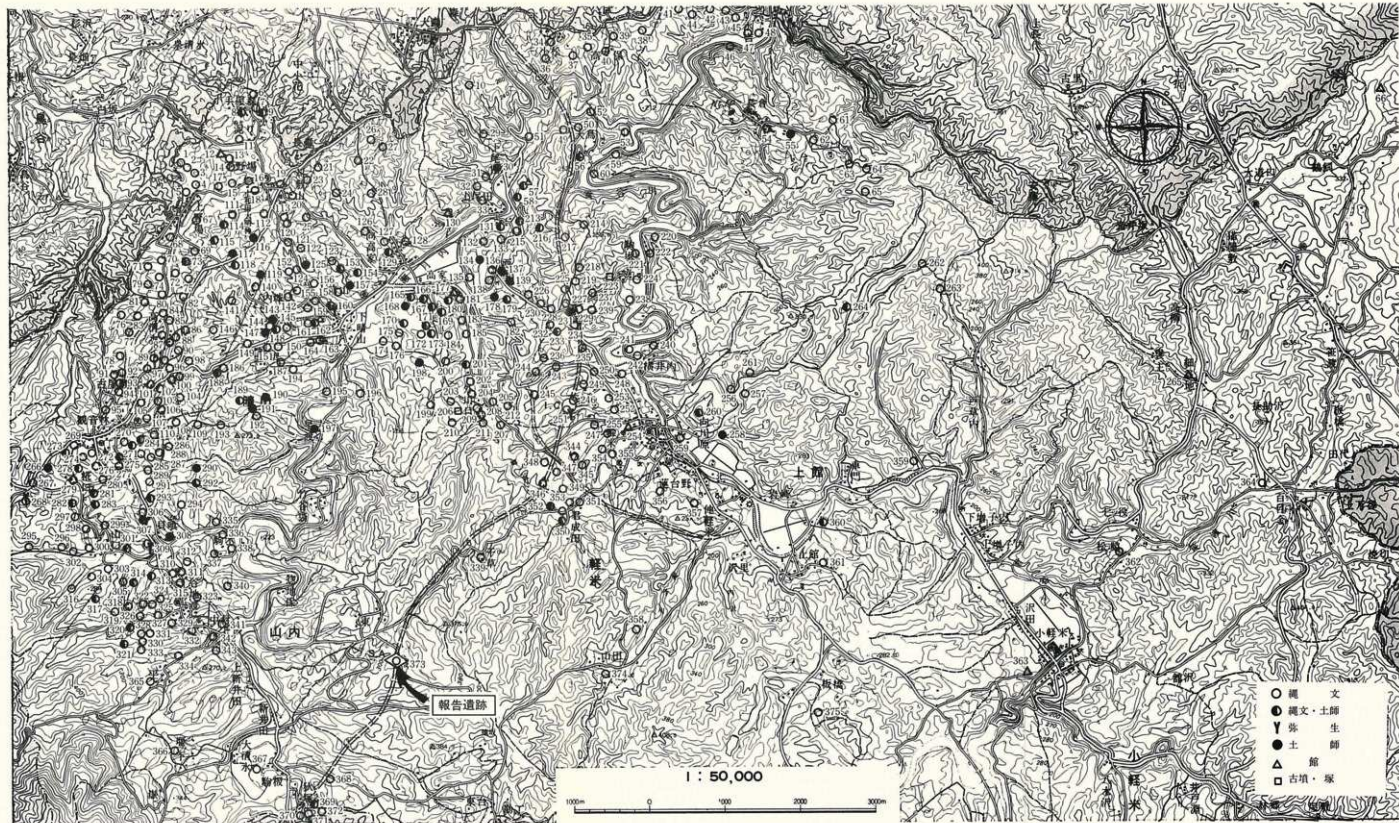
参考文献

- 中川久夫 1981 第四系：北上川流域地質図説明書 長谷地質調査事務所
大池昭二 1972 十和田火山東麓における完新世テフラの編成：第四紀研究第11巻第4号
大池昭二 1973 十和田火山東麓の火山灰：東北の土壌と農業
大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之 1966
馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰：第四紀研究第5巻第1号
松山力 1982 遺跡の立地と周辺の地質：鴨平I遺跡 青森県教育委員会
松山力 1981 周辺地域の地質：中曾根II遺跡発掘調査報告書 二戸市教育委員会
松山力 1981 遺跡群及び周辺の地形・地質：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I
一戸町教育委員会
岩手県 1971 土地分類基本調査「一戸」
佐々木憲直 1983 遺跡の立地と環境：吠屋敷I b遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター
工藤利幸 1983 遺跡の位置と環境等：馬場野I遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター

(5) 軽米町の遺跡

軽米町の遺跡は、岩手県教育委員会文化課の調査によれば、集落・遺物散布地362、城館10、古墳1、不明2計375箇所であり、その分布の状態は第5図に示すとおりである。（S57. 10. 31現在）遺跡数は、東北縦貫自動車道八戸線や畑作地帯総合整備事業などの開発の事前分布調査によって急激に増えており、分布の状態もそれに依った様相を示している。即ち確認された遺跡の大多数は軽米町北西部に集中しており、小軽米地区特に南東部には殆んど遺跡の確認がなされていない。軽米町の遺跡の多くは、現在までの発掘調査例からみて、丘陵地の尾根や沢沿いに立地しており、小軽米地区も今後、遺跡の確認作業が進めば、多数の遺跡が発見されると思われる。

この確認された遺跡の大部分は縄文時代のものである。時期については不明のものが多いが、時期別に報告されているものをみると、縄文時代早期と報告されているものは上館地区に2箇所ある。しかし発掘調査では土弓Iや馬場野II遺跡などで早期の土器片が出土している。縄文時代前期とされているものは上館地区、駒木地区、軽米地区などに4箇所報告されている。発掘調査では吠屋敷Ia・Ib遺跡・大日向II遺跡からこの時期の竪穴住居址、吠屋敷III遺跡から土器片が得られており、分布調査とほぼ一致している。縄文時代中期とされているものは駒木地区と上館地区の2箇所だけであるが、発掘調査では吠屋敷Ia・Ib・II・III遺跡や大日向II遺跡、



第5図 軽米町遺跡分布図

馬場野Ⅰ・Ⅱ遺跡、君成田Ⅳ遺跡などから竪穴住居址や土器などが発見されている。また、駒板、土弓Ⅰ遺跡でも土器片が出土している。縄文時代後期とされる遺跡は多く、約20箇所ほどで町内各地に発見されている。発掘調査された遺跡でも、叭屋敷Ⅰa・Ⅱ・Ⅲ、馬場野Ⅰ・Ⅱ、君成田Ⅳ、駒板、大日向Ⅱなどの遺跡で多数の竪穴住居址を検出している。また長倉や土弓Ⅰ遺跡などでもこの時期の土器片が出土している。縄文時代晩期とされる遺跡は更に多い。約50箇所ほどで町内各地に発見されているが、特に軽米町市街のある沖積地周辺やその北方の駒木地区、町南西部の狄塚地区に集中している。発掘調査では、叭屋敷Ⅰa、馬場野Ⅱ、君成田Ⅳ、駒板、大日向Ⅱなどの遺跡でこの時期の竪穴住居址を検出している。また長倉、板橋、野場遺跡や土弓Ⅰ、叭屋敷Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ、馬場野Ⅰなどの遺跡でも土器片が出土している。

弥生時代とみられるものは、晴山地区などで5箇所ほど確認されているが、発掘調査では、馬場野Ⅱ遺跡で多くの竪穴住居址が発見されている。また土弓Ⅰ、君成田Ⅳ遺跡では土器片が出土している。

土師器を出土する遺跡は多い。約80箇所ほどで町内各地に見られる。沢沿いなどの沖積地周辺に多いが丘陵地にも若干見られる。発掘調査では、君成田Ⅳ、駒板遺跡から奈良時代の住居址、叭屋敷Ⅰa、大日向Ⅱ遺跡から奈良時代や平安時代の住居址、叭屋敷Ⅰb、叭屋敷Ⅱ遺跡などから平安時代の住居址が発見されている。

その他の遺跡としては、後北C式の土器片を出土したものが1箇所、城館跡が10箇所、古墳といわれているものが1箇所などである。発掘調査では馬場野Ⅰ遺跡で近世墓塚、駒板遺跡で中世住居址、近世鋳銭場跡などが発見されている。

町内で発掘調査された遺跡は、上述のとおりであるが、それを以下に整理して示す。

① 鈴木孝志氏の報告によるもの（「日本考古学年報 17」による）

●板橋遺跡（大字円子字板橋） 調査期間・昭和39年8月5日～8月10日

雪谷川上流の小支流による段丘上、標高200mの地点を調査し、縄文時代晩期大洞 C₁～C₂の土器が出土したと報告している。

●下野場遺跡（大字軽米第8地割54俗称下野場） 調査期間・昭和39年8月3日～8月4日
雪谷川の小支流成田川の北岸、せまい谷間に面した段丘、標高200mの地点を調査し、縄文時代晩期大洞 A'の土器が出土したと報告している。

●明神下遺跡（大字長倉第4地割92の1俗称明神下） 調査期間・昭和39年5月2日～5日
長倉部落にあり、新井田川の小支流の水源地へ向って東に傾く斜面を中心とする標高300mの地点を調査し、縄文時代後期十腰内4～5、加曾利B併行の土器が得られ、その下位より大湯式土器が出土したと報告している。また晩期の大洞B～C式土器、土偶、石器類も出土したと報告している。

② 八戸平原開拓事業に伴うもの（当岩手県埋蔵文化財センターの発掘調査）

●長倉No.14遺跡（大字長倉） 調査期間・昭和54年10月1～11月2日、発掘面積・3,372㎡
長倉部落西方の丘陵頂部（標高250m）を調査し、ピット8基、溝1条を検出し、縄文時代後期と思われる土器片が出土したと報告している。

●長倉遺跡（大字長倉） 調査期間・昭和55年10月13日～11月18日、発掘面積1,500㎡
長倉部落東方の丘陵緩斜面（標高250m）を調査し、ピット3基を検出し、縄文時代前期土器片などが出土したと報告している。この付近は鈴木孝志氏が明神下遺跡として調査報告したところである。

③ 東北縦貫自動車道建設に伴うもの（当岩手県埋蔵文化財センターの発掘調査）

●土弓Ⅰ遺跡（大字軽米第15地割字駒木） 調査期間・昭和56年4月13日～6月6日、発掘面積・5,580㎡、軽米町役場の北西1.5km、国道340号線沿いの丘陵の南側斜面（標高200m）を調査し、ピット5基を発掘、縄文時代早期後半を中心に、中期・後晩期の土器片、弥生土器片、石器若干などが出土したと報告している。

●叭屋敷Ⅰa遺跡（大字軽米第13地割字叭屋敷） 調査期間・昭和55年4月14日～11月14日、発掘面積・13,450㎡、軽米町役場の北西0.8km、国道395号線沿いの丘陵尾根先端部緩斜面を調査し、縄文時代竪穴住居址41棟（前期前葉1、中期末34、後期初頭1、後期中葉2、晩期中葉1、時期不明2）、奈良時代住居址1棟、平安時代住居址7棟、炉址2基、ピット101基、陥し穴状遺構4基を発掘、遺構及び埋没谷を中心に、縄文式土器片（前、中、後、晩期）、土師器片、石器類、土製品などが出土したと報告している。

●叭屋敷Ⅰb遺跡 調査期間・昭和56年4月13日～8月20日、発掘面積・12,740㎡
叭屋敷Ⅰa遺跡に小規模な沢をへだてて隣接する地域を調査し、縄文時代竪穴住居址3棟（前期前半2、中期末葉1）、平安時代住居址1棟、掘立柱建物跡2棟、ピット48基、陥し穴状遺構7基を発掘、縄文式土器片（前、中、後、晩期）、石器類、赤色顔料塊などが出土したが、遺物は遺構外のものも多く、その中でも縄文時代後期の土器片が多いとしている。

●叭屋敷Ⅱ遺跡 調査期間・昭和56年6月8日～10月31日、発掘面積・7,680㎡
叭屋敷Ⅰa・Ⅰb遺跡にのびる尾根にU字状に囲まれた谷あいの南面する斜面を調査し、縄文時代竪穴住居址18棟（中期末葉7、後期6、時期不明5）、平安時代住居址1棟、ピット29基を発掘、遺構に伴って縄文式土器（中期末～後期後半）、遺構外には縄文時代前期、晩期の土器片が出土したが、石器は比較的少量だったと報告している。

●叭屋敷Ⅲ遺跡 調査期間・昭和56年8月21日～11月17日、発掘面積・7,000㎡
叭屋敷Ⅱ遺跡の北側尾根で、叭屋敷Ⅰa遺跡に連なる尾根後縁部を調査し、縄文時代竪穴住居址13棟（中期末葉～後期初頭5、後期前葉～中葉8）、ピット26基、焼土遺構1基、埋設土器1

を発掘し、縄文式土器(前期前葉、中期末葉、後期前葉～後葉、晩期前葉)、石器類、土製品などが出土したが、遺構に伴うものは少ないと報告している。

●馬場野Ⅰ遺跡(大字軽米第12地割字馬場野) 調査期間・昭和56年9月7日～11月6日、昭和57年4月16日～7月31日、発掘面積・11,970㎡

叭屋敷Ⅱ遺跡の南側尾根の後線部を調査し、縄文時代竪穴住居址10棟(中期末1、中期末～後期初頭1、中期末～後期2、後期初頭3、後期前葉1、後期中葉1、不明1)、フラスコ形土坑76基、陥し穴状遺構5基、近世土坑基3基、その他2基を発掘、縄文式土器(中期末、後期の各時期、晩期前葉)、石器類、土製品などが出土したと報告している。

●馬場野Ⅱ遺跡 調査期間・昭和56年7月20日～11月6日、昭和57年4月16日～11月6日、昭和58年4月11日～10月31日、発掘面積・20,500㎡

雪谷川と郷坂川に挟まれた丘陵の東縁に発達した鋸歯状の尾根の1つで、馬場野Ⅰ遺跡が載る尾根の南にある尾根の後線部とその南側緩斜面を調査し、縄文時代竪穴住居址58棟(中期末～後期初頭10、後期中葉～後期末40、晩期4、不明4)、弥生時代竪穴住居址10棟、住居址状遺構3棟、土坑170基、陥し穴状遺構3基、埋設土器3基、焼土遺構4基、柱穴列などを発掘、縄文式土器(草創期、早期、中期、中期～後期、晩期)、土製品、弥生式土器、石器などが出土したと報告し、縄文時代草創期の土器片が出土したこと、縄文時代後期の住居址に入口と考えられる施設のあったこと、弥生時代の集落があったことが特筆される。

●君成田Ⅳ遺跡(大字軽米第22地割字君成田) 調査期間・昭和55年6月24日～11月20日、発掘面積・13,000㎡、軽米町役場の南西1.4km、郷坂川の北東側にある鋸歯状の尾根の1つの緩斜面を調査し、縄文時代竪穴住居址56棟(中期末10、後期初頭8、後期前葉19、中葉3、後葉5、後期末3、晩期前葉4、晩期末1、不明3)、奈良時代住居址2棟、土坑65基、配石遺構1基、埋設土器3基、陥し穴状遺構2基、近世以降の建物跡1基を発掘、縄文式土器(中期末～後期後葉、晩期末、後期後葉～晩期前葉の順に多い)、石器が多量に出土し、その他弥生式土器や縄文時代早期土器片が出土したと報告している。

●大日向Ⅱ遺物(大字軽米第13地割字叭屋敷) 調査期間・昭和59年4月13日～11月2日、発掘面積・6,101㎡、軽米町役場の北西0.8kmにあり、叭屋敷Ⅰa遺跡の東側に接し、連続する遺跡で、縄文時代竪穴住居址41棟(前期3、中期末1、後期中葉から末葉29、後期末葉から晩期1、晩期1、不明6)、奈良平安時代住居址5棟、掘立柱建物跡1棟、ピット85基、埋設土器4基などを調査している。出土遺物は縄文後・晩期の土器を中心に、亀形中空土製品や石器など多数である。なおこの調査は軽米インターチェンジ入口の国道340号改良工事に伴うものである。

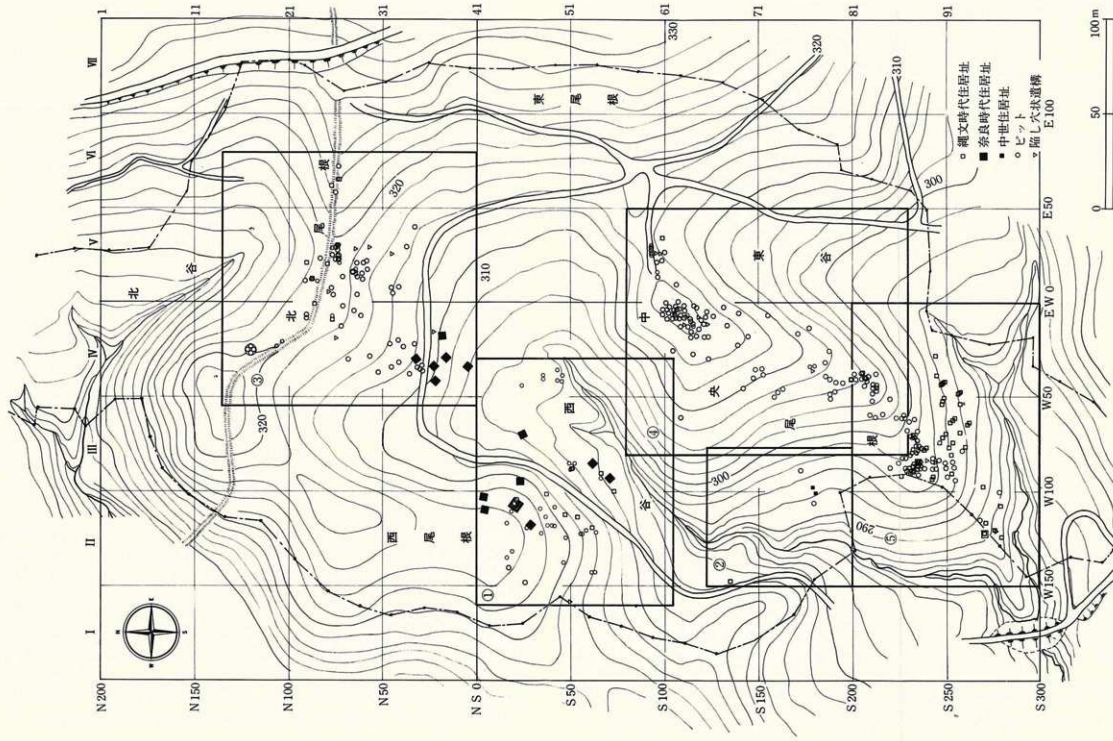
●駒板遺跡 本報告遺跡である。

第4表 軽米町遺跡一覧表

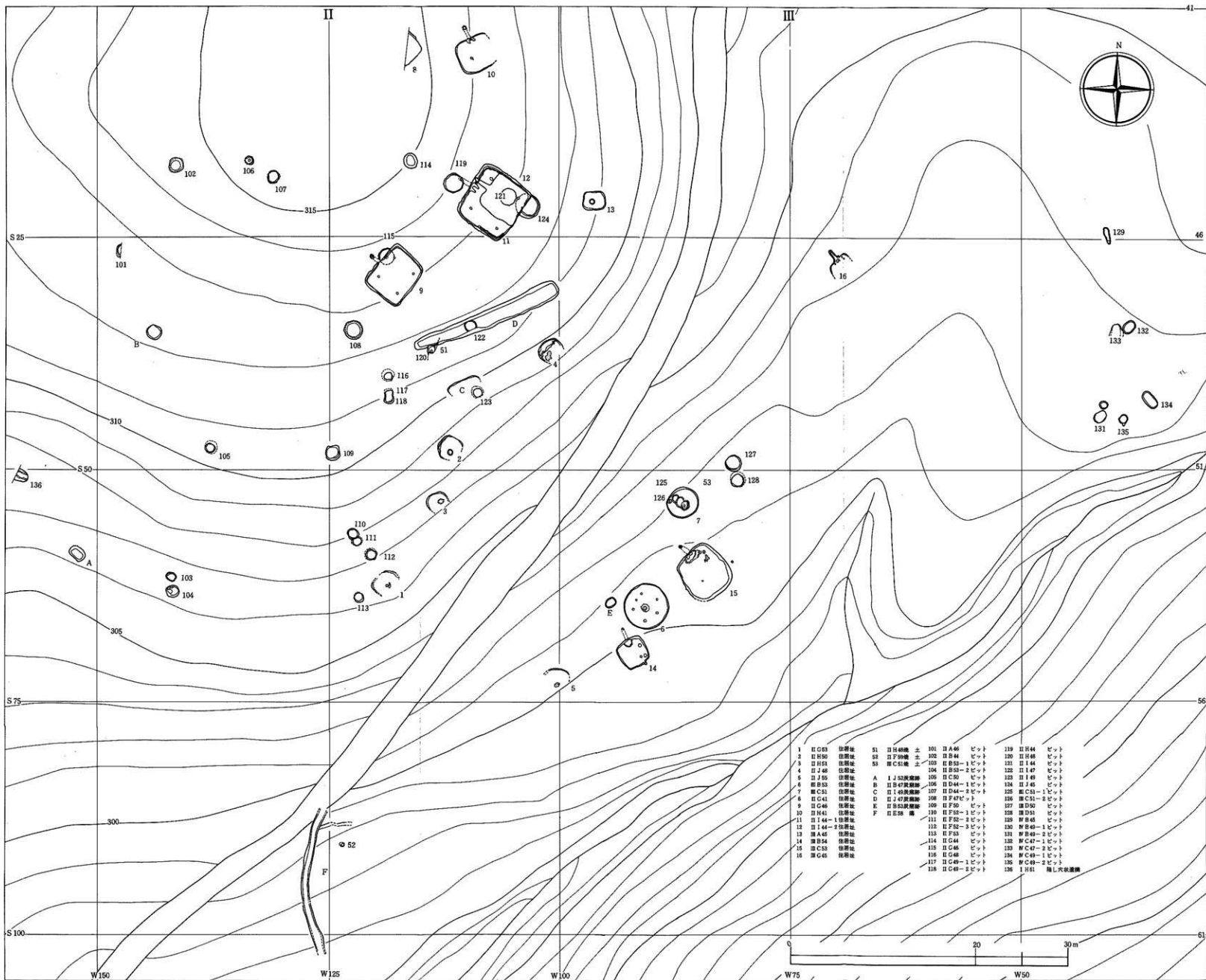
番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など
1	上野場I	縄文土器	46	長倉田	縄文土器	91	古屋敷I	縄文土器
2	" II	縄文土器 陶器	47	水吉Ⅱ	"	92	" II	"
3	" III	縄文土器	48	" III	"	93	" III	縄文土器 磁器
4	" IV	縄文土器 陶器	49	大島Ⅳ	"	94	" IV	縄文土器 磁器
5	" V	縄文土器	50	" V	"	95	周屋ⅤI	縄文土器
6	小手原森I	"	51	下尾田I	縄文土器(後・晩)	96	高清水Ⅵ	"
7	ぬかり	縄文土器(晩)	52	大島Ⅱ	縄文土器	97	" III	"
8	小手原森II	縄文土器、土師器	53	" IV	"	98	釜場I	"
9	" III	土師器	54	長倉小学校Ⅵ	縄文土器(後)	99	内場I	縄文土器 磁器
10	尾田I	縄文土器	55	長倉I	石器、土師器	100	釜場II	縄文土器
11	下野場I	縄文土器	56	大島I	縄文土器(後・晩)、土師器(平安)	101	長久根I	縄文土器 陶器
12	下野場Ⅱ	磁器	57	ふん館Ⅱ	縄文土器、土師器、磁器	102	" II	縄文土器
13	下野場Ⅲ	縄文土器(晩)、石器	58	尾田Ⅱ	縄文土器、土師器	103	" III	"
14	" IV	縄文土器	59	大島Ⅱ	縄文土器 陶器	104	" IV	"
15	釜目I	"	60	" V	縄文土器	105	" V	"
16	下野場I	石器	61	柳久保I	"	106	" VI	"
17	釜目II	縄文土器	62	長倉II	縄文土器(後)	107	" VII	"
18	" III	"	63	" III	縄文土器	108	沼I	"
19	" IV	"	64	柳久保Ⅱ	"	109	" II	縄文土器(後) 磁器
20	高敷山I	"	65	" IV	"	110	長久根Ⅱ	縄文土器
21	" II	"	66	館森	磁器	111	高六Ⅱ	縄文土器 陶・磁器
22	湯沢I	"	67	高六I	縄文土器	112	" III	縄文土器
23	高敷山Ⅱ	石器	68	上野場Ⅲ	"	113	加賀屋敷I	"
24	" IV	縄文土器	69	上野場Ⅳ	"	114	高六Ⅳ	縄文土器、土師器
25	" V	石器	70	上野場山根I	"	115	" V	縄文土器、土師器、陶・磁器
26	湯沢Ⅱ	縄文土器	71	" II	"	116	" VI	土師器
27	" III	縄文土器、石器	72	上野場Ⅴ	縄文土器(後・晩)	117	" VII	土師器
28	" IV	縄文土器	73	上野場Ⅵ	縄文土器(後)、土師器	118	中崎I	縄文土器、土師器、陶器
29	下尾Ⅲ	"	74	上野場山根Ⅱ	縄文土器	119	" II	縄文土器、土師器
30	" III	縄文土器、土師器	75	上野場Ⅶ	"	120	加賀屋敷Ⅱ	縄文土器
31	尾田・小松I	縄文土器	76	上野場山根Ⅲ	"	121	中崎Ⅲ	"
32	" II	"	77	" IV	"	122	上崎山I	"
33	" III	"	78	"	"	123	" II	"
34	小松I	"	79	上野場山根Ⅳ	縄文土器	124	中崎Ⅳ	"
35	" IV	"	80	上野場	"	125	上崎山Ⅱ	土師器
36	" II	"	81	上野場山根Ⅴ	"	126	向高家平中I	縄文土器
37	" III	"	82	上野場Ⅷ	"	127	" II	"
38	高久保I	"	83	上野場山根Ⅵ	"	128	向高家	縄文土器、石器
39	" II	"	84	高清水I	"	129	向高家平中Ⅱ	縄文土器、土師器
40	" III	"	85	" II	"	130	尾田Ⅲ	磁器
41	水吉I	"	86	" III	"	131	尾田Ⅳ	縄文土器、土師器
42	" II	"	87	" IV	"	132	高家中山I	縄文土器
43	" III	"	88	" V	"	133	" II	"
44	" IV	土師器	89	" VI	"	134	" III	土師器
45	" V	縄文土器	90	" VII	"	135	" IV	縄文土器

番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など
136	西 Ⅱ I	縄文土器	181	外川目 I	縄文土器	226	尾 田Ⅵ	縄文土器
137	" II	土師器	182	" II	縄文土器、石器	227	新 木 I	縄文土器(晩)
138	" III	縄文土器	183	" III	縄文土器	228	尾 田	" "
139	" IV	土師器・須恵器	184	釜ノ皮Ⅲ	"	229	駒 木Ⅲ	" "
140	中 崎Ⅴ	縄文土器	185	外川目Ⅳ	"	230	尾 田Ⅶ	縄文土器
141	内 城Ⅵ	縄文土器(晩)	186	昼 場Ⅱ	"	231	駒 木Ⅳ	"
142	中 崎Ⅶ	縄文土器、土師器	187	染ヶ沢Ⅲ	"	232	土 弓Ⅱ	縄文土器(晩)
143	内 城Ⅶ	土師器	188	昼 場Ⅲ	縄文土器、土師器、磁器	233	" III	土師器(平安)
144	" Ⅷ	縄文土器	189	大崎山 I	" " "	234	" I	縄文土器(晩)
145	" Ⅸ	"	190	" II	土師器	235	大日向Ⅱ	縄文土器、石器 陶器
146	" Ⅹ	縄文土器 磁器	191	" III	土師器・須恵器、陶器	236	土 弓Ⅴ	縄文土器
147	" Ⅺ	土師器	192	" III	縄文土器	237	坂ノ上	縄文土器(後・晩)
148	" Ⅻ	縄文土器、土師器	193	沼の塩森	縄文土器(晩)	238	駒 木Ⅴ	縄文土器
149	" Ⅼ	縄文土器	194	染ヶ沢Ⅳ	縄文土器	239	" II	縄文土器(晩)
150	染ヶ沢	"	195	早 瀬 I	縄文土器 陶器	240	大日向Ⅲ	縄文土器
151	染ヶ沢Ⅱ	"	196	川 向	縄文土器	241	横井内 I	"
152	中 崎Ⅷ	"	197	早 瀬Ⅱ	土師器	242	" III	"
153	上 崎Ⅷ	縄文土器、土師器	198	向山岸 I	土師器・須恵器	243	土 弓Ⅳ	縄文土器(晩)
154	" Ⅸ	"	199	" II	縄文土器	244	" Ⅶ	縄文土器
155	中 崎Ⅸ	縄文土器	200	外川目Ⅴ	"	245	?	"
156	西ノ角Ⅳ	"	201	" Ⅶ	縄文土器、土師器	246	馬場野 I	縄文土器(晩)
157	上 崎Ⅸ	土師器	202	" Ⅷ	縄文土器	247	中 山 I	" "
158	西ノ角 I	縄文土器(後) 陶器	203	京 仏 I	縄文土器、石器	248	八幡宮	" "
159	" II	縄文土器	204	外川目Ⅵ	縄文土器	249	帆 敷	" "
160	上 崎Ⅹ	縄文土器、弥生土器、土師器	205	" Ⅸ	"	250	大日向Ⅳ	縄文土器(前・晩)、石器
161	西ノ角Ⅱ	縄文土器 陶・磁器	206	御前水古墳	古墳、竈手刀	251	馬場野Ⅱ	縄文土器、須恵器
162	高 瀬	縄文土器、土師器、磁器	207	外川目Ⅷ	縄文土器	252	" III	縄文土器
163	晴 山 館	縄文土器 陶器、鉾跡	208	" Ⅹ	"	253	岸 里Ⅲ	縄文土器、土師器
164	下 崎Ⅹ	縄文土器	209	" Ⅺ	"	254	幡 采 城	鉾跡
165	柏 木 田 I	縄文土器、土師器	210	京 仏Ⅱ	"	255	中 山Ⅱ	縄文土器(晩)
166	" II	"	211	外川目Ⅷ	"	256	岸 里Ⅳ	縄文土器
167	" III	"	212	御前清水	"	257	沼 田 I	"
168	" IV	土師器	213	上 尾田 I	縄文土器、土師器	258	" III	土師器
169	" V	縄文土器、土師器、磁器	214	" II	縄文土器	259	向川原	縄文土器
170	市子屋敷 I	縄文土器、石器、土師器	215	" III	"	260	沼 田Ⅱ	縄文土器、土師器
171	" II	縄文土器、土師器	216	" IV	縄文土器、土師器、陶器	261	岸 里Ⅰ	縄文土器(晩)
172	" III	縄文土器	217	大 島Ⅱ	縄文土器(晩)	262	板子屋敷 I	縄文土器、石器
173	釜ノ皮 I	縄文土器、土師器	218	駒 木Ⅴ	縄文土器	263	" II	縄文土器
174	長者森 I	縄文土器	219	" Ⅵ	"	264	" III	縄文土器、土師器
175	" II	"	220	" Ⅶ	縄文土器(前・晩)	265	大 仙 森	鉾跡
176	向山岸 I	"	221	" Ⅷ	縄文土器	266	上ノ山 I	土師器
177	高 家 館	鉾跡	222	" Ⅸ	"	267	" II	縄文土器
178	取 湯 岸 I	土師器	223	駒木庚申塚	碑	268	" III	縄文土器、弥生土器
179	" II	縄文土器、土師器	224	駒 木	縄文土器(前・中)	269	観 音 林 I	縄文土器
180	釜ノ皮Ⅱ	"	225	駒 木Ⅱ	縄文土器	270	白角子久保Ⅱ	縄文土器(後)

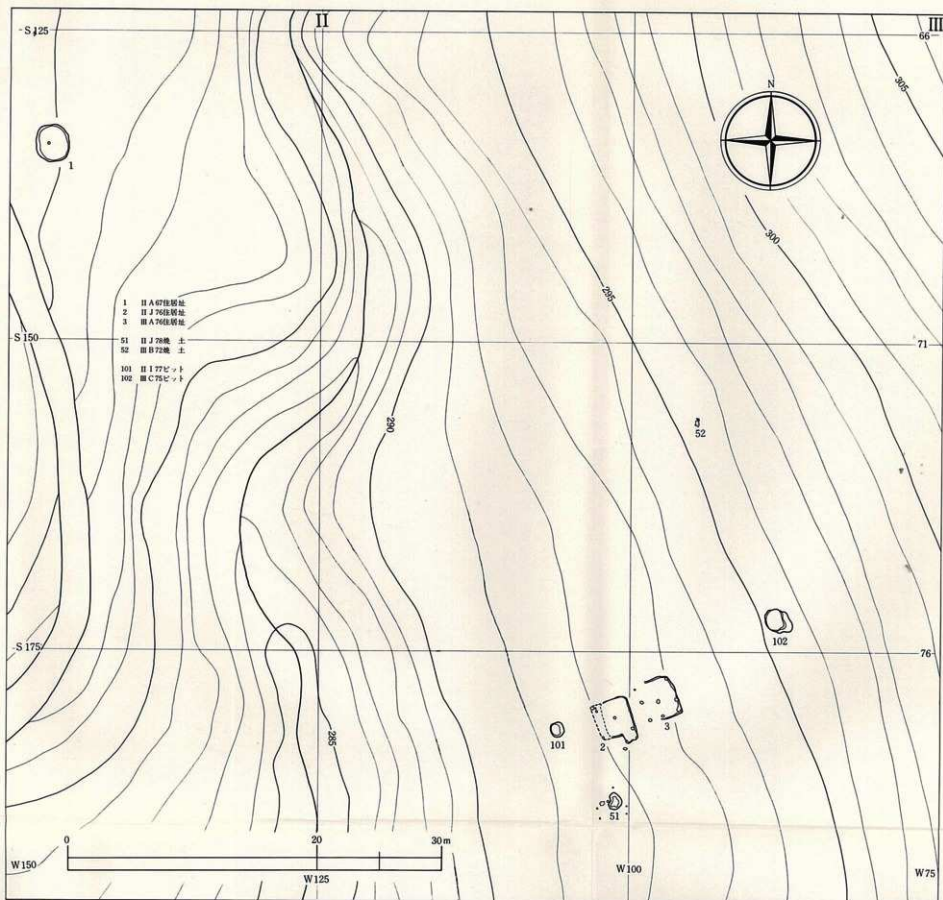
番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など	番号	遺跡名	出土遺物など
271	宮角子久保Ⅲ	縄文土器、土師器・須恵器、磁器	316	荒田沢Ⅳ	縄文土器	361	上 館	縄文土器(後)
272	観音林Ⅱ	縄文土器	317	" Ⅴ	縄文土器、土師器	362	松 島	縄文土器(晩)
273	" Ⅲ	縄文土器、土師器	318	新草沢Ⅰ	縄文土器	363	古 館	石器 銅器
274	" Ⅳ	縄文土器	319	" Ⅱ	"	364	百目金	縄文土器(晩)
275	宮角子久保Ⅳ	縄文土器、土師器、陶器	320	上 平Ⅰ	縄文土器、土師器	365	小屋の沢	縄文土器(晩)
276	大 堤Ⅰ	縄文土器 陶器	321	" Ⅱ	" "	366	高 屋 敷	" "
277	" Ⅱ	縄文土器	322	大久保瀬田	縄文土器	367	まつっこ	縄文土器(晩)、石器
278	茂 口Ⅰ	縄文土器、土師器、陶器・磁器	323	大久保尻	"	368	山 内	縄文土器(晩)
279	" Ⅱ	縄文土器 磁器	324	谷地 渡Ⅰ	"	369	秋 塚Ⅰ	縄文土器(晩)、土師器(平安)
280	新 田Ⅰ	縄文土器	325	" Ⅱ	"	370	" Ⅲ	縄文土器(晩)
281	" Ⅱ	縄文土器、土師器	326	" Ⅲ	"	371	" Ⅱ	" "
282	山 口Ⅰ	" "	327	" Ⅳ	"	372	" Ⅳ	縄文土器(後・晩)、弥生土器
283	新 田Ⅱ	縄文土器、土師器、陶器	328	上 平Ⅱ	"	373	駒 坂	縄文土器(後・晩)、土師器(奈良)
284	宮角子久保Ⅴ	縄文土器、土師器	329	谷地 渡Ⅴ	"	374	山 田	縄文土器(後・晩)
285	?		330	上 平Ⅳ	"	375	板 橋 沢	縄文土器(晩)
286	小 沼Ⅰ	縄文土器	331	" Ⅴ	"			
287	宮角子久保Ⅵ	"	332	中 村Ⅰ	"			*東北縦貫自動車道開通 調査遺跡
288	" Ⅱ	"	333	上 平Ⅵ	"			
289	小 沼Ⅱ	"	334	中 村Ⅱ	"			
290	貝 塚Ⅰ	土師器、陶器	335	山内新木Ⅰ	"			
291	" Ⅱ	縄文土器 磁器	336	" Ⅱ	"			
292	" Ⅲ	縄文土器、土師器	337	" Ⅲ	"			
293	" Ⅳ	縄文土器、土師器、陶器	338	" Ⅳ	"			
294	" Ⅴ	縄文土器	339	千 草	縄文土器(後・晩)			
295	山 口Ⅱ	"	340	和 当 地Ⅰ	縄文土器			
296	" Ⅲ	"	341	" Ⅱ	"			
297	" Ⅳ	"	342	" Ⅲ	"			
298	" Ⅴ	"	343	" Ⅳ	"			
299	" Ⅵ	"	344	中 山Ⅴ	縄文土器(晩)			
300	" Ⅶ	"	345	" Ⅵ	縄文土器(後)			
301	" Ⅷ	縄文土器、土師器、陶器	346	菅成田Ⅳ	縄文土器(後・晩)			
302	" Ⅸ	縄文土器(晩)、土師器	347	" Ⅲ	縄文土器(後)			
303	荒田沢Ⅰ	縄文土器	348	" Ⅱ	縄文土器(晩)			
304	" Ⅴ	"	349	菅成田	縄文土器(後)			
305	" Ⅲ	"	350	菅成田Ⅱ	縄文土器(晩)			
306	太田向Ⅱ	"	351	"	"			
307	" Ⅲ	弥生土器、土師器	352	菅成田Ⅴ	縄文土器(晩)、土師器(平安)			
308	貝 塚Ⅴ	土師器	353	" Ⅵ	" " " "			
309	太田向Ⅳ	縄文土器、弥生土器	354	中 山Ⅳ	縄文土器(晩)			
310	" Ⅰ	縄文土器	355	" Ⅳ	" "			
311	山内下平Ⅲ	"	356	抽 の 平	縄文土器(後・晩)、石器			
312	梅	"	357	諏訪の森	縄文土器(晩)、江別C			
313	大久保ⅡⅠ	縄文土器、土師器	358	千本松	縄文土器(後)、鉄剣			
314	" Ⅱ	" "	359	天馬沢	縄文土器(早)			
315	山内下平Ⅴ	縄文土器	360	平 中	縄文土器(早・中)、石器、土師器			



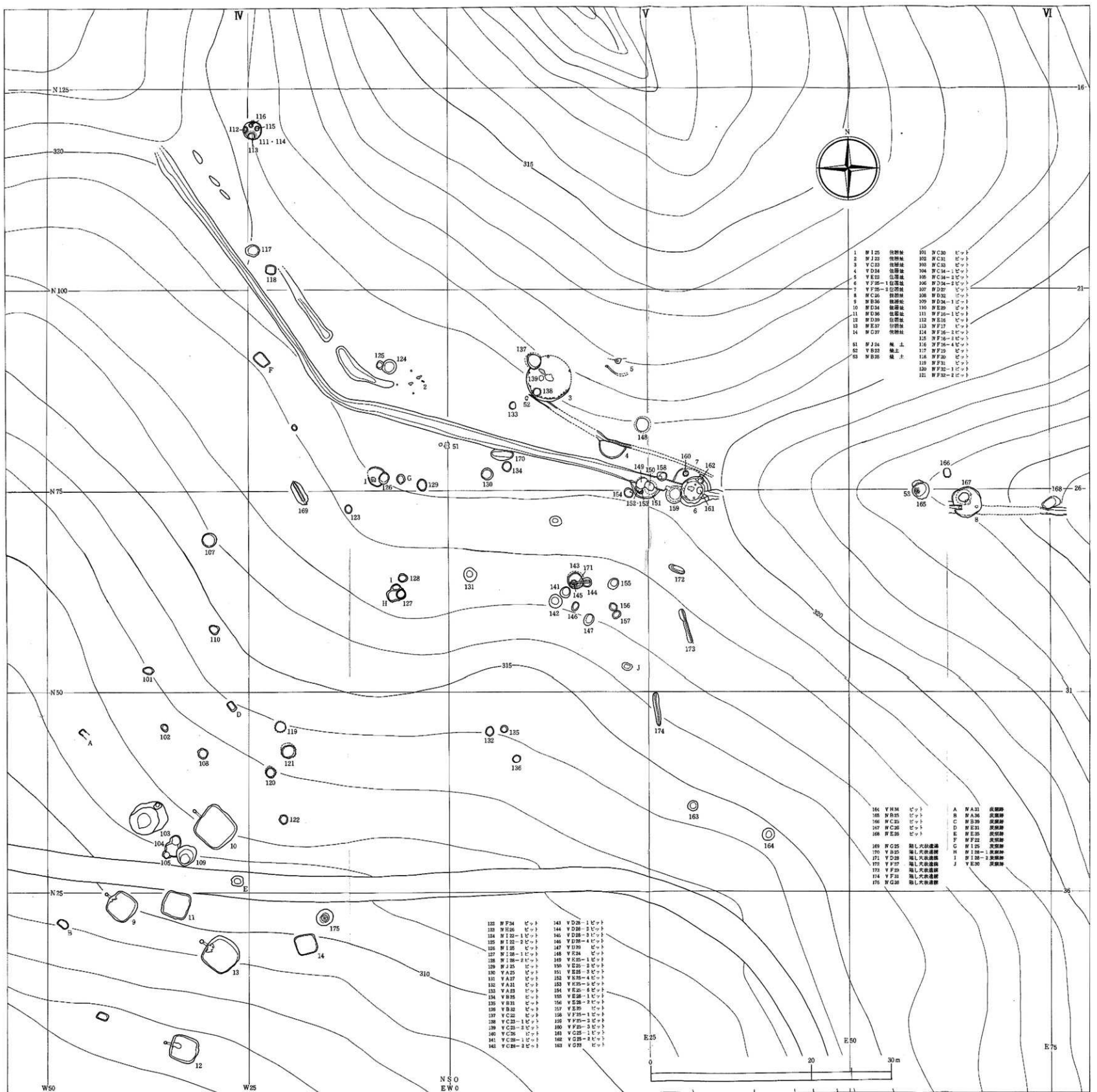
第6図 遺構記号地図



第7図 遺構配置図I (西尾根・西谷右岸)



第 8 図 遺構配置図 2 (西谷左岸)

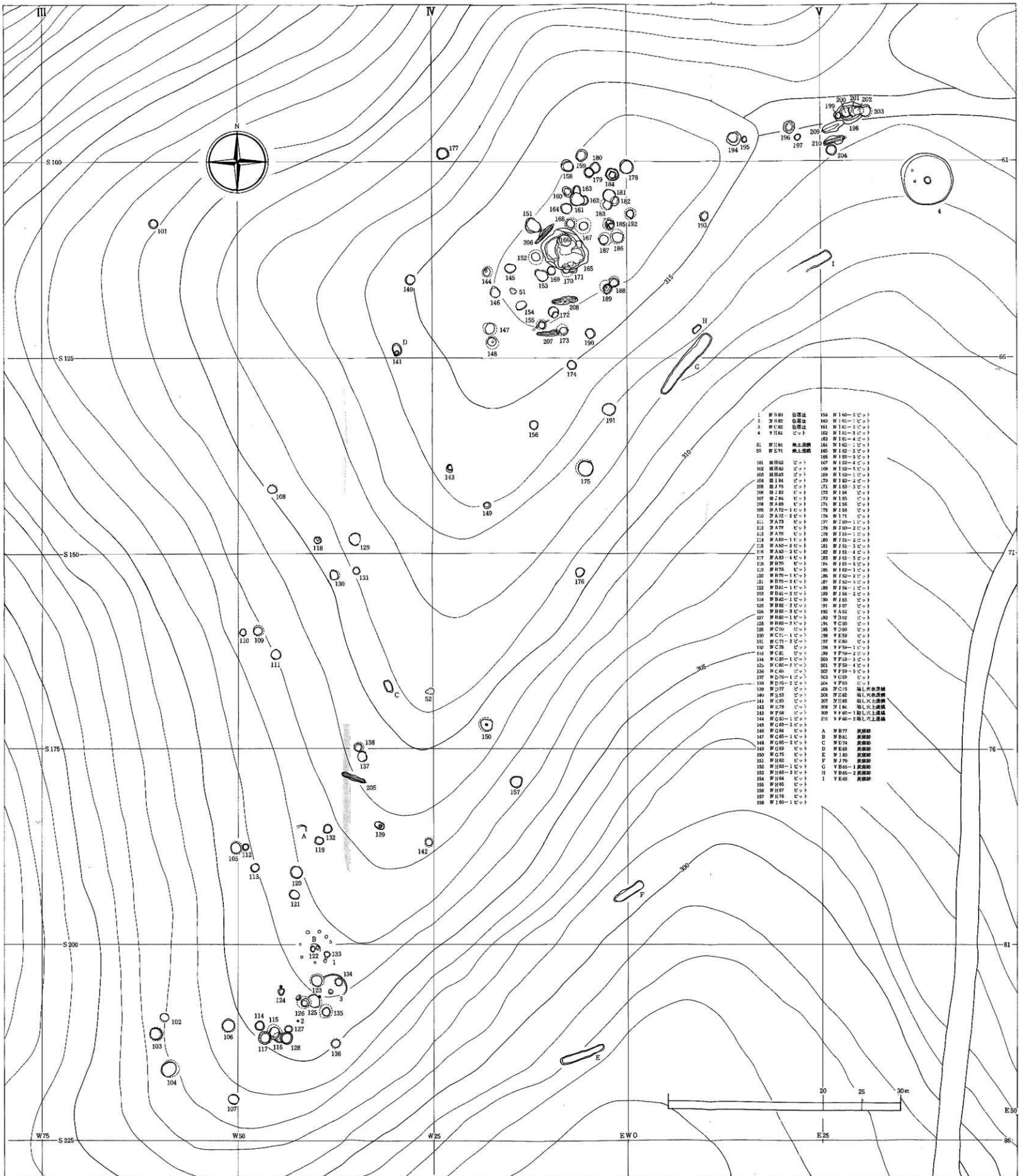


- | | | | | | |
|----|---------|-----|-----|---------|-----|
| 1 | W 125 | 住居跡 | 101 | W C20 | ビット |
| 2 | W 123 | 住居跡 | 102 | W C21 | ビット |
| 3 | V C22 | 住居跡 | 103 | W C22 | ビット |
| 4 | V D24 | 住居跡 | 104 | W C24-1 | ビット |
| 5 | V E25 | 住居跡 | 105 | W C24-2 | ビット |
| 6 | V F26-1 | 住居跡 | 106 | W F26-1 | ビット |
| 7 | V F26-2 | 住居跡 | 107 | W F26-2 | ビット |
| 8 | W C26 | 住居跡 | 108 | W D26 | ビット |
| 9 | W E26 | 住居跡 | 109 | W F26-1 | ビット |
| 10 | W D24 | 住居跡 | 110 | W E24 | ビット |
| 11 | W C26 | 住居跡 | 111 | W F26-1 | ビット |
| 12 | W D28 | 住居跡 | 112 | W E28 | ビット |
| 13 | W E27 | 住居跡 | 113 | W F27 | ビット |
| 14 | W C27 | 住居跡 | 114 | W F26-2 | ビット |
| 15 | W F24 | 礎土 | 115 | W F26-3 | ビット |
| 16 | V B22 | 礎土 | 117 | W F25 | ビット |
| 17 | W B25 | 礎土 | 118 | W F26 | ビット |
| 18 | W B25 | 礎土 | 119 | W F21 | ビット |
| 19 | W B25 | 礎土 | 120 | W F22-1 | ビット |
| 20 | W B25 | 礎土 | 121 | W F22-2 | ビット |

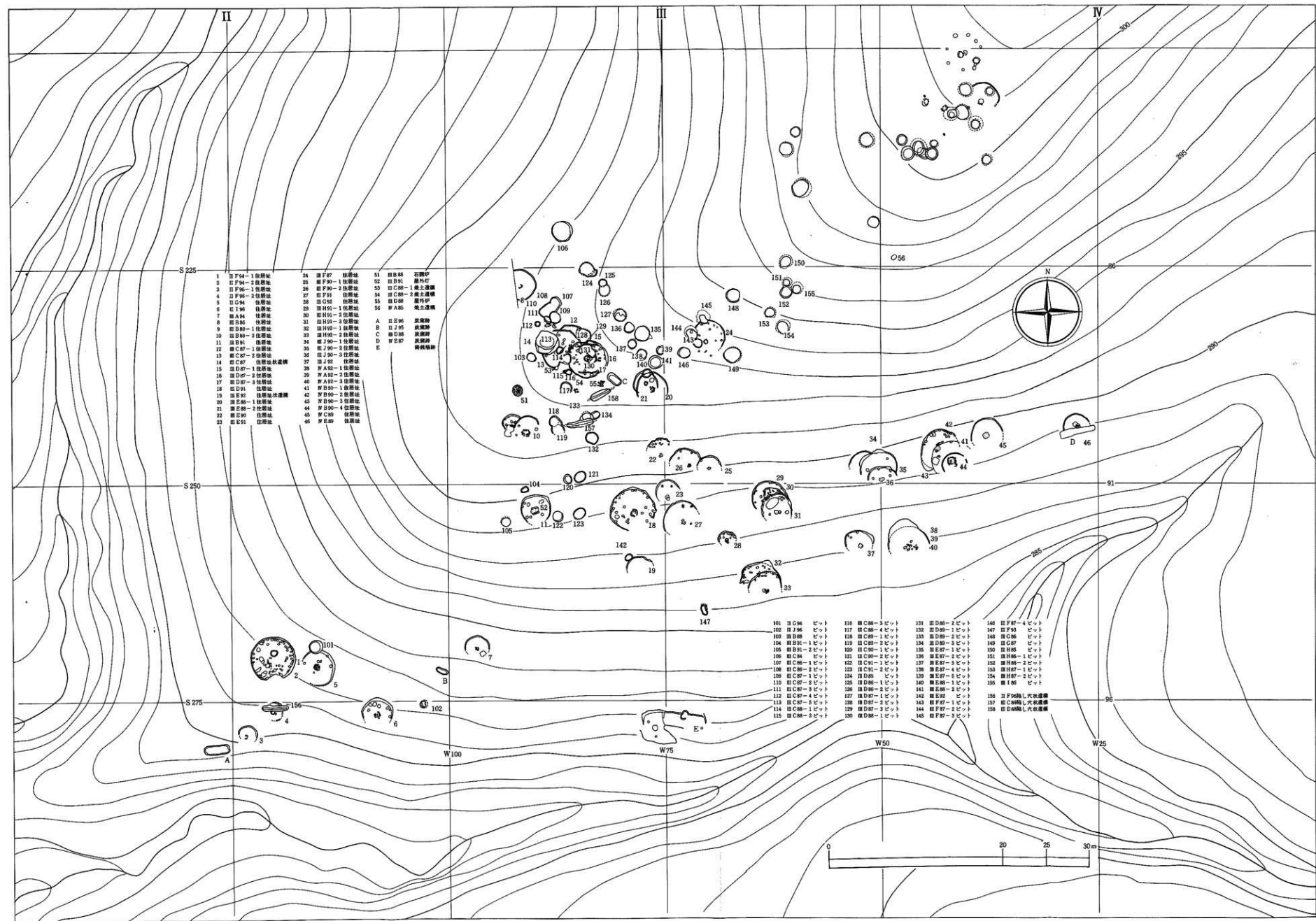
- | | | | | | |
|-----|-------|--------|---|---------|-----|
| 164 | V H34 | ビット | A | W A31 | 住居跡 |
| 165 | W B25 | 礎土 | B | W A36 | 住居跡 |
| 166 | W C25 | ビット | C | W B29 | 住居跡 |
| 167 | W C26 | ビット | D | W E21 | 住居跡 |
| 168 | W E26 | ビット | E | W E25 | 住居跡 |
| 169 | W C25 | 住居跡 | F | W F22 | 住居跡 |
| 170 | W C25 | 堀し穴状遺構 | G | W I25 | 住居跡 |
| 171 | W B25 | 堀し穴状遺構 | H | W I26 | 住居跡 |
| 172 | V D28 | 堀し穴状遺構 | I | W I28-1 | 住居跡 |
| 173 | V E27 | 堀し穴状遺構 | J | W E25 | 住居跡 |
| 174 | V F29 | 堀し穴状遺構 | | | |
| 175 | V F31 | 堀し穴状遺構 | | | |
| 176 | W G28 | 堀し穴状遺構 | | | |

- | | | | | | |
|-----|---------|-----|-----|---------|-----|
| 122 | W F34 | ビット | 143 | V D28-1 | ビット |
| 123 | W H26 | ビット | 144 | V D28-2 | ビット |
| 124 | W I25-1 | ビット | 145 | V D28-3 | ビット |
| 125 | W I25-2 | ビット | 146 | V D28-4 | ビット |
| 126 | W I25 | ビット | 147 | V E28 | ビット |
| 127 | W I28-1 | ビット | 148 | V E24 | ビット |
| 128 | W I28-2 | ビット | 149 | V E25-1 | ビット |
| 129 | W J25 | ビット | 150 | V E25-2 | ビット |
| 130 | V A25 | ビット | 151 | V E25-3 | ビット |
| 131 | V A27 | ビット | 152 | V E26-1 | ビット |
| 132 | V A31 | ビット | 153 | V E26-2 | ビット |
| 133 | V A28 | ビット | 154 | V E26-3 | ビット |
| 134 | V B25 | ビット | 155 | V E26-1 | ビット |
| 135 | V B31 | ビット | 156 | V E28-2 | ビット |
| 136 | V B32 | ビット | 157 | V F25 | ビット |
| 137 | V C22 | ビット | 158 | V F25-1 | ビット |
| 138 | V C23-1 | ビット | 159 | V F25-2 | ビット |
| 139 | V C23-2 | ビット | 160 | V F25-3 | ビット |
| 140 | V C26 | ビット | 161 | V G25-1 | ビット |
| 141 | V C28-1 | ビット | 162 | V G25-2 | ビット |
| 142 | V C28-2 | ビット | 163 | V G29 | ビット |

第9図 遺構配置図3 (北尾根)



第10図 遺構配置図4 (中央尾根稜線部)



第11図 遺構配置図5 (中央尾根斜断面)

II 検出された遺構と遺物

1. 古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

〈西尾根〉

西尾根で検出できた竪穴住居址は6棟である。このうちII G 46住居址は、建て替えによる2遺構の重複である。またIII A 45住居址はカマドを持たない遺構であり、II G 41住居址は遺構の大半が調査区域外にあって、カマドの存在が確認できなかった。なお重複した遺構のうちの旧遺構とIII A 45住居址を除く4棟は、炭化材の検出状況から焼失遺構と考えられる。

竪穴住居址が検出された範囲は、西尾根が舌状に南方へ延びる鞍部の先端東側にあり、分布状況から更に調査区域外の平坦地にも分布するものと考えられる。6棟が占地する地形は、概して東側へきわめて緩く傾斜しているが、III A 45住居址は傾斜がやや急に下りはじめる地点に位置している。

出土遺物はクロコ未使用の土師器に集約されるが、6棟相互の時間差は顕著ではない。

II G 41住居址

遺 構 (第12図 写真図版6)

この遺構は西尾根頂部に位置し、検出された6棟の竪穴住居址の中では最も標高が高い。地形は平坦であるが、当遺構の東側からは、きわめて緩い傾斜がはじまる。遺構の大部分が調査区域外にあり、調査できたのは遺構の南東隅部だけである。検出面は黒色の中礫浮石層下位であり、調査区域外との境界で観察できた土層断面から、既に床面直上まで検出面が下がっていたことを確認した。

平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を基調とするものと考えられるが、カマドの存在や規模も含めて、詳細は不明である。埋土は上位から黒色シルト・十和田a降下火山灰・黒色シルト・中礫浮石起源の黒褐色土である。南東壁の際に、壁の上部から床面に向けて傾斜した状態で礫が検出された。礫の形状は扁平な角礫であり、最大で30cm×20cm×7cmである。また床面からは炭化材が検出されており、当遺構が焼失住居であることを示している。床面はほぼ平坦であり、南部浮石を含む黒褐色土を貼って構築している。

遺 物 (第40図 写真図版32)

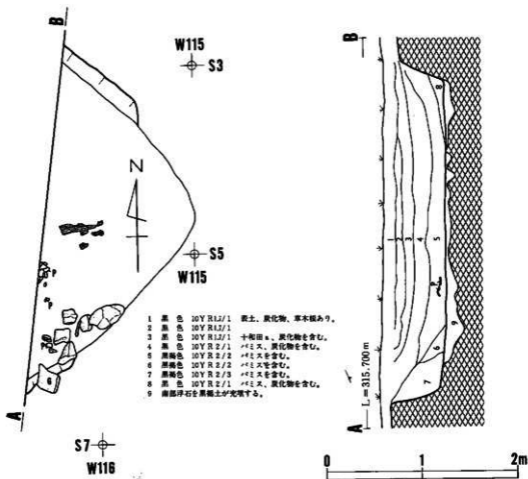
出土遺物は床面直上からの甕形土器1点である(第40図1)。胴部下端から底部にかけて欠損している。口縁部は直線的に外傾し、頸部は「く」字状に屈曲する。胴部はやや脹らむが、最

大径は口縁部にある。器面調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面は斜と横方向のハケメである。

II G46住居址

遺構 (第13～16図 写真図版7～9)

この遺構は西尾根鞍部の南端東側に位置し、地形は約5度で東に緩傾斜する。西尾根で検出された住居址の中では、最も南に位置する。検出面は表土直下の黒色シルト層であるが、窪地となっていたため遺構の存在が予測できた。当遺構の北西壁の一部がII G46ピットと重複しており、当遺構が新しい。平面形は、長軸を北東—南西にもつ不整隅丸長方形を呈し、カマド方向を示す主軸をN—40°—Wにもつ。規模は北東壁は約4m、南東壁が約5m、南西壁が約4.4m、北西壁が約5.4mである。埋土は4層に大別できる。1層は表土直下の黒色シルト、十和田a降



第12図 II G41住居址

下火山灰を含む暗オリーブ褐色土・オリーブ褐色の十和田a降下火山灰の層で、自然堆積である。2層は自然堆積の黒褐色シルトで、色調と混入物によって細分できる。3層は壁の周辺に観察できる黄褐色・にぶい黄褐色・暗褐色を呈する粘土質シルトで、壁の崩壊によって堆積したと考えられる。4層は床面直上を覆う褐色シルト・暗褐色シルトで、炭化材・炭化物粒・遺物を含む。

壁は中位以下が八戸火山灰層であり、直に近く立つ。上部は外傾しているが、南部浮石層が見られる北東壁では若干崩壊している。またII G46ピットの埋土を切る部分では、貼壁は観察されなかった。壁高は最も高い北隅で約95cm、最も低い南隅で約30cmである。床面には多量の炭化材と焼土がある。炭化材は壁の周辺では床面に向かって傾斜しており、他の地点では床面から浮くものと床面に密着するものがある。また焼土は床面と炭化材の間にあるものと、炭化材を覆うものがある。炭化材は全てクリである。床面は黒色シルト小塊を含む暗褐色土を貼って構築しているが、貼床は2面が観察された。上位の貼床の厚さは3cm程度で、黒色シルトの混入量が多く、堅くしまっている。下位の貼床とは肌分けする部分がある。下位の貼床を撤去した後の地山は、凹凸に富む。

柱穴は4本が検出された。4本の位置は、1辺が約2.8mの正四角形の角にある。平面形は円形・楕円形であり、底部はP₂がやや平坦ではあるが他は尖る。埋土は暗褐色シルトであり、柱あたりは断面の観察でも検出できなかった。深さはP₁が70cm、P₄が34cmである。周溝は南東壁の南部と南西壁の西部を除く部分に廻っている。

カマドは北西壁の中央に1基もつ。天井部と袖部は崩壊しているが、芯となった礎が遺存している。焚口部の南に2個の礎は接合し、長さ57cmである。この礎もカマドを構築したものと考えられる。これを含めた礎の数は13個である。燃焼部での焼土は、断面によっても観察できなかった。煙道は割貫き式で、長さ約1.4mである。煙道の底部はほぼ水平であり、また煙出しは垂直である。煙出しの深さは検出面から約1.5mである。

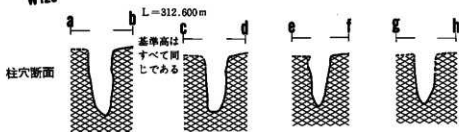
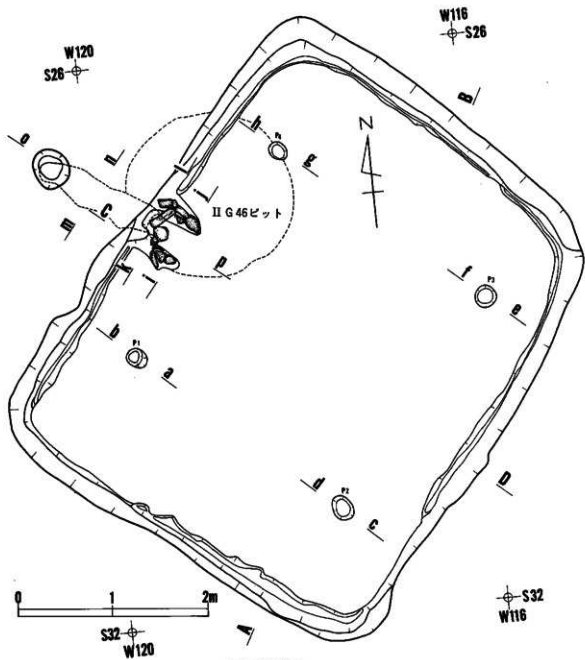
遺物 (第40図 写真図版32)

環形土器 (第40図)

環形土器は床面の西隅付近で、伏せた状態で1点出土した(第40図2)。口縁部を僅かに欠損するが、遺存状況は良好である。色調は暗褐色～暗赤褐色を呈する。体部～口縁部は丸味をもって外傾し、口唇部は丸む。底部との境界に段をもち、底部は丸底である。調整は、外面がナデにヘラミガキを交え、内面はヘラミガキである。

壘形土器 (第40図)

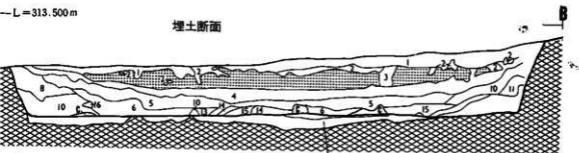
壘形土器で実測できたものは6点である。第40図3は床面の東隅で出土した破片が接合したもので、全体の約75%が残存する。色調は浅黄色で、黒斑が僅かに見られる。口唇部は丸み、



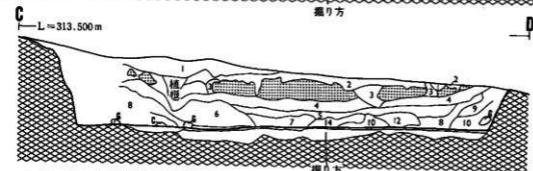
第13図 II G 46住居址

L=313.500m

埋土断面



掘り方



- | | | | |
|---------------------|-------------|---------------------|-------------|
| 1 黒色土 10Y R1.2/1 | 炭土、草木灰あり。 | 9 黄褐色土 10Y R 5/6 | パリス、炭化物を含む。 |
| 2 暗オリーブ褐色土 2.5Y 3/3 | シルト状の十和田s。 | 10 濃い黄褐色土 10Y R 5/4 | パリス、炭化物を含む。 |
| 3 オリーブ褐色土 2.5Y 4/3 | シルト状の十和田s。 | 11 暗褐色土 10Y R 3/4 | パリス、炭化物を含む。 |
| 4 黄褐色土 10Y R 2/2 | パリス、炭化物を含む。 | 12 褐色土 10Y R 4/6 | パリス、炭化物を含む。 |
| 5 黄褐色土 10Y R 3/3 | パリス、炭化物を含む。 | 13 濃い黄褐色土 10Y R 4/3 | パリス、炭化物を含む。 |
| 6 黄褐色土 10Y R 2/3 | パリス、炭化物を含む。 | 14 褐色土 2.5Y R 4/4 | パリス、炭化物を含む。 |
| 7 黒色土 10Y R 2/1 | パリス、炭化物を含む。 | 15 暗褐色土 10Y R 3/3 | パリス、炭化物を含む。 |
| 8 褐色土 10Y R 4/4 | パリス、炭化物を含む。 | 16 明黄褐色土 10Y R 6/3 | パリス、炭化物を含む。 |

カマド断面

L=312.100m

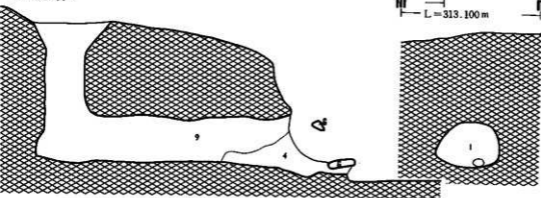


L=312.100m



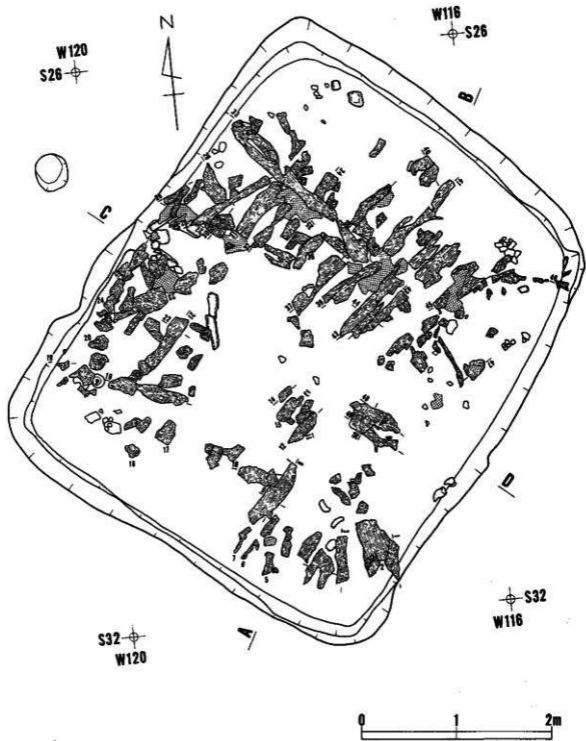
- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 褐色土 2.5Y R 4/4 | パリス、炭化物、焼土を含む。 |
| 2 暗褐色土 2.5Y R 2/3 | 焼土を含む。 |
| 3 暗褐色土 10Y R 3/3 | 炭化物を含む。 |
| 4 褐色砂質土 10Y R 4/6 | パリスを含む。 |
| 5 黄褐色砂質土 10Y R 5/8 | 磁床 |
| 6 黄褐色砂質土 10Y R 5/6 | 磁床 |
| 7 明黄褐色粘土 10Y R 4/4 | 磁床 |
| 8 褐色土 10Y R 4/4 | 磁床 |
| 9 暗褐色土 10Y R 3/4 | パリス、炭化物を含む。 |

L=313.150m

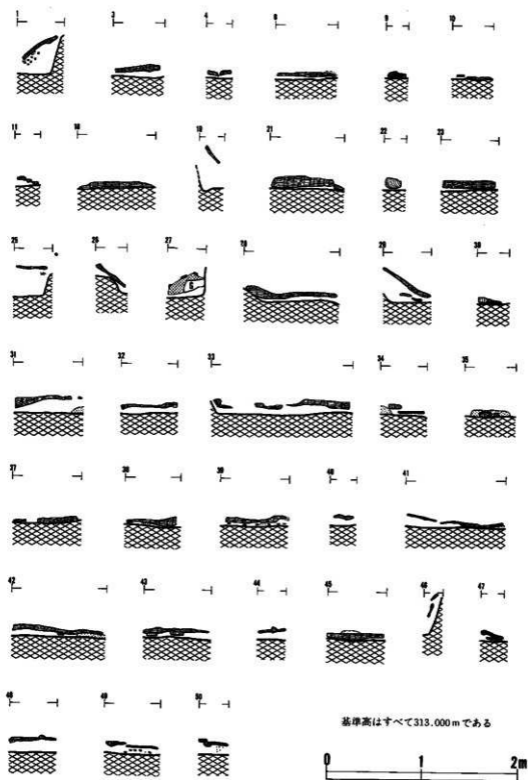


0 1m

第14図 II G 46住居址埋土断面・カマド



第15图 II G 46住居址炭化材出土状况



第16図 II G 46住居址炭化材断面

口縁部は外傾する。頸部は丸味をもって括れる。胴部は底部に至るまで、丸味をもって脹む。最大径を胴部中位にもつ。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部は外面がヘラミガキ、内面が横方向のナデである。底部外面には木葉痕があり、円形にヘラナデが見られる。4は南東壁の北半付近の埋土から出土した破片が接合したもので、胴部下位と底部を欠損している。色調は橙色である。口唇部は丸む。口縁部は外傾してから立ちあがる。最大径は口縁部中位にある。頸部は丸味をもって括れる。胴部は脹む。調整は口縁部の内面がヨコナデ、外面はヨコナデの後に縦方向のヘラミガキ。胴部は内面が横方向のハケメ、外面は縦方向のヘラミガキである。5・6・7は壘形土器の口縁部破片であり、8は胴部下端から底部が残存した壘である。その他の遺物（第40図）

埋土から縄文土器の口縁部破片が1点出土した（9）。無文で隆帯が施されている。

II H41住居址

遺 構（第17・18図 写真図版10・11）

この遺構は西尾根南端の東に面した斜面の上位に位置し、検出面は東北東に約5度の傾斜がある。検出面は中振浮石層上面である。遺構の東辺は床面まで削剝されているが、残存する部分から平面形は隅丸方形であり、主軸をN-25°-Wにもつ。規模は北西-南東が約3.6mである。埋土は上位から黒色シルト・黒褐色シルトで、自然堆積である。他の住居址に見られた十和田a降下火山灰は検出されなかった。

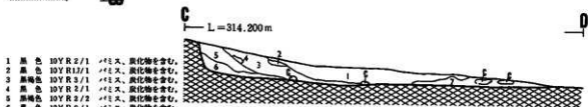
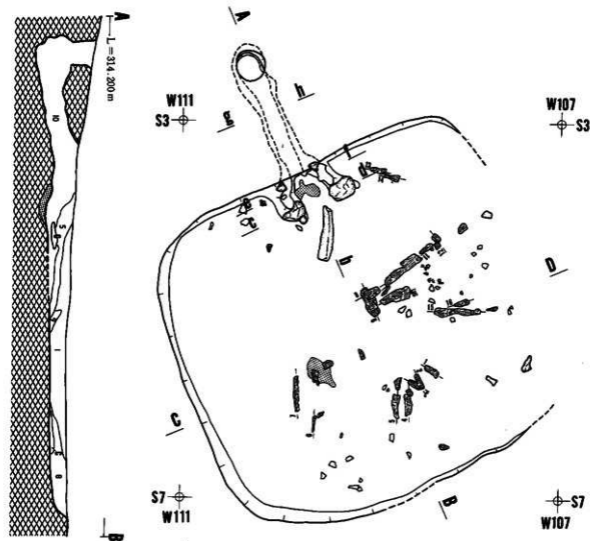
壁は外傾しており、中振浮石の純粋な層を掘り込んでいる。壁高は最も高い西隅で約30cmである。床面は北西壁から約1mまでは中振浮石の純粋な地山、それより北東側では中振浮石再堆積層の地山で、貼床はない。床面はやや堅くしまっており、緩やかな凹凸はあるが全体的には北東側へ僅かに傾斜している。床面には炭化材が分布し、当遺構が焼失住居であることを示している。炭化材の樹種はクリであるが、図中の12はアオタモである。柱穴および周溝は検出されなかった。

カマドは北西壁の中央に1基存在する。天井部と袖部は崩壊しているが、袖部や天井部を構築した跡が遺存する。図中のG1とG2は北東方向へ倒れた状況を示している。焼焼部の規模は50cm×45cmであり、焼土層厚は最大10cmである。火床面は床面より僅かに窪む。煙道は朝貫き式で、長さは約1.6m、断面は径25cm程の円形を呈する。煙道底部は煙出しに向けて下る。煙出しの平面形は円形であり、径約25cm、深さは約60cmである。

遺 物（第41図 写真図版33）

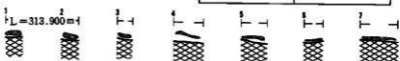
坏形土器（第41図1）

坏形土器は床面の東部から散乱した状態で破片が出土した。胎土や色調などから一個体と考



- 1 黒色 10Y R 2/1 炭化物を含む。
- 2 黒色 10Y R 1.5/1 炭化物を含む。
- 3 黒褐色 10Y R 3/1 炭化物を含む。
- 4 黒色 10Y R 2/1 炭化物を含む。
- 5 黒褐色 10Y R 2/2 炭化物を含む。
- 6 黒色 10Y R 2/1 炭化物を含む。
- 7 黒褐色 10Y R 3/1 炭化物を含む。
- 8 黒褐色 10Y R 2/2 炭化物を含む。
- 9 暗褐色 10Y R 3/4 炭化物を含む。
- 10 暗褐色 10Y R 3/3 炭化物を含む。

炭化材断面



基準高はすべて同じである。

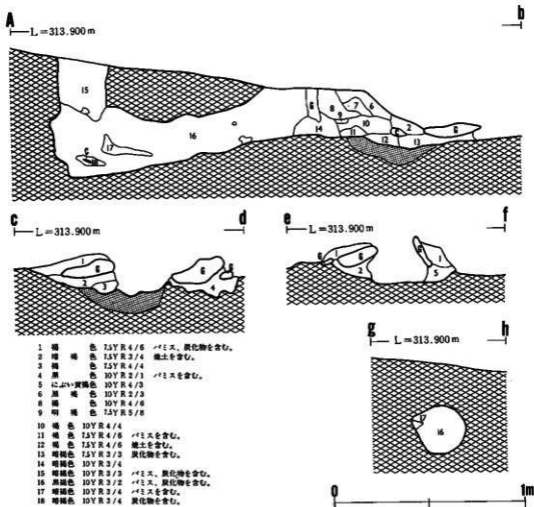


第17図 II H 41住居址

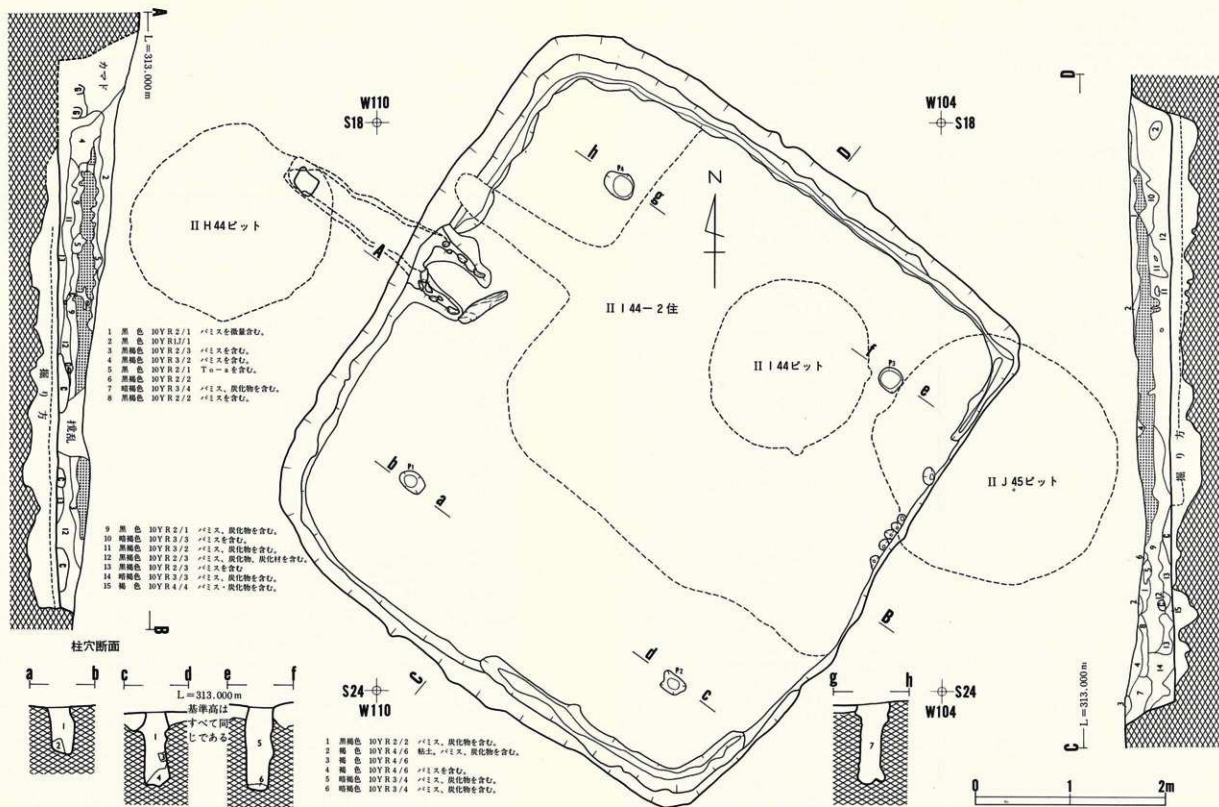
えられるが、図示したのは口縁部である。内面は黒色処理され、調整は内外面ともヘラミガキである。図化できなかった底部は丸底で、内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。

壺形土器 (第41図)

第41図2～5は壺形土器の口縁部破片である。3は丸味をもって外傾する。5は口縁部と胴部の破片が接合したもので、2とともに床面の東半で約2.5mの距離で散在していたものである。最大径を胴部にもつ球胴壺である。6はカマド周辺に散在していた破片が接合したものである。胴部中位から上の約2/5の残存である。色調はにぶい黄橙色で、黒斑がある。内面に明瞭な輪積みの痕跡をとどめている。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸む。頸部は「く」字状に屈曲し、胴部は脹む。最大径を口縁部にもつ。口縁部の調整は外面がナデ、内面はハケメである。頸部と胴部は、外面がハケメとヘラケズリを交え、内面はハケメである。7は6と至近



第18図 II H 41住居址カマド断面



第19図 II 144-1 住居址

の位置で出土した変形土器の底部である。外面に木葉痕をもつ。

その他の遺物（第41図）

8・9は縄文土器の破片である。

II I 44-1住居址

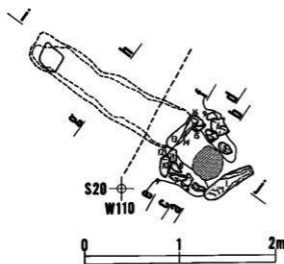
遺構（第19～22図 写真図版11～14）

この住居址は西尾根の鞍部南端の東側に位置し、II I 44-2住居址・II H 44ピット・II I 44ピット・II J 45ピットと重複する。当遺構の東側は鞍部の東側斜面に続き、北東側も緩やかに傾斜して下る。表土が円形に窪んでいたことから、遺構の存在は予測できた。平面形は隅丸方形であるが、東隅は角を持ち、西隅の円みは緩い。主軸はN-53°-Wである。規模は北東-南西約6.6m、北西-南東約6.2mである。埋土は3層に大別できる。埋土上位は表土直下の黒色・黒褐色シルトである。中位は十和田a降下火山灰の堆積層である。下位は炭化微粒・炭化材を含む黒褐色シルトである。なお南西壁の周辺では暗褐色粘土粒と褐色粘土粒の混土が上位から下位にかけて厚く堆積している。

壁は下位では遺存状況はやや良好で直線的に外傾するが、上位～中位では崩壊が見られ、凹凸をもって開く。北東壁は中亜浮石再堆積層で、北西側ではこの下位に南部浮石層がある。南西壁と北西壁では八戸火山灰層が主体である。炭化材の検出状況から、当遺構は焼失住居と判断できる。炭化材は床面の南西半分では遺存状態が良好である。ここでは材が北西-南東に並ぶ状況が観察できる。炭化材は図の19・22のように床面に密着する例もあるが、多くは床から浮いた状態にあり、20・21のように炭化材の下に異地性の焼土がある場合もある。炭化材の樹種は全てクリである。また断面の観察から、明らかに丸太材と判断できたものはなかった。

床面は浅い窪みは存在するが概して平坦であり、傾斜は見られない。床面はII I 44-2住居址と重複する部分では、当該住居址の貼床を再利用し、他の部分では八戸火山灰層の地山を床面としている。柱穴はP₁～P₄の4本である。P₁とP₂およびP₃とP₄の距離は3.5m、P₁とP₄およびP₂とP₃の距離は約4mで、それぞれは長方形の角に位置する。P₁は深さ約0.5mで、他に比べて浅いが底部は礫層に達している。P₃は最も深く、約0.9mである。周溝は北西壁の北半から北東壁と南東壁北端に至るまでと、南西壁の南半から南東壁の南端に至る間に存在する。

カマドは北西壁の中央に1基存在する。天井部と袖部は崩壊しているが、遺存状況から礎を芯として黄褐色シルトを貼って構築したものである。図中のG12とG14は接合するものであり下方へ折れた状態で検出された。このG12・G14はG1・G13とともに天井部を構築した礎である。燃焼部は地山を掘り窪めた後に、明黄褐色シルトを貼って火床面を構築している。焚口



W108
 S19

- | | | | |
|----|---------|-----------|-------------------|
| 1 | にじい・黄褐色 | 10Y R 5/4 | ノミス、炭化物を含む。 |
| 2 | 黒 | 10Y R 4/6 | ノミスを含む。 |
| 3 | 黄 | 10Y R 5/6 | ノミス、炭化物を含む。 |
| 4 | 明 | 10Y R 3/4 | 粘土、ノミス、炭化物、焼土を含む。 |
| 5 | 明 | 10Y R 3/4 | 粘土、ノミス、炭化物、焼土を含む。 |
| 6 | 黄 | 10Y R 5/6 | ノミスを含む。 |
| 7 | 暗 | 10Y R 3/3 | 炭化物を含む。 |
| 8 | 黄 | 10Y R 5/8 | |
| 9 | 黄 | 10Y R 5/6 | |
| 10 | 暗 | 10Y R 3/4 | ノミスを含む。 |
| 11 | 黒 | 10Y R 4/6 | |
| 12 | にじい・黄褐色 | 10Y R 4/3 | ノミス、炭化物、焼土を含む。 |

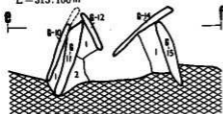
a L=313.100m



b c L=313.100m

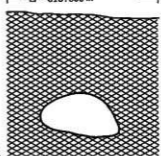


L=313.100m

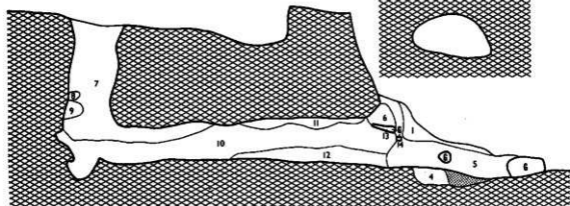


0 1m

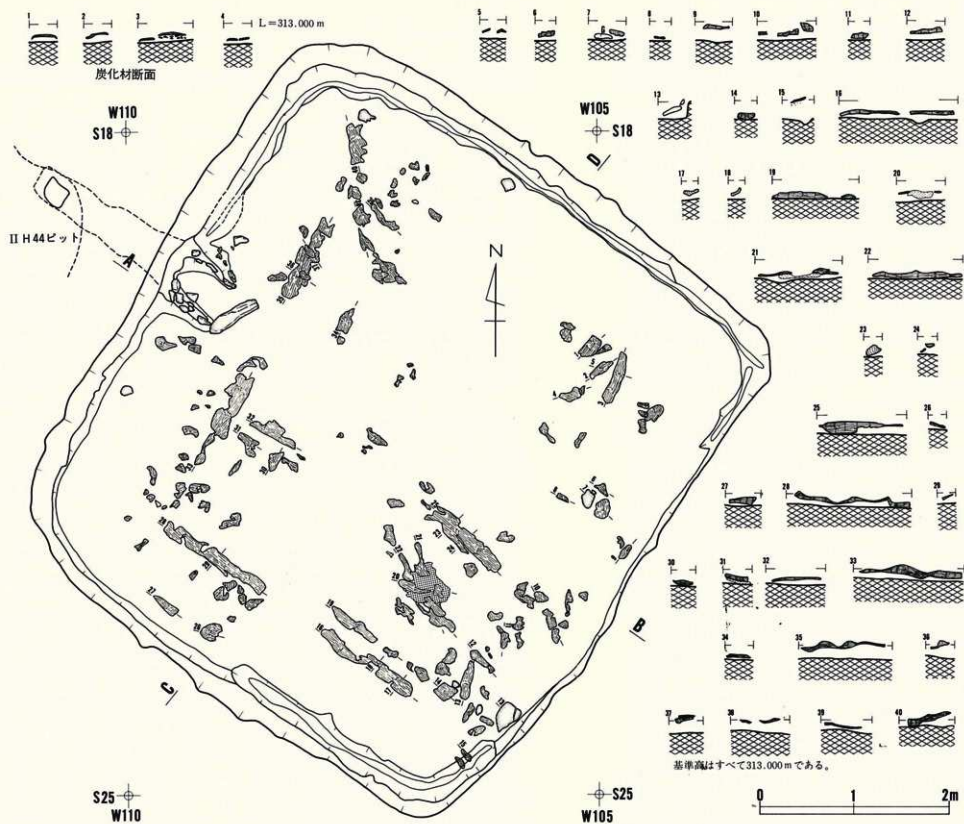
g L=313.600m



L=313.800m



第20図 II | 44- | 住居址カマド



第21図 II | 44- | 住居炭化材出土状況

部では火床面は僅かに窪む。現地性焼土は焚口部では不整形に検出された。焼土層厚は最大で7cmである。煙道は割貫き式で、長さ約1.7mである。煙道底面はほぼ水平であり、断面は不整形半円形を呈する。煙出しの平面形は不整形であり、底部は窪む。深さは約1mである。

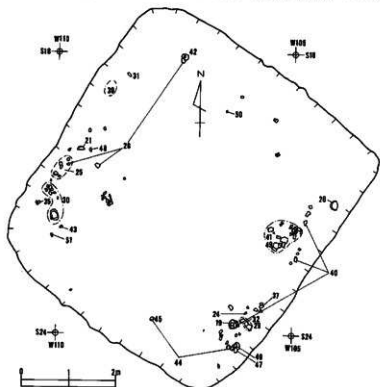
遺物 (第41~44図 写真図版33~36)

出土遺物は坏形土器・甕形土器が主で、他に土製紡錘車などがある。甕形土器の底部は10個体が出土したが、このうち5個体は南東壁の周辺で、3個体は北西壁の南半周辺で出土したものである。

坏形土器 (第41図・第42図)

坏形土器は6個体が図化できた。第41図10は南東壁際の南側床面で出土した。口縁部を約1/4欠損するが、全体的に皿に近い形態をもつ。色調はにぶい褐色で、底部内面には黒色処理の痕跡が残る。僅かではあるが炭化物が付着している。口唇部は丸み、口縁部から底部にかけては丸味をもって外傾する。底部は丸底風平底で、断面は厚い。調整は内面全体がヘラミガキ、外面は口縁部がヘラミガキ、底部はヘラケズリにヘラミガキを交える。11は南東壁北側の際で出土した。全体の3/5を残存する。色調はにぶい橙褐色で、内面は黒色処理されている。口唇部は直線的に外傾し、体部は丸味をもって底部につづく。底部は丸底である。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリにヘラミガキを交え、底部はヘラケズリである。内面は全体に

ヘラミガキである。12はカマドの左脇から出土した。全体の約1/2の残存である。色調はにぶい黄褐色で、内面の黒色処理は底部外面にまで及んでいる。口唇部は丸み、口縁部は直線的に外傾する。体部は丸味をもって底部につづき、底部は丸底である。底部の断面は厚い。調整は内外面とも全体に丁寧なヘラミガキである。第41図13・第42図1・2は坏形土



第22図 II-14住居址遺物出土状況

器の破片である。第42図1・2は小型で埴に近い形態である。いずれも内面が黒色処理されており、底部は丸底である。

高坏形土器（第42図）

高坏形土器は北西壁の南側の際で出土した第42図3の1点だけである。脚部以下を欠損している。色調は浅黄橙色で、内面は黒色処理されている。内面と口縁部外面の一部に炭化物が付着している。口唇部は丸む。側面形は全体的に丸味をもって外傾し、埴に近い形態である。調整は内面がヘラミガキ、外面がヘラケズリの後にヘラミガキである。

甕形土器（第42～44図）

甕形土器のうち、図化できたのは24点である。第42図4はカマドの南側約1.3mの床面から出土した。口縁部の約1/2と胴部上位の残存である。色調は黄橙色で、内面には炭化物が付着している。口唇部は丸み、口縁部は直線的に外傾する。頸部は屈曲し、胴部は脹む。最大径を口縁部にもつ。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部内面が横方向のナデ、外面は頸部からつづく縦方向のヘラミガキである。5は北西壁周辺で約7mの範囲に散在していた破片が接合したもので、胴部上位から口縁部にかけての約1/3が残存したものである。口唇部は丸み、口縁部は直線的に外傾する。頸部の括れは弱く、胴部上位が僅かに脹む。外面の調整は、口縁部がヨコナデの後に胴部へ連続する縦方向のヘラミガキである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。6は南西壁際の南半で出土した。胴部の僅かな残存である。強く脹んでおり、球胴甕の一部と考えられる。調整は外面が縦方向のヘラミガキ。内面は板状工具による横方向のナデで、単位が明瞭である。7は北西壁際の南半で出土した破片が接合したもので、全体の約1割を欠損する。口縁部の平面形は楕円形を呈し、器高も左右で差が著しい。色調は橙色であり、胴部には部分的に炭化物が付着する。最大径は口縁部にあり、器高は最大径を僅かに越える小型の甕である。口唇部は丸み、口縁部は直線的に外傾する。頸部は「く」字状に屈曲し、断面は厚い。胴部上位が脹み、底部に向かって窄まる。底部下端は外方に突き出されている。底部内面の中央は平坦である。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、頸部から底部下端にかけての外面は縦方向のヘラミガキ。胴部内面はナデの後に、棒状工具による強いミガキで、沈線状の窪みとなる。底部外面はヘラケズリである。第42図8～11・第43図1～4は口縁部の破片である。第42図8・10、第43図1・3の口唇部は僅かに尖る。また第42図9・第43図3の口唇部は、口縁部上位から屈曲して直に立つ。調整は内外面ともヨコナデ、外面には頸部から下方へ縦方向のヘラミガキが見られる。第43図5はカマドの右側で出土した。第42図5の破片が散在する範囲内である。色調・形態・法量・技法は第42図5と同一であり、両者は同一個体と考えられる。6は南東壁の際で約5.2mの距離で散在していた破片が接合したものである。胴部上位から上の約1/3の残存であるが、口唇部は欠損している。色調はにぶい黄橙色で、胎土は緻密で

ある。最大径は胴部中位にあたってと考えられる。口縁部は直線的で、僅かに外傾する。頸部は丸味をもって屈曲する。胴部中位に向って脹む。調整は外面が頸部から胴部にかけて縦方向のヘラミガキである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部は板状工具による横方向のナデである。7は南東壁際の中央からやや北側で一括して出土した破片が接合したもので、胴部・底部ほかに僅かに欠損する部分がある。胴部中位に最大径をもつ球胴甕である。口唇部は丸み、口縁部は上位で僅かに外反する。頸部は「く」字状に屈曲する。胴部上位と下位は丸味を僅かにもち、中位で大きく脹む。底部下端は外へ挽き出されている。底部内面は中央にむかって窪む。底部外面には木葉痕がある。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部外面は粗いハケメの後に縦方向のヘラミガキ、胴部内面は横方向のハケメである。8は床面の北隅で出土した胴部下半の約1/2と底部の残存である。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が黒色である。胴部は丸味をもって外傾し、底部下端は外方に挽き出されている。底部内面はナデツケによる凹凸が著しく、外面は中央がやや窪む。外面の調整は縦方向のナデ、内面は横方向のナデにハケメを交える。9は床面西隅で出土した胴部下端と底部約1/2の残存である。底部下端は僅かに外に挽き出されている。底部外面の中央は円形に窪む。胴部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面は斜方向のナデである。10は南西隅部で分散して出土し、胎土と色調は6に酷似する。底部の約1/2と僅かな胴部下位の残存である。胴部は僅かな丸味をもって外傾し、底部は丸味をもって下端で外方に挽き出されている。底部外面には藁状の短い植物繊維痕がある。底部内面は丸味をもって中央がやや窪む。胴部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。第44図1は南東壁際の南隅付近で出土した。胴部下端と底部の約3/5の残存である。色調は淡黄色である。胴部は外傾し、底部下端は外方に挽き出される。底部内面は中央が窪む。胴部外面の調整は縦方向のナデかあるいはヘラミガキ、内面はナデである。2は1と同じ場所で出土した球胴甕の胴部下位と底部の残存である。色調は橙色である。胴部は僅かな丸味をもって外傾する。底部外面はヘラケズリであるが、木葉痕を残している。内面はナデである。3はカマドの前で出土した胴部下位と底部の残存である。色調はにぶい橙色であり、内面には炭化物の付着が見られる。胴部は直線的に外傾し、底部下端は外方に挽き出される。底部の内面は丸味をもって中央が窪む。胴部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面は斜方向のナデである。4は南東壁中央付近で出土した。球胴甕と考えられる胴部下端の僅かな残存である。胴部外面の調整はヘラミガキ、内面はナデである。

土製紡錘車（第44図）

土製紡錘車は床面から2点出土している。第44図5は北東壁の中央付近で出土した。平面形は円形で、中央に貫通孔を1個もつ。断面形は横位の隅丸長方形に近い。6は西隅からの出土である。平面形は円形を呈し、中央に貫通孔を1個もつ。断面形は等脚台形である。

その他の遺物 (第44図)

埋土から縄文土器が2点出土した。第44図7は小型土器の口縁部破片である。口唇部内側に段をもつ。口縁部は2条の沈線で区画されている。8は底部の破片である。

II I 44-2住居址 (第23図 写真図版42~44)

この遺構はII I 44-1住居址と重複し、この遺構を北西と南西方向に拡張したのがII I 44-1住居址である。検出状況は、II I 44-1住居址の床面の精査で当遺構の範囲を占める貼床を確認したこと、当遺構の煙出しと考えられる痕跡がII I 44-1住居址の壁で検出されたこと、燃焼部に相当する部分で現地性焼土が確認できたことによる。従って残存する部分は北東壁・南東壁と、床面・焼土・煙出しのみである。

平面形は隅丸方形を呈し、主軸をN-53°-Wにもつ。規模は北東-南西が約4.4m、北西-南東が約4.2mである。壁高は最も高い北東壁西部で検出面から約0.6mである。貼床は褐色シルトと黄色シルトのブロックを多量に含む暗褐色土で構築されている。貼床撤去後の地山への掘り込みは、凹凸が複雑である。床面からは、当遺構にともなう柱穴は検出されていない。

カマドは火床面を除くほか、痕跡を検出できなかった。煙道も検出されなかった。煙道の長さは約1.7mである。煙出しは垂直に立ち、底部はピット状を呈する。煙出しの深さはII I 44-1住居址の検出面から約0.8mである。

当住居址にともなう遺物は、貼床の土に混入した土器の細片だけである。なお貼床の撤去によって、II J 44ピット・II J 45ピットと重複していることを確認した。

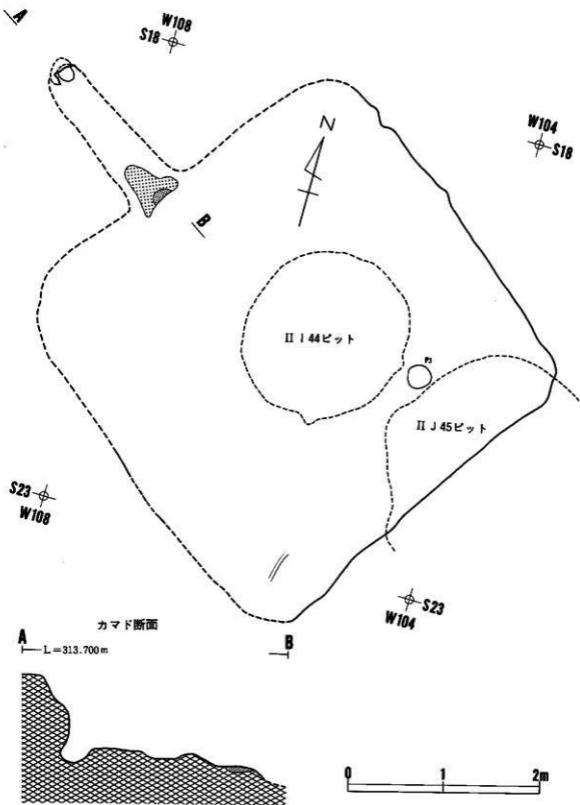
III A 45住居址

遺構 (第24図 写真図版14)

この遺構は西尾根先端の東側斜面の上位から中位にかけて位置し、検出面は東へ約17度傾斜している。検出面は中東浮石層上面である。平面形は東-西に長軸をもつ不整隅丸台形を呈する。規模は東-西約2.4m、南-北約2mである。埋土は黒色シルトの単層で、炭化物粒を微量含む。壁は直に近く立つ。壁高は西壁で約0.6m、東壁で約0.1mである。床面は部分的に堅く、他の部分では地山の中東浮石である。床面の中央からやや西に備して円形の浅いピットがある。ピットの規模は径約60cm、床面からの深さは5cm程であり、底部は平坦である。火処の痕跡は検出されなかった。

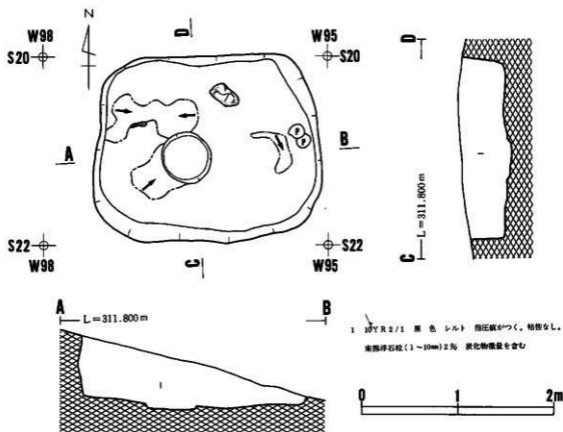
遺物 (第44図 写真図版36)

出土遺物は坯2点であり、東壁の中央で2個が重なるように、伏せた状態で出土した。2点は酷似しており、色調は外面が明赤褐色、内面には黒色処理の痕跡が残る。口唇部は丸む。口



第23図 II 144-2 住居址

縁部から底部にかけて全体に丸味をもつ。第44図10の口縁部上端は、口唇部に向って断面が薄くなる。外面の調整は、口縁部がヨコナデの後にヘラミガキ、体部から底部はヘラケズリの後にヘラミガキである。内面の調整はヘラミガキであるが、9は口縁部では横方向へのヘラミガキである。



第24図 III A 45住居址

〈西谷〉

西谷地区は、西尾根と中央尾根の間にあり、谷頭に湧泉があつて、北東から北西に流れる沢の兩岸である。右岸上流部分は西尾根の延長であり、この付近に3棟の奈良時代竪穴住居址が検出された。立地や検出の状況から西尾根奈良時代住居址と一連のものと考えられる。

Ⅲ B 54 住居址

遺構 (第25・26図 写真図版15・16)

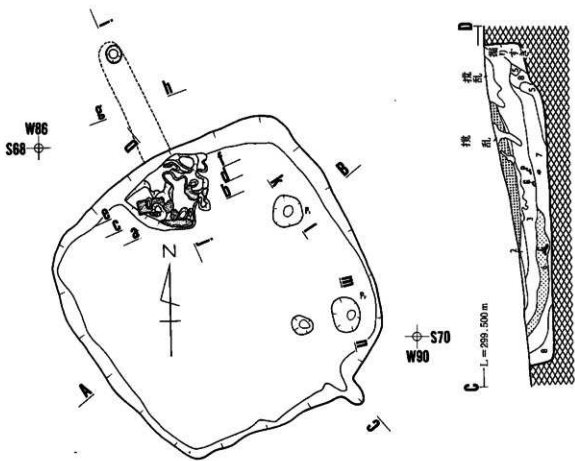
当遺構は西谷右岸にあり、当該時期の遺構としては最も南に位置する。地形は東方に下る緩斜面であり、当遺構の南15mには南流する沢がある。平面形は、北東壁の上部と南西壁の一部を掘りすぎているが、不整隅丸方形を呈する。主軸は北北西—南南東(N-31°-W)にある。規模は北北西—南南東が3.15m、東北東—西南西が3.1mである。埋土は最上位が十和田a降下火山灰層であり、中位が十和田a降下火山灰を塊状に含む黒褐色～黒色土である。下位は黒褐色～黒色土で、中兼浮石や炭化物を含む。壁は床面から垂直に近く外傾して立つ。壁高は最高の北隅で60cm、最低の南隅で12cmである。床面は緩やかな起伏があり、北から南へ微かな傾斜が計測できる。貼床はなされていない。床面には炭化材が少量ながら分布しており、当遺構が焼失した住居であることを窺わせる。

床面から検出されたピットは P_1 ～ P_3 である。 P_1 は北東壁際の中央よりやや北西に偏して位置する。平面形は不整形円形であり、断面形は浅いU字状を呈する。規模は35cm×32cm、床面からの深さは15cmである。 P_2 は東隅に位置する。平面形は楕円形であり、断面形は浅いU字状を呈する。規模は40cm×30cm、床面からの深さは20cmである。 P_1 ・ P_2 に対応するピットは検出されず、また形態から P_1 ・ P_2 が柱穴である蓋然性は低い。

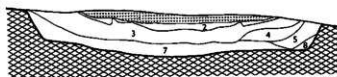
カマドは北西壁の中央に1基存在する。天井部と側壁(袖)は崩壊しているが、遺存する隙などから、礎を芯材として黒褐色シルト・暗褐色シルトを貼りつけて構築したものと考えられる。カマドの中軸は北北西—南南東(N-25°-W)である。火床面は緩い凹凸をもちながら煙道に向って上る。検出できたカマドの規模は、燃焼部の幅が42cm、奥行55cmであり、強い火熱を受けた部分での火床面からの焼土層厚は3cmである。煙道は壁を穿ち、地山を削りぬいて構築されている。壁に近い部分では天井が崩壊し、埋土には十和田a降下火山灰が塊状に含まれる。煙道底部は壁際から微かに下って煙出し部に至る。煙道の長さは1.25mである。煙出し部の平面形は円形であり、底部はピット状を呈する。規模は18cm×16cm、検出面からの深さは62cmである。

遺物 (第45図 写真図版37)

遺物は埋土から出土した縄文土器片47点であり、土師器は細片14点のほかは出土していない。



A L = 299.500 m



- 1 にごり質褐色 10Y R 5/3 十何箇 = 跡下火山灰
- 2 黒色 10Y R 1/1 - 2/2
- 3 黒 褐色 10Y R 1/1 - 2/2
- 4 黒 褐色 1.5Y R 2/1 +2 スを含む。
- 5 黒 褐色 10Y R 2/3
- 6 黒 褐色 10Y R 1/1 +2 スを含む。
- 7 黒 褐色 10Y R 2/2
- 8 黒 褐色 10Y R 2/2 +2 スを含む。

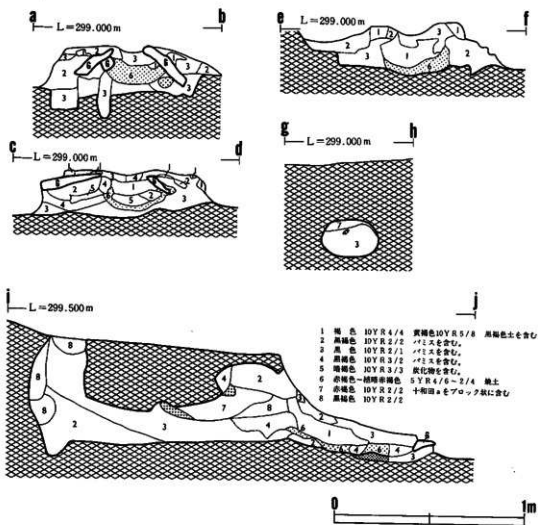


- K-I
- 1 黒褐色 10Y R 2/1
 - 2 黒褐色 10Y R 2/3

- M-N
- 1 黒褐色 10Y R 2/2 +2 スを含む。
 - 2 黒色 10Y R 2/1 +2 スを含む。



第25図 III B 54住居址



第26図 III B 54住居址カマド断面

ここでは地文だけの小破片については報告を割愛したい。第45図1~3は平行沈線をもつものである。3は口縁部内側に1条の沈線をもつ。平縁ではあるが、口唇部の平面は波状を呈する。4は無文であるが、研磨はなされていない。口唇部は丸みをもち、口縁部内側に幅の広い沈線をもつ。この他に埋土から石器が3点出土した。いずれもフレイクであり実測図の掲載は割愛した。

Ⅲ C53住居址

遺構 (第27～29図 写真図版16～18)

当遺構は西谷右岸に位置する。地形は東方に下る緩斜面で、東約12mに南流する沢がある。検出面はIV層上面である。平面形は歪んだ隅丸方形を呈するが、北東壁と南西壁は外方へ張り、南隅と東隅は他の2隅に比して大きく曲り、不整六角形に近い。主軸は北西—南東(N—38°—W)にある。規模は北西—南東が5.3m、北東—南西が5mである。埋土は上位が十和田a降下火山灰の水成堆積層で、層厚0.45mに達し、ラミナの発達を観察できる。中位は十和田a降下火山灰の滲透した暗褐色～黒色土であり、炭化物や縄文土器片・土師器片が含まれる。下位では炭化材や焼土が観察できる。

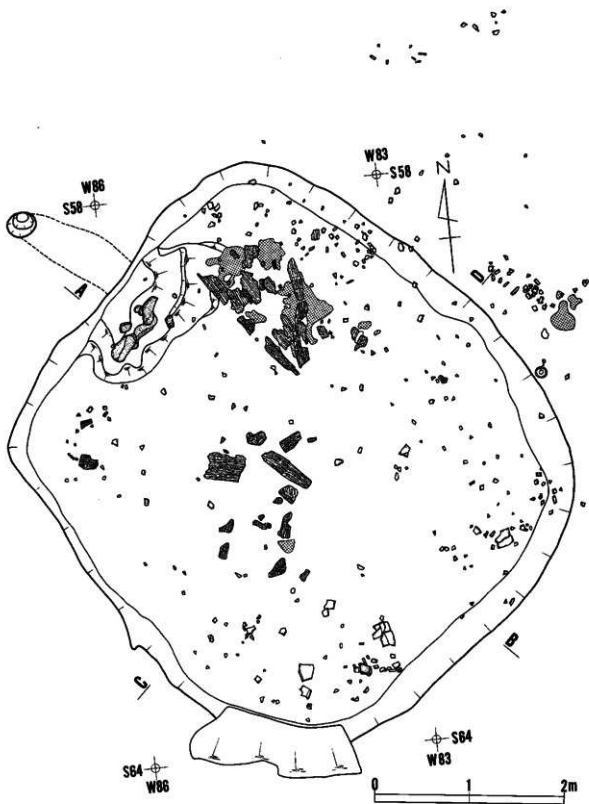
壁はIV層・V層に構築され、床面から垂直に近く外傾する。南隅の壁は大きく崩壊している。壁高は最高の北隅で0.7m、最低の南隅付近で0.35mである。床面は緩やかな凹凸をもち、北から南へ微かな傾斜が計測できる。貼床はなされていない。

柱穴は床面の東隅と南隅にP₁・P₂の2個が検出された。平面形はともに東—西に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は25cm×20cm、床面からの深さは15cmほどである。床面の中央に2基の浅いピットがある。P₂は床面の中央よりやや北西にあり、平面形は隅丸三角形を呈する。規模は南—北0.6m、東—西0.55m、床面からの深さは5cmである。P₁は中央よりやや南東にあり、平面形は不整形を呈する。規模は東—西0.6m、南—北0.55m、床面からの深さは9cmである。北東壁の中央よりやや南東に偏して、壁際に半円形に窪む部分がある。規模は半径0.32mであり、深さは5cmである。この部分の壁から東に焼土が分布し、土器片が散在している。

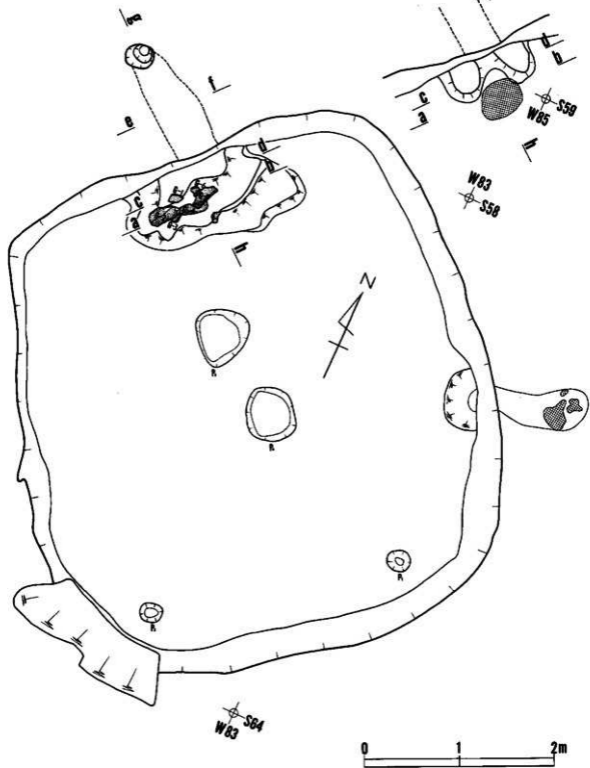
カマドは北西壁の中央に1基存在する。天井部と側壁(袖)は崩壊しているが、遺存する礎などの状況から、礎を芯材とし、黒褐色シルト・暗褐色粘土を貼りつけて構築したと考えられる。礎はカマドの中軸より南西に偏して遺存しており、崩壊する際に北東方向から力が加わったものと考えられる。またG4は、大きさや形状から焚口部の天井を構成していたと考えられる。検出できたカマドの規模は、側壁の幅が0.9m、燃焼部の幅が0.5mである。燃焼部における焼土の形成は良好であり、火床面には緩い凹凸がある。焼土層厚は4cmである。煙道は壁を穿ち、地山の黒色シルトを削りぬいて構築されている。煙道底部は火床面から微かに上っていく。長さは1.4mである。煙出しの平面形は楕円形を呈し、規模は0.25m×0.3mである。煙出し底部の深さは検出面から0.5mである。

遺物 (第45～47図 写真図版37～39)

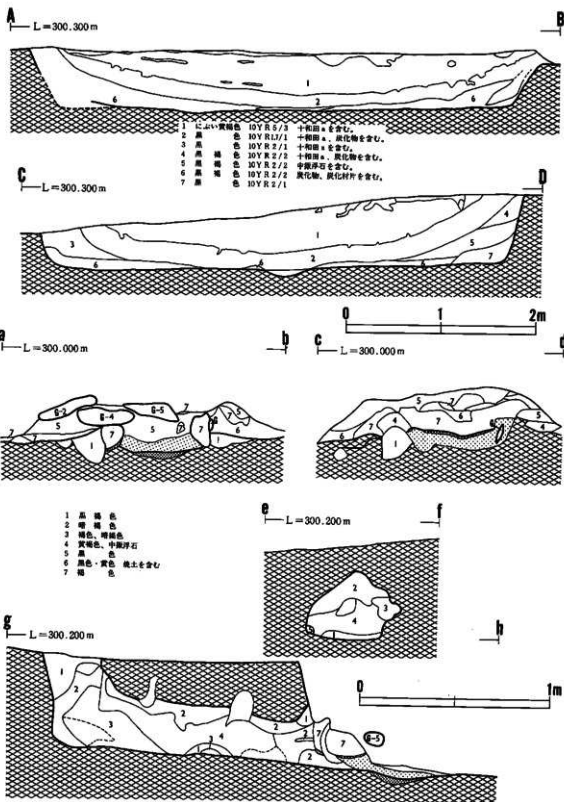
遺物は遺構内のほぼ全域にわたって出土しているが、東半にややまとまって出土している。また床面直上での出土遺物は少ない。図化できた出土遺物は、土師器の変形土器と縄文土器である。



第27图 III C 53住居址炭化材出土状况



第28図 III C 53住居址



第29図 III C 53住居址埋土・カマド断面

土師器壘形土器 (第45・46図)

第45図9は全体の約1/2を残存する甕である。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。最大径を口縁部にもつ。口縁部は外反し、頸部は丸味をもって括れる。胴部はやや張り、底部に続く。底部下端は側面が張り出す。調整は、口縁部の内・外面がヨコナデ、胴部外面はヘラミガキ、内面はナデである。10は最大径を胴部にもつ甕で、底部を欠損する。口縁部は外傾し、頸部は丸味をもって括れる。胴部はやや張る。調整は口縁部上半が内外面ともヨコナデ、胴部は外面がヘラミガキ、内面がナデである。11は胴部の残存を反転したものである。9と同一個体の可能性もたれる。調整は外面がヘラミガキ、内面がナデである。12は球胴甕の胴部と底部約1/4の残存を反転復元したものである。胴部は全体的に丸味をおよび、最大径は胴部中位にあったと考えられる。調整は外面がヘラミガキ、内面がナデである。第46図1は口縁部と胴部の約1/4を欠損した球胴甕である。頸部に幅が広く浅い沈線がまわる。肩部の張りは緩く、また胴部下半は直線的に外傾する。最大径は胴部中位にある。左右が不对称で、歪む。外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部上半・肩部が光沢のあるヘラミガキ、胴部下半は荒れているがヘラミガキである。内面の調整はナデである。2は壘形土器の口縁部であり、3は壘形土器の底部である。

縄文土器 (第46・47図)

第46図4は壘形土器で、胴部約2/3の残存である。胴部上半は丸味をもつが、下半は直線的である。5は小型の深鉢形土器と考えられる。口縁部と胴部の僅かな残存で、反転復元したものである。口唇部は外側に折り返えされている。胴部は微かな張りみをもって垂直に近く立つ。地文はなく、縦方向に荒いヘラナデが観察される。6は鉢形土器の胴部下端と底部の残存である。第46図8～19・第47図1～17は埋土から出土した口縁部破片である。第47図6の口唇部は外側にそがれており、地文との境に稜がある。

III G45住居址

遺構 (第30図 写真図版18)

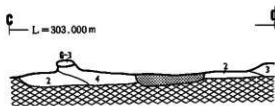
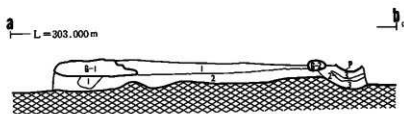
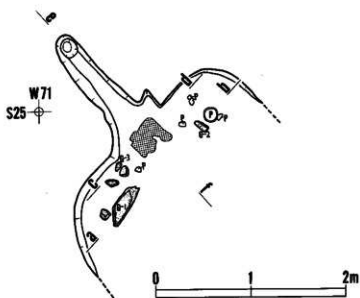
当遺構は西谷右岸の谷頭に位置し、南25mに湧水がある。地形は西尾根の東側崖の直下にあたり、遺構の西側では傾斜が急である。IV層の堆積は厚く、約1mに達する。検出面はIV層下位である。検出できたのは北西壁の輪郭とカマド及び煙道の下部だけであり、全体の平面形・規模は不明である。残存する部分から、平面形は西隅が緩い丸味をもつ不整隅丸方形もしくは不整隅丸長方形と考えられる。主軸方向は不明であるが、カマドと煙道の中軸は北北西―南南東(N-30°-W)を示す。規模は北東―南西2.5mである。埋土は黒色シルトの単層であり、微量の南部浮石を含む。壁高は最高の北隅で9cmである。床面はカマド周辺だけしか残存しない

が、おおむね平坦であり、貼床はなされていない。柱穴は存在しない。

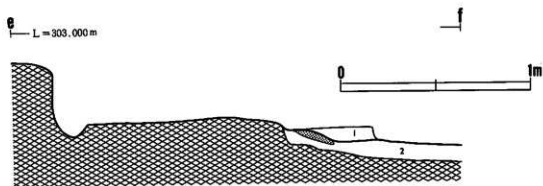
カマドは北西壁の中央に1基存在する。燃焼部直上まで検出面が下がっているため、構築法は明らかでないが、遺存する礫の状況から、礫を芯材として暗灰黄褐色粘土を貼りつけたものと考えられる。火床面は幅40cm、奥行30cmで、焼土層厚は4cmである。煙道は壁の外方に延びており、長さは1.3mである。底部は火床面からやや上り、中程からは先端に向ってやや下る。

遺物 (第47図 写真図版37)

第47図22はカマドの右脇から出土した坏形土器である。側面形は口縁部から底部にかけて丸味をもち、底部は丸底となる。内面は黒色処理されており、口縁部は横方向のヘラミガキ、体部は底部中央から放射状に長く引かれたヘラミガキである。外面の調整は横方向のヘラミガキである。23はカマド前で出土した変形土器で、口縁部・体部の約1/3の残存を反転復元したものである。口縁部は外傾し、頸部は丸味をもつ。胴部はやや張り、最大径を胴部にもつ。外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。内面は、口縁部がナデ、胴部はハケメである。



- 1 黒色 10Y R1J/1~2/1 南面押石を含む。
- 2 黒色 10Y R1L/1~2/1 南面押石を含む。
- 3 黒褐色~暗灰黄色 1.5Y 3/2~4/2
- 4 黒色 10Y R 2/1 南面押石を含む。



第30図 III G 45住居址

〈北尾根〉

計6棟が検出されている。ここはほぼ東一西に延びる北尾根の南側にあり、竪穴住居址はいずれも南ないしは南西向き緩斜面上に占地し、位置的には、南側斜面の裾部に近いところである。相伴土器はいずれもロクロ未使用成形であり、奈良時代に比定される住居址である。

6棟のうち、カマドを持つもの4・カマドは持たないが地床炉をもつもの1・カマド、地床炉いずれも持たないもの1である。カマドは、北西壁の中央部に構築され、煙道は刳貫き式である。5棟の住居址は貼床が施されており、全面貼床のものと部分貼床のものがある。さらに3棟では床面から多量の炭化材が確認されており、これらは焼失したものと考えられる。なお、壁に接して床面から周溝が2棟で検出されている。

検出面は6棟共に基本層序第IV層相当層上面である。また、検出面からは、灰白色を呈する十和田a降下火山灰が確認されているが、埋土中にも、自然堆積の様相を呈する十和田a降下火山灰層がある。

出土遺物は、前述のように土師器ではロクロが使用されておらず、中には典型的な手捏ね成形のものもみられる。器種的には圧倒的に甍形土器が多く環・鉢型土器は少ない。他に、甌・鉄製鎌・土製紡錘車・土製ないし石製玉・土製勾玉・砥石も出土している。

IVB36住居址

遺構（第31図 写真図版19・20）

当遺構は、北尾根南側斜面の南西端近くに位置する。至近の東からは、カマドをもたないIVD36竪穴住居址も検出されている。ここは、地形的には南西向き緩斜面を呈するところである。検出面は、薄い中振浮石を含む暗褐色土層（第IV層）上面である。遺構の範囲の検出面からは十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、隅丸正方形を呈する。主軸はN-50°-Wにもつ。規模は、北西-南東3.4m・北東-南西3.4mである。埋土は26層に細分されるが、自然堆積の様相を呈する。埋土の4は、におい黄橙色（乾燥すると灰白色）を呈する十和田a降下火山灰である。また、1~3・5~6・16にも十和田a降下火山灰が多量に含まれている。

地山を壁とし、この壁は、八戸火山灰層まで掘り込まれている。壁の立上がりは直に近いが、斜面上位の北東側の開口部付近が若干崩落している。壁高は、北西壁48cm・南西壁40cm・南東壁50cm・北東壁56cmで、斜面上位の北側ほど高い。床面は、八戸火山灰層および南部浮石層を基盤とするが、床面の南および東側には貼床が施されている。この貼床は、黒・黒褐色シルトおよび掘り上げた南部浮石・八戸火山灰土などで構成されている。この貼床は、南部浮石層を基盤とする南側に厚く施されている。

柱穴と思われるピットが2個検出された。しかし、P₁はカマド袖部の下位、P₂は後述する

周溝を切っており、当住居の柱穴ではない。壁の内側に接して周溝が廻っている。幅は8～18cmである。床面からの深さは5～8cmである。

カマドは、北西壁の中央に1基もつ。天井部は、遺存しないため不明である。袖部もほとんど崩壊し詳細不明である。しかし、右袖部には、角・亜角礫が散乱しており、これが構築材に利用されたものと思われる。また、両袖部に若干残る袖土は八戸火灰土であり、壁から連続するものであるから、構築の方法は、壁から「削出し」、それに隙を組み合わせたものであろう。燃焼部底面には、焼土が形成されている。平面形は長楕円形を呈し、長径56cm・短径30cm、最大層厚10cmである。この焼土は、床面が直接火熱を受けて形成されたものであるが、焼成は脆弱である。煙道は割貫き式で、長さは0.7mである。この煙道は入口付近ほど広く、奥に進むにしたがって狭くなる。煙道底面は、中頃まで水平に延びるが、煙出し部に近づくにつれてやや下がる。煙出し部の平面形は不整形を呈し、長径36cm・短径32cmである。底面は煙道底面より約10cm深くなり、壁は直立する。

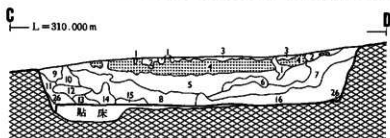
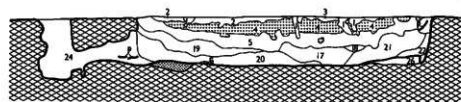
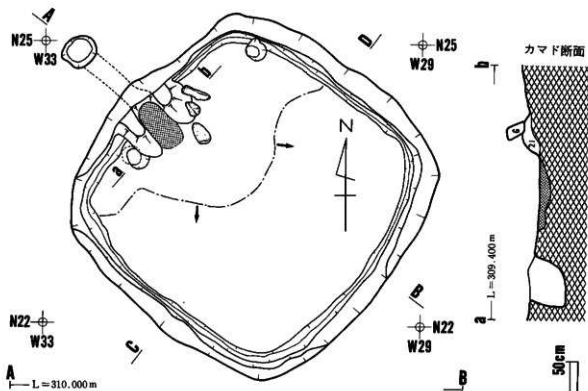
遺物 (第48図 写真図版40)

坏形土器 (第48図)

埋土中位から1点だけ出土した(1)。口縁部および体部の約1/2が残存する。色調は明赤褐色を呈し、外面に軸横み痕を残し、全体的に成形が雑である。底部は平底で、体部は直線的に外傾し、口縁部で内彎し、口唇部が尖がる。欠損が著しく全容は把握できないが、全体的に器形が歪んでいる。外面調整は、口縁部から体部はナデが施され、底部はケズリである。内面は全体的にナデ調整である。

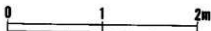
壺形土器 (第48図)

5点出土した。いずれも床面からの出土であるが、完形のものはない。これらのうち大別すると2・6は長胴型、4・5は球胴型である。しかし、両タイプ共器形が若干異なる。2は口縁部約1/5、体部上半が残存する。色調はにぶい橙色を呈し、輪積み成形である。全体の最大径は口縁部にもつが、体部の最大径は体部上半(肩部付近)にもち、口縁部径より僅かに小さい。口縁部は初め外傾し、口唇付近で内彎する。口唇部は丸む。調整は、口縁は内外面ヨコナデであるが、外面では、体部に施されたミガキの調整痕が口縁部下位まで及んでいる。体部は外面がナデ後ヘラガキ調整されているが、いずれも上下方向に行なわれている。内面は横方向へのナデである。6は体部だけが残存し、口縁部・底部が欠損している。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混入している。器形は2に比して全体的に細身である。調整は、外面では上下へのヘラミガキが施されているが、その前にケズりないしナデ調整も行なわれたと思われる。内面は、主として上下へのナデ後ヘラミガキも若干施されている。5は体部下半および底部だけ残存する。色調はにぶい橙色を呈し、砂粒が若干混入している。輪積み成形されてい



- 1 黒 褐色 10Y R 3/2 十和田・降下火山灰を含む。
- 2 灰 黄 褐色 10Y R 4/2 パズ、十和田・降下火山灰を含む。
- 3 にごい黄褐色 10Y R 4/3 十和田・降下火山灰を含む。
- 4 にごい黄褐色 10Y R 7/2 十和田・降下火山灰層。
- 5 黒 褐色 7.5Y R 3/2 パズ、十和田・降下火山灰を含む。
- 6 暗 褐色 7.5Y R 3/3 パズ、十和田・降下火山灰を含む。
- 7 暗 褐色 7.5Y R 3/4 パズ、炭化材を含む。
- 8 灰 色 7.5Y R 2/1 パズ、炭化材を含む。
- 9 暗 褐色 7.5Y R 4/3 パズを含む。
- 10 灰 褐色 7.5Y R 4/2 パズを含む。
- 11 にごい黄褐色 7.5Y R 5/3 パズを含む。
- 12 明 褐色 7.5Y R 5/6 パズを含む。
- 13 暗 褐色 7.5Y R 4/6 パズを含む。

- 14 黒 褐色 10Y R 2/2 パズを含む。
- 15 明 黄 褐色 10Y R 6/6 パズを含む。
- 16 暗 褐色 10Y R 4/6 パズ、十和田・降下火山灰、炭化材を含む。
- 17 暗 褐色 10Y R 2/1 パズを含む。
- 18 暗 褐色 10Y R 3/2 パズを含む。
- 19 暗 褐色 7.5Y R 2/2 パズを含む。
- 20 暗 褐色 7.5Y R 3/4 パズを含む。
- 21 暗 褐色 7.5Y R 4/3 パズを含む。
- 22 暗 褐色 7.5Y R 4/4 パズを含む。
- 23 明 黄 褐色 10Y R 6/8 パズ、炭化材を含む。
- 24 暗 褐色 10Y R 2/4 パズ、塵土ブロックを含む。
- 25 暗 褐色 10Y R 4/6 粘土(カマド底部)
- 26 暗 褐色 10Y R 4/6 パズを含む。



第31図 IV B 36住居址

るが、焼成はやや脆弱である。器形は底部が張出し、体部下半は直線気味に外傾するが、体部中央付近で大きく腰らむ。外面の調整は、ナデの後に上下方向へのミガキ、内面はケズリ、後にナデ調整されているが、体部下半ではケズリ調整だけである。また、底部外面には木葉痕が観察される。4は、色調・胎土・成形技法が5に類似するが、焼成は5より堅緻である。器形は底部の張出しが5よりも顕著である。体部も体部中央付近に最大径をもつように大きく腰らむようであるが、体部上半から上部は残存しない。体部は内外面共にナデ調整されているが、外面では縦方向、内面では横ないしは斜位に施されている。底部は外面は雑なナデ、内面もナデが施されている。なお、4には内外面に黒斑、5の外面に煤の付着、内面には「煮沸物の焦げ」が観察される。3は口縁部が若干残存するもので、内外面にヨコナデが施されている。なお、これは既述のいずれかの変形土器と接合する可能性もあるが確定はできなかった。

IV D 34住居址

遺構 (第32・33図 写真図版21・22)

当遺構は、北尾根南側斜面の南西に位置する。ここは、地形的には南西向き緩斜面を呈するところである。当地区から土師器を伴う竪穴住居址が6棟検出されたが、当住居址は、これらの最北端に占地する。検出面は、中乗浮石を含む暗褐色土層(第IV層)上面である。遺構の範囲は若干の窪みを呈し、ここから灰白色を呈する十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、隅丸正方形を呈する。主軸は、N-49°-Wにもつ。規模は、北西-南東4.5m・北東-南西4.6mである。埋土は41層に細分されるが、自然堆積の様相を呈する。埋土の4は、にぶい黄橙色(乾燥すると灰白色)を呈する十和田a降下火山灰である。さらに、1~3・5・8・22にも多量の十和田a降下火山灰が含まれている。また、9・10の下位には、多量の炭化材片が含まれている。

地山を壁とし、この壁は、北西側が八戸火山灰層(第VII層)、南東側は南部浮石層(第VI層)まで掘り込まれている。壁の立上がりは、壁中段の八戸火山灰層までは直に近いが、南部浮石層から上位は急激に外傾して開く。これは、しまりの弱い南部浮石層が自然に崩落したためで、この傾向は、斜面上位の北側ほど著しい。壁高は、北東壁100cm・北西壁70cm・南西壁56cm・南東壁54cmで、斜面上位の北側ほど高い。床は、全面に貼床が施されている。この貼床は、黒・黒褐色シルトおよび掘り上げた南部浮石・八戸火山灰土で構成されており、南部浮石層を基盤とする南東側ほど厚く施されている。

壁の内側に周溝が廻っている。幅は3~12cmである。床面からの深さは5~20cmと一定しないが、概して南側ほど深い。柱穴は検出されなかった。なお、南東壁際の床面から小ピットが1基検出された。平面形は不整形円形、断面形は浅皿形を呈する。規模は、長径64cm・短径46

cm・深さは20cmである。しかし、このピットは、当住居址に伴うか否か、また、機能・性格についても不明である。

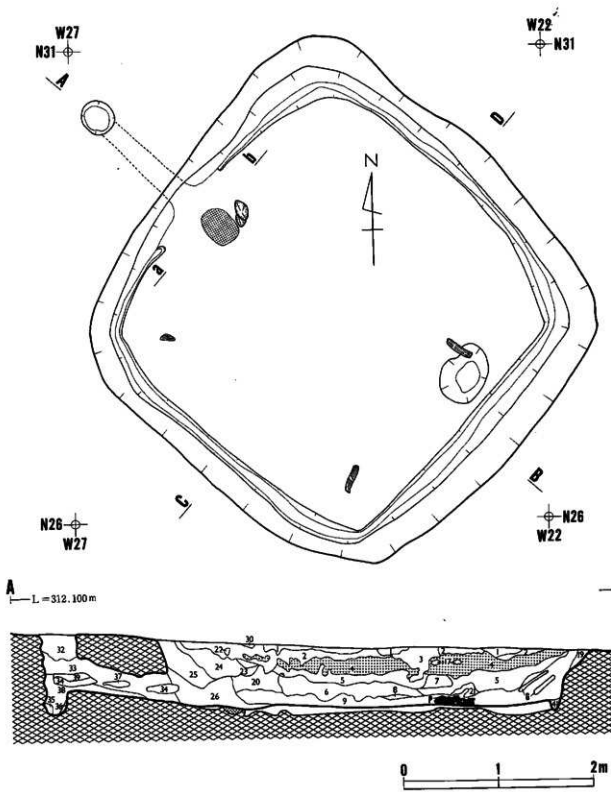
カマドは、北西壁のほぼ中央に1基もつ。天井部は遺存しないため不明である。袖部もほとんど崩壊している。ただ、右袖部に垂角礫があること、両袖部に想定される位置から礫の抜取り痕が検出されたこと、付近の床面から他の住居址で、カマド袖部の構築材に使用されたと同じ特徴をもつ黄褐色粘土塊が出土していることから、袖部は、床面（貼床面）に礫を埋設し、粘土を貼り付けて構築されたものと思われる。燃焼部底面には、焼成の弱い焼土が形成されている。焼土の平面形は楕円形を呈し、長径40cm・短径30cm・最大層厚10cmである。この焼土は、貼床が直接火熱を受けて形成されたものである。燃焼部底面は、ほぼ水平に延び煙道入口に至る。煙道は、削ぎ式である。煙道の長さは0.8mである。煙道底面は、緩く上りながら煙出し部に達する。煙出し部の平面形はほぼ円形を呈し、開口部で長径18cm・短径17cmである。底面は、煙道底面よりも24cmほど深く掘り込まれている。煙出し部の埋土には、多量の炭化材片が含まれている。壁は直立する。

なお、当住居址の埋土下位、床面直上から炭化材片が出土し、その出土状況から当住居址は、焼失したものと思われる。これらの炭化材の樹種については、アオタモとの鑑定結果が得られている。

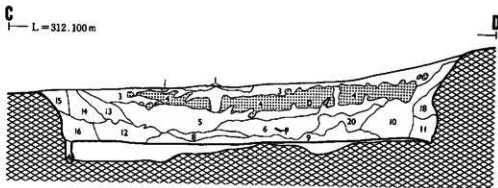
遺物（第49～51図 写真図版41・42）

坏形土器（第49図）

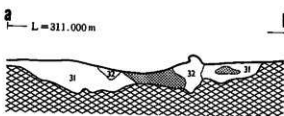
4点出土したが、いずれも床面からのものである。ほぼ完形に近い2を除くと、他は欠損が著しい。特に3は口縁部が若干、4は底部が残存するだけである。また4点いずれも黒色処理されている。2は、大別すると大型の坏である。色調はにぶい橙色を呈し、小礫・砂粒が混入する。底部は丸底を呈し、全体的に内彎気味で開く。口唇は丸む。調整は、内外面共に丁寧なミガキが施されているが、外面は主として横・内面は縦に施されている。なお外面には黒斑が観察される。1は中型坏であるが、口縁部約1/4・体部約1/2は欠損している。色調は、にぶい黄橙色ないしは橙色を呈し、若干の小礫・砂粒が混入している。底部は丸底を呈し、体部は外傾気味に開き、口縁部が僅かに内彎する。口唇は丸む。調整は外面が口縁部から体部上半はヨコナデ、体部下半はミガキ、底部はケズリが施されている。内面は全体を縦方向へミガキを施している。なお、外面には煤と思われるものが観察される。3は口縁部が若干残存するだけである。色調はにぶい黄橙色ないしは橙色を呈し、胎土には僅かに小礫・砂粒が混入している。焼成は堅緻である。体部中央付近に若干の凹部をもち、体部は外傾気味に開くが、口縁部でやや直立気味となる。口唇は丸む。調整は内外面ナデが施されているが、外面は横へ、内面は縦に施されている。4は丸底を呈する底部である。残存部からは大型坏と思われる。色調はにぶ



第32图 IV D 34住居址 I



カマド断面



黒	色	7.5Y R 2/1	14	暗	褐色	10Y R 3/4	ベニスを含む。	32	褐色	7.5Y R 4/4	ベニス、炭化材を含む。	
黒	灰	色 7.5Y R 4/1	15	暗	褐色	10Y R 4/4	ベニスを含む。	33	褐色	7.5Y R 4/3	ベニスを含む。	
黒	褐色	色 10Y R 3/2	16	にじみ	黄褐色	10Y R 4/3		34	暗	褐色	7.5Y R 4/6	ベニス、炭化材、焼土、ロップを含む。
にじみ	黄褐色	色 10Y R 6/3	17	黒	褐色	色 10Y R 2/3	炭痕跡。	35	明	褐色	7.5Y R 5/6	ベニス、炭化材を含む。
黒	色	7.5Y R 2/1	18	暗	褐色	10Y R 4/6	ベニスを含む。	36	暗	褐色	7.5Y R 4/6	ベニス、炭化材を含む。
暗	褐色	色 7.5Y R 3/3	19	暗	褐色	7.5Y R	ベニスを含む。	37	暗	褐色	7.5Y R 3/4	ベニス、炭化材を含む。
黒	褐色	色 7.5Y R 3/1	20	明	褐色	7.5Y R 2/2	ベニスを含む。	38	暗	褐色	7.5Y R 2/3	ベニス、炭化材を含む。
黒	褐色	色 7.5Y R 3/2	21	黄	褐色	10Y R 5/6	ベニス、炭化材を含む。	39	暗	褐色	7.5Y R 3/4	ベニス、炭化材を含む。
			22	にじみ	黄褐色	10Y R 5/3	ベニス、十和田・降下火山灰を含む。	40	暗	褐色	7.5Y R 4/4	ベニス、炭化材、焼土を含む。
			23	黒	褐色	10Y R 2/3	山灰を含む。	41	暗	褐色	色 10Y R 3/4	ベニス、炭化材を含む。(腐植土)
			24	黒	褐色	10Y R 3/2	ベニスを含む。					
			25	暗	褐色	10Y R 4/4	ベニスを含む。					
			26	黄	褐色	10Y R 5/6	ベニスを含む。					
			27	暗	褐色	10Y R 3/3	ベニスを含む。					
			28	暗	褐色	10Y R 3/4	ベニスを含む。					
			29	黄	褐色	10Y R 5/8	ベニスを含む。					
			30	黒	褐色	10Y R 2/1	ベニスを含む。					
			31	暗	褐色	7.5Y R 4/6	ベニスを含む。					

第33図 N D 34住居址 2

い黄橙色を呈する。調整は、外面では体部がナデ、底部はケズリを施している。内面は、やや粗雑なミガキが施されている。なお、外面には煤ないしは黒斑が観察される。

壺形土器（第49～51図）

10点出土したが、埋土出土の第50図1を除くと床面からのものである。このうち、1・第49図7は明らかに長胴型、第50図3は球胴型であるが、他はやや体部に脹らみをもち、いわば両者の中間に属する。第49図5は中型で、口縁部・体部が若干欠損するもののほぼ完形に近い。成形は輪積みである。色調は明赤褐色を呈し、僅かに砂粒が混入するが、胎土・焼成共に良好である。器形は体部下半が内彎しながら開き、体部中央付近から直立気味となる。肩部には段をもち、口縁部は初め外傾して後に内彎しながら開く。口唇は先細りする。最大径は口縁部にもつ。調整は口縁部が内外面共にヨコナデである。体部は外面がナデを施した後にミガキ調整が行なわれており、いずれも縦方向である。内面は主として横へのナデを施している。底部外面には木葉痕が観察される。なお、外面には煤・炭化物・内面には黒斑・炭化物が付着している。第49図6も口縁部・体部に若干の欠損がみられるもののほぼ完形である。成形は輪積み技法を用いている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には若干の小礫・砂粒が混入している。焼成はやや脆弱である。器形は底部が低く、強出しが無い。体部はほとんど脹らみをもたず外傾する。頸部の括れもほとんど認められない。口縁部は内彎気味に開く。口唇は先細りで尖り気味である。最大径は口縁部にもつ。調整は口縁部では内外面共にヨコナデ、体部はナデが施されているが、体部内面の一部にハケム調整がみられる。底部外面には木葉痕が観察される。なお、外面には若干の黒斑が観察され、内面には炭化物が付着している。7は口縁部・体部上半が残存する。輪積み成形されており、焼成がやや脆弱で器表の剝落が著しい。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には微量の小礫が混入している。器形は平面形が楕円形を呈する。体部は僅かに脹らみ、頸部の括れも少ない。口縁部は初め外傾し、後に内彎気味となる。最大径は口縁部にもつ。口唇は丸む。調整は口縁部が内外面共にヨコナデ、体部上半は、外面ではナデの後に主として縦方向へのミガキ、内面はナデが施されている。なお、外面には若干の黒斑がみられ、内面には多量の炭化物が付着している。第50図1は底部と体部下半の一部が欠損する。成形は輪積みの技法を用いている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒が混入している。焼成はやや脆弱である。体部の脹らみが弱い。肩部には顕著ではないが段をもつ。口縁部は直線的に外傾して開き、口唇は丸む。最大径は口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデ調整されている。体部は、外面は縦への丁寧なミガキ、内面は斜位のナデが施されている。2は、口縁部・体部上半の約1/3が残存する。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には小礫・砂粒が微量に混入している。最大径が体部上半にあり、頸部に段をもつ。口縁部は外反する。口唇は丸みを帯びるところ、先細りするところとある。調整は口縁部が内外面共にヨコナデ、体部では外面が

ナデの後にミガキ、内面はナデを施している。3は、体部の約3/4、底部が残存する。痕跡は明瞭ではないが、輪積み成形されている。色調は、明褐色ないしはにぶい褐色を呈し、胎土には多量の砂粒が混入している。器形は、既述のとおり典型的な球胴型である。口縁部は欠損するが最大径は体部中央部と思われる。底部の張出しはみられない。頸部の段もみられない。調整は、肩部ないし頸部は内外面共にヨコナデ、体部は外面がミガキ・内面は主として横へのナデが施されている。なお、両面に若干の黒斑が観察される。第51図1は、底部および体部下半が残存する。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には微量の小礫・砂粒が混入している。成形は輪積み技法を用いている。底部は張出されている。体部は緩く内彎するようである。調整は、外面が縦方向へのミガキ・内面は斜・横位のナデが施されている。底部外面は木葉痕がみられる。なお、外面に煤・内面には炭化物が付着している。第50図4は底部および体部下半の1/2弱が残存する。痕跡は明瞭ではないが、成形は明らかに輪積み技法を用いている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には小礫が混入している。底部は若干張出している。体部下半は直線的に外傾する。調整は、外面が縦方向を中心とするミガキ、内面は横・斜方向へのナデが施されている。底部外面には木葉痕がみられる。なお、外面に煤および黒斑・内面には炭化物の付着が観察される。2は、底部だけ残存する。色調はにぶい橙褐色を呈し、小礫が混入している。底部は張出している。調整はナデが施され、外面に木葉痕が観察される。3は、底部の約1/4が残存する。残存部から小・中型壺の底部と思われる。色調はにぶい黄褐色を呈し、若干の小礫が混入している。器表面が荒れており不鮮明であるが、外面にはケズリ・内面はナデが施されているようである。

鉢形土器 (第51図)

床面から1点だけ出土した(4)。全体の約3/5が残存する。成形は輪積み技法を用いている。色調がにぶい黄褐色ないしはにぶい橙褐色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土には若干の小礫が混入している。器形は底部が平底風丸底である。体部は下半が内彎気味に開き、上半は口唇まで直線的に外傾する。口唇は丸む。また、全体的に器形が歪んでいる。調整は、外面がナデの後に主として横方向へのミガキを施しているが、底部の外面は粗いミガキ調整だけである。内面は、縦方向へのミガキ調整がされているが、口縁部にはヨコナデ気味の調整痕が観察される。

IVD36住居址

遺構 (第34図 写真図版23・24)

当遺構は、北尾根南側斜面の南西に位置する。ここは、地形的には南西向き緩斜面を呈するところである。至近の周囲には、カマドをもつIVB36・IVD34・IVE37竪穴住居址もある。検出面は、薄い中氣浮石を含む暗褐色土層(第IV層)上面である。遺構の範囲は若干の窪みを呈

し、ここから灰白色を呈する十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、やや歪みがみられるが隅丸正方形を呈する。規模は、北西—南東3.4m・北東—南西3.4mである。埋土は15層からなるが、自然堆積の様相を呈する。埋土の4は、にぶい黄褐色（乾燥すると灰白色）を呈する十和田a降下火山灰である。また、3にも多量の十和田a降下火山灰が含まれている。

地山を壁とし、この壁は、北西側が八戸火山灰層(第VII層)、南東側は南部浮石層(第VI層)まで掘り込まれている。壁高は20~34cmで、斜面上位の北側ほど高い。壁は外傾して急激に立ち上がるが、北側で壁上位の南部浮石層が崩落しているところがある。床は、全面に貼床が施されている。この貼床は、黒・黒褐色シルトおよび掘り上げた南部浮石・八戸火山灰土で構成されている。また、この貼床は、南部浮石層を基盤とする南東側ほど厚く施されている。

柱穴は検出されなかった。当住居址はカマドをもたないが、床面中央部のやや南から焼土が検出されている。この焼土は、貼床が直接火熱を受けて形成されたもので、明らかに現地性焼土である。したがって、この焼土は、位置・形成状況から当住居址の炉と思われる。焼土の平面形はほぼ円形を呈し、長径60cm・短径54cmで、最大層厚は8cmである。焼成は良く硬い。

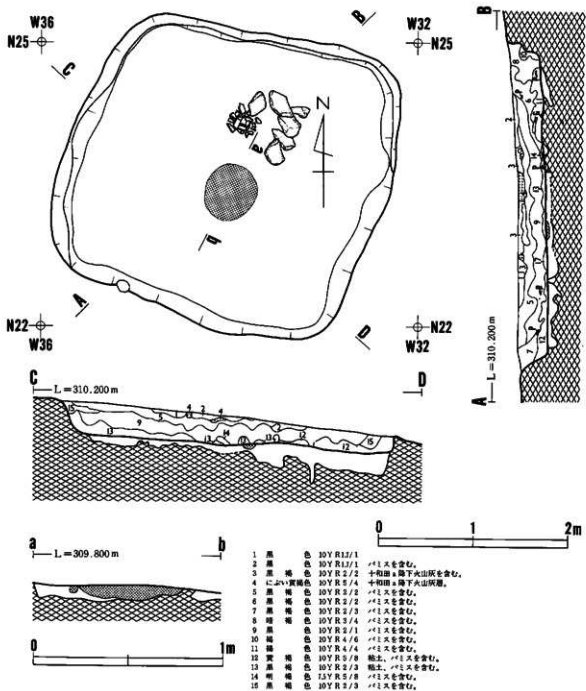
遺物 (第51・52図 写真図版43)

環形土器 (第51図)

床面から2点出土しているが、完形のものはない。いずれも内面が黒色処理されている。5は、口縁部が若干および体部~底部が残存する。当地区の住居址出土の環では小型である。底部は丸底を呈し、体部中央に明瞭な段をもっている。体部は内彎し、口縁部は外傾気味である。口唇は先細りするが、丸む。調整は、外面では口縁部から体部にかけてヨコナデ後軽いミガキ、底部はナデ後ミガキが施されている。内面は主として縦方向へのミガキが丁寧に施されている。なお、内面に施した黒色処理の黒斑が外面口縁部にまで達している部分もある。また、体部から底部にかけて煤あるいは黒斑と思われるものも観察される。6は、底部だけが残存するが、大型環のものと思われる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に砂粒が混入している。実測図上には表われていないが、輪積み成形されたものである。底部は、平底風丸底である。調整は、外面では、体部下半がナデ後にミガキ・底部はケズリを施している。内面はミガキ調整されているが雑である。なお、底部外面には黒斑が観察される。

甕形土器 (第51・52図)

3点出土しているが、いずれも床面からのものである。そのうち、7は、口縁部若干および体部下半の一部が欠損するもののほぼ完形である。全体の器形は長胴型である。成形技法は輪積みである。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には小礫・砂粒が混入している。焼成はやや脆弱である。器形は底部が僅かに張出されており、体部は下半が内彎して開き、中央部はほぼ直立、上半で再び内彎気味となる。頸部に軽い段をもつ。口縁部は外傾し、口唇部で内彎する。



第34図 IV D 36住居址

口唇は先細りするが端部は丸む。調整は、口縁部では内外面共にヨコナデ、肩部はナデ後ミガキを施している。体部は縦方向への粗いミガキが施されている。底部はナデツケ調整である。内面は粗いナデが施されている。底部外面には木葉痕が観察される。なお、外面には煤・炭化物、内面にも特に体部下半に多量の炭化物が付着している。第52図2は、口縁部および体部が若干残存するだけである。成形技法は輪積みである。色調はにぶい橙色を呈し、微量の砂粒が混入している。口縁部は僅かに外反し、口唇は丸む。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデが施されている。頭部外面は縦方向へのナデ、体部外面は縦方向へのミガキ調整である。体部内面にはミガキが施されている。1は、口縁部の約1/4が残存し、胎土は橙色を呈し、若干の小礫が混入している。口縁部は内彎気味に開き、口唇は丸む。調整は内外面共にヨコナデが施されている。

IV D 39 住居址

遺 構 (第35・36図 写真図版25~27)

当遺構は、北尾根南側斜面の南西端に位置する。ここは、地形的には南向き斜面を呈するところである。当地区から土師器を伴う整穴住居址が6棟検出されたが、当住居址は、これらの最南端に占地する。検出面は、十和田b降下火山灰および中飯浮石を含む黒褐色土層(第III・IV層の再堆積層)上面である。検出面からは十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、隅丸正方形を呈する。軸は、N-72°-Wにもつ。規模は、北西-南東3.5m・北東-南西3.2mである。埋土は38層に細分されるが、自然堆積の様相を呈する。埋土の4は、にぶい黄褐色(乾燥すると灰白色)を呈する十和田a降下火山灰である。さらに、1~3・26にも多量の十和田a降下火山灰が含まれている。また、10・12の南東壁際には、多量の礫や土師器片が含まれている。

地山を壁とし、この壁は、北西側が八戸火山灰層(第VII層)上位、南東側は、南部浮石層(第VI層)まで掘り込まれている。壁は外傾しながら急激に立ち上がる。壁高は32~80cmであるが、斜面上位の北側ほど高い。床は、全面に貼床が施されている。この貼床は、黒・黒褐色シルトおよび掘り上げた南部浮石・八戸火山灰土で構成されている。また、この貼床は、南部浮石層を基盤とする南東側ほど厚く施されている。

柱穴状ピットが北西壁に接した北寄りの床面から1個検出された。平面形は楕円形で、長径26cm・短径21cm、深さは30cmである。しかし、他に対応する柱穴が検出されないこと、当住居址との新旧関係が不明であることから、当住居址の柱穴であるか否かは確定できなかった。

カマドは、北西壁のほぼ中央に1基もつ。天井部は、遺存しないため不明である。袖部は、扁平な角礫を床に埋設あるいは設置し、その周囲に粘土を貼り付けて構築したものと思われる。燃焼部底面には、焼土が形成されている。焼土の平面形は楕円形を呈し、長径36cm・短径28cm、

最大層厚は10cmである。この焼土は、貼床が直接火熱を受けて形成されたもので、焼成は弱い。燃焼部底面は、緩く上りながら煙道入口に至る。煙道は、剃り貫き式で、長さは0.6mである。煙道底面は緩く上りながら延び、煙出し部近くで若干下る。煙出し部の平面形は円形を呈し、開口部で長径36cm・短径34cmである。底面は、煙道部底面より若干深く掘り込まれ、凹凸もみられる。壁は、やや外反気味に立ち上がる。埋土中には炭化材片・タールが含まれている。

なお、床面直上から多量の炭化材が出土したが、出土状況から当住居址は、焼失したものと考えられる。これらの炭化材の樹種については、櫟・栗という鑑定結果が得られている。

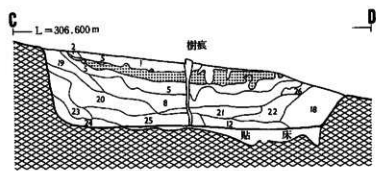
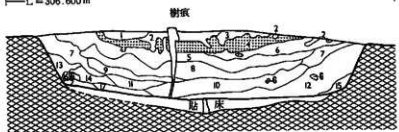
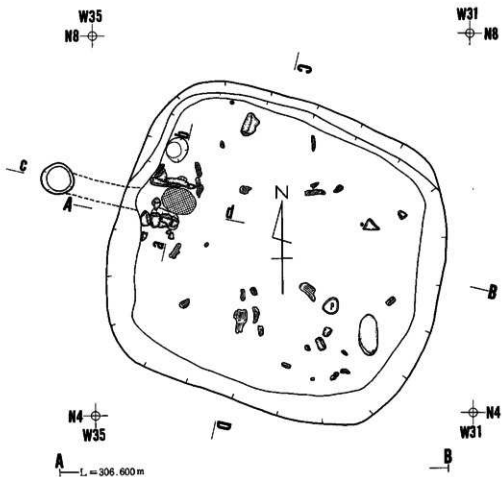
遺物（第52～54図 写真図版43～45）

坏形土器（第52図）

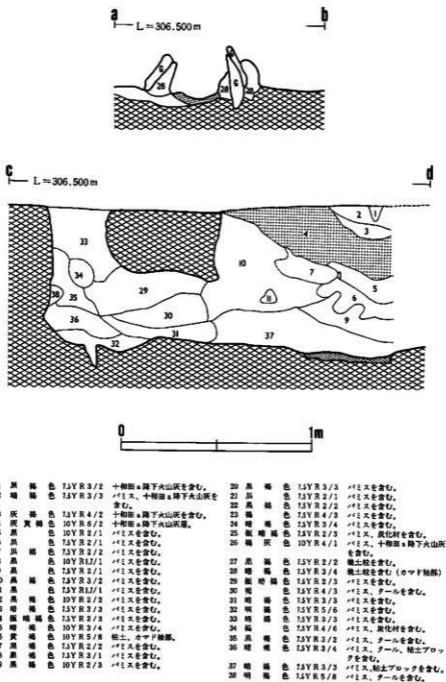
2点出土しているが、いずれも床面からのものである。そのうち、3はいわゆる手捏ね土器で成形が極めて粗い。4は、口縁部に若干の欠損部分がみられるもののほぼ完形である。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒が混入している。焼成は堅緻である。底部は丸底を呈し、段をもつ。体部から口縁部は内傾～外反気味と立上がりが一様ではない。口唇は先細りし、端部は尖がる。調整は、口縁部から体部まで内外面共にヨコナデが施され、底部は、内外面共にナデ調整されている。なお、内外面に黒斑が観察される。3は、全体の約1/5が残存する。色調は明赤褐色ないしはにぶい橙色を呈し、胎土に若干の砂を含む。成形は粗く、焼成も脆弱である。底部は丸底である。特に調整の痕跡はみられない。

甕形土器（第52・53図）

9点出土している。出土層位でみると、床面からのものと埋土下位からのものがある。タイプ的には、いわゆる長胴型はみられず、体部が欠損するものを除くと、球胴型2点と他は両者の中間型である。また、大きさでは、いわゆる大型2点・中型3点・小型2点で、他は不明である。第52図5は、体部に欠損がみられるが完形に近い。痕跡は明瞭ではないが輪積みの成形技法を用いていると思われる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には多量の小礫が混入している。焼成は脆弱で、器表の剥落が著しい。器形は、底部が張出され、体部の脹らみは中央付近で最大となる。頸部の括れは浅く、口縁部は内彎して開く。口唇はやや先細りするが、端部は丸む。最大径は口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデが施されている。体部は、内外面ケズリ調整であるが、外面は主として縦方向、内面は横・斜方向に施されている。底部にはナデが施されているが、外面に木葉痕がかすかに観察される。なお、外面には煤・黒斑、内面には炭化物の付着もみられる。6は、口縁部約1/2・体部約1/5が欠損しているが、復元可能である。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には多量の小礫が含まれている。成形はその痕跡が明瞭ではないが、輪積み技法が用いられているようである。焼成はやや脆弱である。器形は、底部が僅かに張出されている。体部は、下半が緩く内彎して開き、体部の最大径は上半



第35圖 IV D 39住居址 I



第36図 IV D 39住居址 2

にもつ。頸部は強いヨコナデ調整によって括れている。口縁部は内彎して開き、口唇は尖り気味である。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデ、体部は、外面がナデ後ミガキ・内面はケズリ後ナデが施されている。底部外面には、木葉痕が観察される。なお、外面には煤の付着がみられる。以上の2点は小型壺である。

7は、口縁部・体部の一部は欠損しているが、ほぼ完形の中型壺である。色調はよい橙色を呈し、胎土には小礫・砂粒が混入している。成形は輪積みの技法が用いられ、焼成はやや脆弱である。器形は、底部が張出されており、体部は内彎し、その最大径は中央付近にもつ。頸部の括れは浅く、口縁部は外傾した後に内彎気味となる。口唇はやや先細りになるが、端部は丸む。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデが施されている。体部は、外面が縦方向へのナデ、内面はケズリ後ナデ調整されている。なお、外面には黒斑・炭化物(煤)、内面には炭化物が観察される。8は、口縁部約 $\frac{1}{4}$ ・体部約 $\frac{1}{2}$ が欠損している。中型壺に属し、輪積み成形されている。色調は、灰白色を呈する。胎土には砂粒が混入している。焼成はやや脆弱で、器表が荒れている。器形は、底部の張出しが著しく、体部は内彎して開き、体部の最大径は中央にもつ。口縁部は内彎して大きく開く。口唇は、尖り気味である。なお、全体の最大径は、口縁部にもつ。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデ、体部では、外面が縦方向へのケズリおよび若干のナデ、内面は横方向へのナデが施されている。なお、外面は全体に黒斑をもち、内面には特に体部下半から底部にかけて炭化物が付着している。第53図4は、口縁部および体部の $\frac{1}{2}$ が欠損している。形状的には、球胴型の中型壺である。成形は輪積み技法である。色調はよい橙色を呈し、胎土には砂粒が混入している。焼成は良好である。器形は、底部が直線的に張出されている。体部は大きく内彎し、その最大径は中央にもつ。調整は、体部は内外面共ケズリおよびナデが施されているが、外面は縦・内面は主として横方向に施されている。頸部には、横位のハケメ調整痕が強く残っている。底部には木葉痕もみられる。なお、外面に炭化物の付着・黒斑、内面にも黒斑が観察される。

第53図1は、口縁部の $\frac{1}{5}$ 、体部の下半以下が欠損しているが、輪積み成形された大型壺である。色調はよい褐色を呈し、胎土には多量の砂礫が混入している。焼成が脆弱なためか、内面の荒れが著しい。体部は緩やかに内彎し、最大径は、体部中央にもつ。頸部の括れは緩やかである。口縁部は内彎して開き、口唇は丸む。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデ、体部は両面ケズリが施されている。体部のケズリは、外面では縦・内面では横あるいは斜方向に施されている。なお、外面では、炭化物(煤)・黒斑、内面では若干の黒斑が観察される。2は、体部上半の約 $\frac{1}{2}$ および体部下半以下が欠損している。これは、輪積み成形された大型球胴壺である。色調はよい黄褐色で、胎土には微量の小礫が混入する。焼成は、やや脆弱である。体部は大きく脹らむ。最大径は、体部中央にもつと思われる。頸部は、若干深く括れている。口縁

部は内彎して開く。口唇は丸むが、外殺ぎされたように尖がることもある。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデが施されている。体部も共にナデ調整であるが、その方向に違いがみられる。なお、内外面に若干の黒斑が観察される。

5は、底部および体部下半が若干残存するだけである。これは、色調・胎土・焼成・調整等から1と同一個体の可能性をもつ。ただ、かなり器表の荒れが著しいため確定はできない。底部は、張出されている。体部は大きく張らむようである。3は、口縁部の約 $\frac{1}{4}$ が残存するだけである。色調は橙色を呈し、胎土には小礫が若干混入する。口縁部は内彎して開き、口唇は先細りする。調整は、内外面共にヨコナデが施されている。

甗 (第53図)

床面から1点だけ出土している(6)。輪積み成形された完形のものである。色調は橙色を呈し、胎土には若干の小礫と多量の砂が混入している。焼成は良好であるが、全体的に成形・調整が雑である。器形は、僅かに体部を張らませながら開き、口縁部は直立する。口唇は先細り気味であるが、端部は丸む。なお、体部上端に強くヨコナデした際の段がみられる。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデされている。体部は、外面ケズリ・内面ケズリおよびナデ調整が施されている。

手捏ね土器 (第54図)

第52図3もこの範疇に入ると思われるが、ここでは、小型のもの(いわゆるミニチュア土器)を扱う。4点出土しているが、いずれもカマド付近の床面からのものである。

1は、底部に四つの脚をもつ。口縁部に若干の欠損部をもつが、ほぼ完形である。色調はにぶい橙色を呈し、微量の砂礫を含む。体部はほぼ直立し、口縁部で僅かに内彎する。外面に若干のナデによる調整痕がみられる。3は、底部の $\frac{1}{2}$ 強が残存する。色調はにぶい橙色を呈する。特に調整は観察されない。2は口縁部～底部の $\frac{1}{2}$ が残存する。色調はにぶい褐色を呈する。外面は、成形が粗く凹凸がある。底部から直立して立つ。口縁部から体部の外面には、ヨコナデの調整痕がみられる。4は、器の蓋の「つまみ」であろうか。色調はにぶい黄橙色を呈し、調整痕はみられない。

土製品 (第54図)

5～8は、勾玉であるが、成形は手捏ねによるものである。このうち、完形のものは5、1点だけである。頭部には貫通孔が穿たれている。焼成は脆弱である。

鉄器 (第54図)

床面から鐵の刃部が1点出土している(9)。腐朽が著しいが、刃部の「反」は軽い。

石製品 (第54図)

球形の玉が1点、床面から出土している(10)。石材は凝灰岩でやや脆く、約 $\frac{1}{2}$ が欠失している。

IV E 37住居址

遺構 (第37・38図 写真図版28~30)

当遺構は、北尾根南側斜面の南西にある。至近の北西からは、IVD36住居址も検出されている。ここは、地形的には南向き斜面を呈するところである。検出面は、中栗浮石を含む薄い暗褐色土層(第IV層)上面である。遺構の範囲の検出面からは灰白色を呈する十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、隅丸正方形を呈するが、北東壁が若干張っている。主軸はN-48°-Wである。規模は、北西-南東4.2m・北東-南西4.2mである。埋土は21層に細分され、自然堆積の様相を呈する。埋土3は、にぶい黄褐色(乾燥すると灰白色)を呈する十和田a降下火山灰である。また、3にはわずかに黒色シルトが含まれているが、硬くしまっている。さらに、1・2・4にも十和田a降下火山灰が含まれている。

地山を壁とし、この壁は、北西側は八戸火山灰層(第VII層)、南東側は南部浮石層(第VI層)下位まで掘り込まれている。壁の立上がりは、南側では直に近いが、北側では壁中位の南部浮石層が崩落しているため、開口部が開く。壁高は、北西および北東壁74cm・南西壁22cm・南東壁28cmで、斜面上位の北側ほど高い。床面は、八戸火山灰層・南部浮石層を基盤とするが、北東側を除く部分に貼床が施されている。この貼床は、黒・黒褐色シルトおよび掘上げた南部浮石・八戸火山灰土で構成されている。また、この貼床は、南部浮石層を基盤とする南側ほど厚く施されている。

カマドは、北西壁の中央に1基もつ。天井部は遺存しないため不明である。袖部は、床面に肩平な角鏝を立位に埋設、その周囲に粘土を貼付けて構築したものと思われる。燃焼部の火床面は浅い窪みを呈し、焼土が形成されている。焼土の平面形は不整形を呈し、長径58cm・短径40cm、最大層厚4cmである。また、この焼土は、床面が直接火熱を受けたものであるが、焼成は脆弱である。煙道は割り貫き式で、長さは0.7mである。煙道底面は水平に延び、煙出し部に達する。煙出し部の平面形は楕円形に近く、長径44cm・短径38cmである。壁はほぼ直立するが、開口部付近でやや外傾して開く。

なお、床面直上から多量の炭化材が出土したが、出土状況から当住居址は、焼失したものと考えられる。また、これらの炭化材は、粟という鑑定結果が得られている。

遺物 (第55・56図 写真図版45・46)

環形土器 (第55図)

床面から2点出土している。1は、完形で手捏ね成形である。全体的に外面の成形が粗い。色調はにぶい褐色を呈し、ごく微量ではあるが、小礫が混入している。焼成は良い。底部は平底で、一部が台状に張出されている。体部の立上がりは直立気味の部分、大きく外傾して開く

部分とがあり一様ではない。したがって、全体的に器形は歪んでいる。小型のわりには肉厚で、口唇は丸む。器面調整はヨコナデを主としている。

2は、口縁部へ底部の約1/2が残存する。色調はにぶい褐色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土には砂粒が混入する。輪積み成形されているが、全体的に粗雑なつくりである。底部は丸底を呈し、体部は凹凸を呈しながら外傾し、口縁部は内傾気味となる。なお、体部に比して口縁部は極端に肉薄となる。口唇は丸む。調整は、口縁部では外面がヨコナデ・内面はミガキである。体部は、外面がナデ・内面はミガキ調整されている。底部外面は強くケズリ取っている。なお、外面の口縁部に黒斑がみられる。

変形土器（第55・56図）

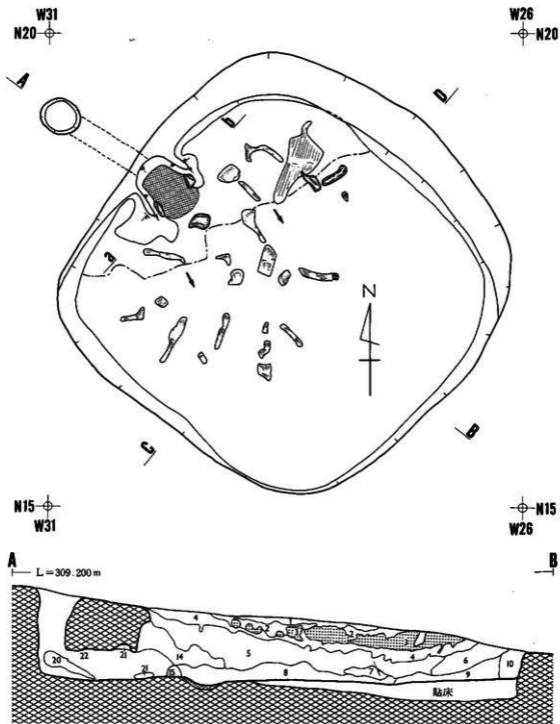
5点出土している。ほとんど床面からのものである。そのうち、3および4は、若干の欠損があるもののほぼ完形である。この両者は、いわゆる大型甕で、タイプ的には、3が長胴形・4は長胴形と球胴形の間形である。また、残存状況から5は中型甕、第56図1は球胴形の変と思われる。

3は、色調がにぶい橙色を呈し、胎土には砂礫が混入している。器形は、底部が若干張出されており、体部は緩やかに外彎する。頸部には軽い稜をもつ。口縁部は内彎して開き、口唇が内側に捲れるところもある。最大径は口縁部にもつが、体部の最大径は、体部中央よりやや下位にある。調整は、口縁部では、内外面共にヨコナデが施されている。また、このヨコナデ調整は、肩部にまで及んでいる。体部は、外面がケズリ後ナデ・内面はナデ調整されている。底部外面には、木葉痕が観察される。なお、内外面に炭化物あるいは黒斑がみられる。

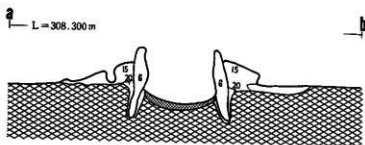
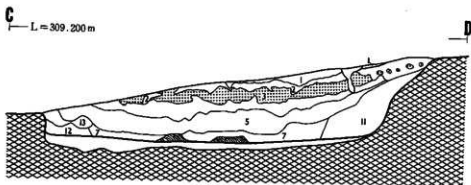
4は、色調がにぶい褐色を呈し、胎土には砂粒が混入する。成形は輪積み技法が用いられ、焼成はやや脆弱である。底部は剝落し欠失している。体部は中央部が最も扁平、最大径もここにもつ。口縁部はおおむね内彎して開くが、内彎状態は一様ではない。口唇は先細り、端部は尖る。調整は、口縁部では内外面共にヨコナデが施されている。体部では、外面が縦方向へのケズリ後ミガキ・内面は主として横へのナデ調整が施されている。なお、外面には、炭化物（煤）および黒斑、内面にも若干の炭化物が観察される。

5は、口縁部および体部の約1/4が残存する。これは、埋土上位からの出土である。色調はにぶい橙褐色を呈し、胎土には微量の砂が混入する。輪積み成形で、焼成は堅緻である。体部の扁平は小さく、頸部の括れが極端に浅い。口縁部もほとんど直線的に開く。口唇は丸む。調整は、口縁部では内外面共にヨコナデが施されているが、外面では、体部からのミガキ調整で切られる部分もある。体部は、外面で縦方向への粗いミガキ・内面は横方向へのナデが施されている。なお、内外面に炭化物の付着・黒斑がみられる。

6は、底部と体部下半が若干残存するだけである。色調は明褐色を呈し、微量の小礫を含む。



第37図 IV E 37住居址 I



- | | | | | | |
|----------|-----------|----------------------|---------|-----------|-------------|
| 1 黒 褐色 | 15Y R 3/1 | 十和田 a 降下火山灰を含む。 | 14 黒 褐色 | 15Y R 3/2 | パリスを含む。 |
| 2 暗 灰 色 | 15Y R 4/1 | パリス、十和田 a 降下火山灰層を含む。 | 15 明 褐色 | 15Y R 5/6 | 粘土(カマド軸筋) |
| 3 にじみ黄褐色 | 10Y R 7/2 | 十和田 a 降下火山灰層。 | 16 暗 褐色 | 15Y R 3/3 | パリス、炭化材を含む。 |
| 4 黒 色 | 15Y R 2/1 | パリス、十和田 a 降下火山灰を含む。 | 17 黒 褐色 | 15Y R 3/1 | パリスを含む。 |
| 5 黒 色 | 10Y R 2/1 | パリスを含む。 | 18 暗 褐色 | 15Y R 3/8 | 粘土。 |
| 6 黒 褐色 | 10Y R 3/1 | パリスを含む。 | 19 暗 褐色 | 15Y R 3/4 | パリス、炭化材を含む。 |
| 7 黒 褐色 | 10Y R 2/2 | パリスを含む。 | 20 暗 褐色 | 15Y R 5/2 | パリスを含む。 |
| 8 暗 褐色 | 15Y R 2/1 | パリスを含む。 | 21 暗 褐色 | 15Y R 4/4 | パリス、炭化材を含む。 |
| 9 暗 褐色 | 15Y R 2/3 | パリスを含む。 | | | |
| 10 暗 褐色 | 15Y R 3/4 | パリスを含む。 | | | |
| 11 暗 褐色 | 15Y R 4/4 | パリスを含む。 | | | |
| 12 暗 褐色 | 15Y R 3/3 | パリスを含む。 | | | |
| 13 黒 褐色 | 15Y R 3/1 | パリス、炭化材を含む。 | | | |

第38図 IV E 37住居址 2

焼成は良好である。成形は輪積み技法を用いていると思われる。底部には一部張出しがみられる。調整は、外面がナデ後にミガキ・内面はナデが施されている。底部外面には木葉痕がみられる。なお、外面に黒斑が観察される。第56図1は、5とともに埋土上位からの出土であるが、底部の約1/4が残存するだけである。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には若干の小礫が混入する。残存部からこの底部は、球形形壺のものと思われる。調整は、ナデによるものと思われるが、器面が荒れており明確でない。底部に木葉痕をもつ。

鉢形土器 (第56図)

床面から1点出土している(2)。口縁部および体部の1/2が欠損している。成形は輪積みによるが、焼成が脆弱である。色調は明黄褐色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土には、多量の小礫が混入している。器形は、丸底で、体部～口縁部は内湾して開く。口縁部は先細り、口唇は尖がる。調整は、口縁部が内外面共にヨコナデが施されているが、内面では、その後にミガキも施している。体部は、内外面共に縦方向へナデを施し、その後にミガキ調整も行なっている。底部外面は、ケズリ取った後にミガキ調整を施している。なお、外面に炭化物(煤?)・黒斑が観察される。

土製品 (第56図)

埋土下位から紡錘車1点(3)・床面から球形の有孔玉が1点出土している(4)。紡錘車は、赤褐色ないしは明赤褐色を呈し、胎土には、小礫・砂が多量に混入する。器表には粗いがミガキが施されている。なお、黒斑も観察される。有孔玉はにぶい黄橙色を呈するが、黒斑も観察される。調整は特に施されていない。孔は直径1mmほどで貫通する。

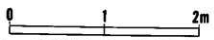
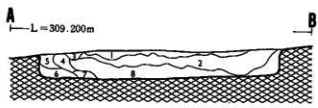
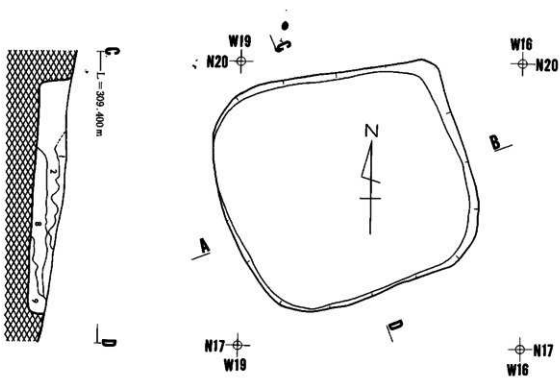
砥石 (第56図)

床面から出土したものであるが、約1/2が欠損している(5)。元来は、扁平な直方体状を呈していたと思われるが、かなり使い込まれており磨減が激しい。使用面は三面に観察されるが、その痕跡は、磨かれた状況を呈するものと、線刻状のものがみられる。なお、石材は、白色細粒凝灰岩である。

IVG37住居址

遺構 (第39図 写真図版31)

当遺構は、北尾根南側斜面の中央部の南端に位置する。ここは、地形的には南向き緩斜面を呈するところである。検出面は、中層浮石を含む黒褐色土層(第IV層)上面である。遺構の範囲は若干の窪みを呈し、ここから灰白色を呈する十和田a降下火山灰が確認されている。平面形は、隅丸正方形を呈する。規模は、西南西―東北東2.6m・北北西―南南東2.4mである。埋土は9層に分かれ、自然堆積の様相を呈する。いずれも黒色・黒褐色シルトであるが、1～3



- | | | | | |
|---|---|---|--------------|------------------|
| 1 | 黒 | 色 | 1.5Y R 2/1 | 赤土、十和田・降下火山灰を含む。 |
| 2 | 黒 | 色 | 10Y R 1.7/1 | 赤土、十和田・降下火山灰を含む。 |
| 3 | 黒 | 色 | 10Y R 2/2 | 赤土、十和田・降下火山灰を含む。 |
| 4 | 黒 | 色 | 1.5Y R 2/2 | 赤土を含む。 |
| 5 | 黒 | 色 | 10Y R 2/3 | 赤土を含む。 |
| 6 | 黒 | 色 | 10Y R 2/3 | 赤土を含む。 |
| 7 | 黒 | 色 | 10Y R 2/1 | 赤土を含む。 |
| 8 | 黒 | 色 | 1.5Y R 1.7/1 | 赤土を含む。 |
| 9 | 黒 | 色 | 10Y R 3/2 | 赤土、十和田・降下火山灰を含む。 |

第39図 IV G 37住居址

には、にぶい黄褐色（乾燥すると灰白色）を呈する十和田a降下火山灰が含まれている。

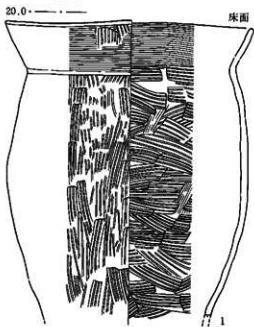
地山を壁とし、この壁は、南部浮石層（第VI層）上面まで掘り込まれている。壁は垂直に近い立上りをみせる。壁高は16～34cmであるが、斜面上位の北側ほど高い。床面は南部浮石層を基盤とするが、貼床はなく、踏みしめも弱く軟かい。

柱穴・カマド・炉等の他の施設や焼土は検出されなかった。また、当住居址は、隣接する他の住居址5棟に比して軸方向がやや異なる。規模が小さい、壁の掘込みが浅い、カマドないしは炉をもたない、床面が軟弱である、遺物が極端に少ない等から機能を異にする住居であった可能性がある。

遺物（第56図 写真図版46）

甕形土器の小破片2点だけの出土である。7は、床面からの出土で、口縁部の約1/8ほど残存するだけである。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には微量の小礫が混入している。破片の割れ口から輪積み成形されたものと思われる。頸部の括れは浅く、口縁部は内彎する。口唇は先細りとなるが、端部は丸む。口縁部は両面ともヨコナデ、体部は、外面ミガキ・内面ナデの調整が施されている。6は、口縁部が若干残存するだけである。埋土中位からの出土である。にぶい黄褐色を呈し、胎土には微量の小礫が含まれている。口縁部は軽く内彎しながら開くようである。口唇は先細りし、端部は丸む。調整は、両面ナデ調整である。

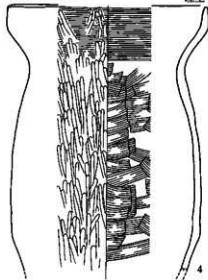
II G 41住居址



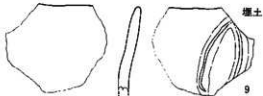
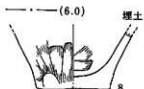
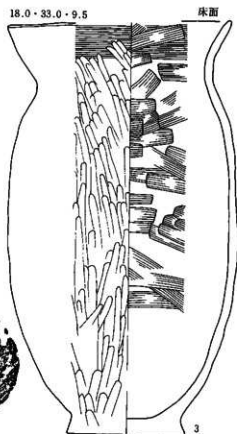
II G 46住居址



15.0

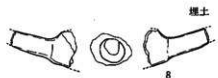
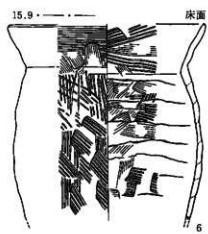
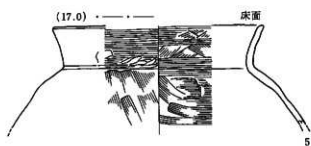
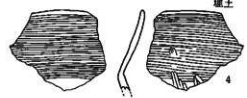
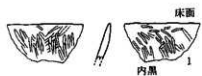


18.0 · 33.0 · 9.5

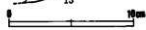
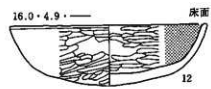
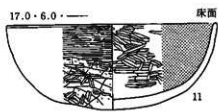
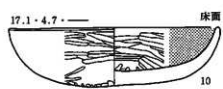


第40图 II G 41住居址 · II G 46住居址出土遗物

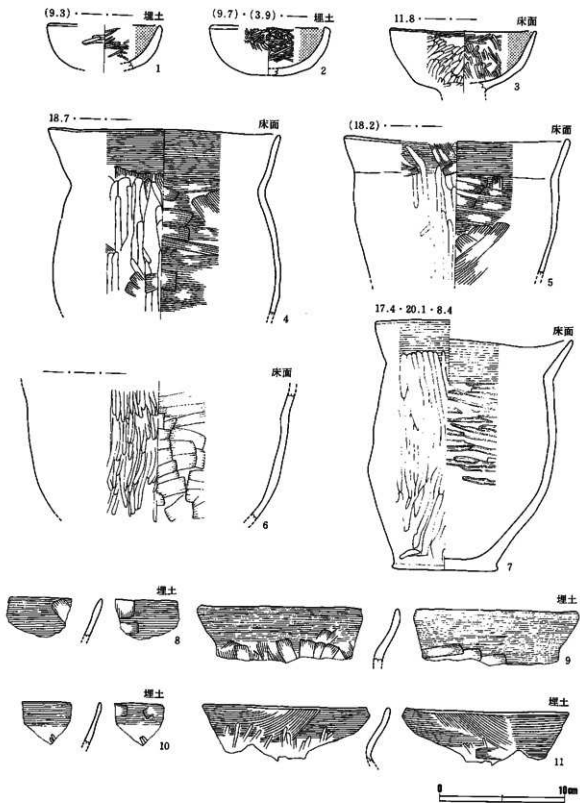
II H41住居址



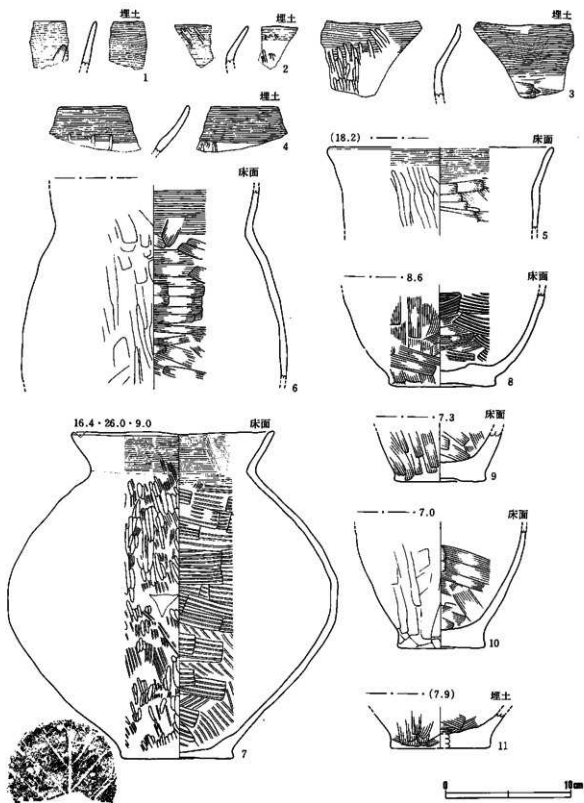
II | 44-1住居址



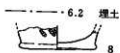
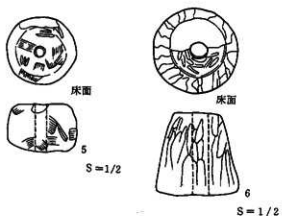
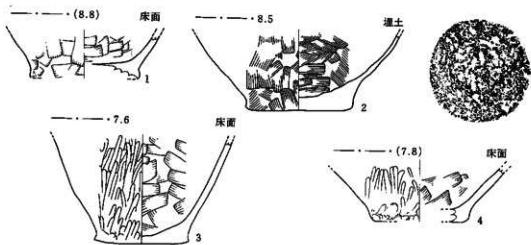
第41图 II H41住居址・II | 44-1住居址出土遺物



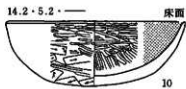
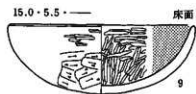
第42图 II | 44- | 住居址出土遺物



第43图 II | 44- | 住居址出土遺物

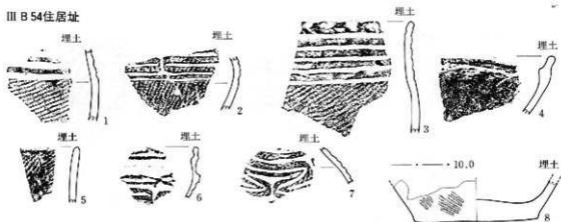


III A 45住居址



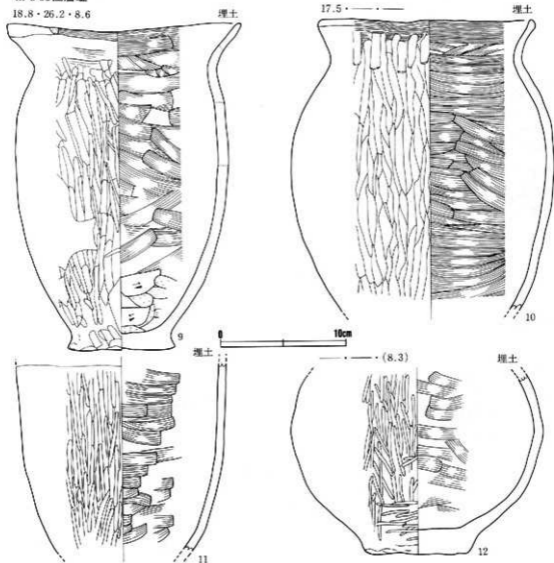
第44图 II | 44- | 住居址·III A 45住居址出土遗物

III B 54住居址

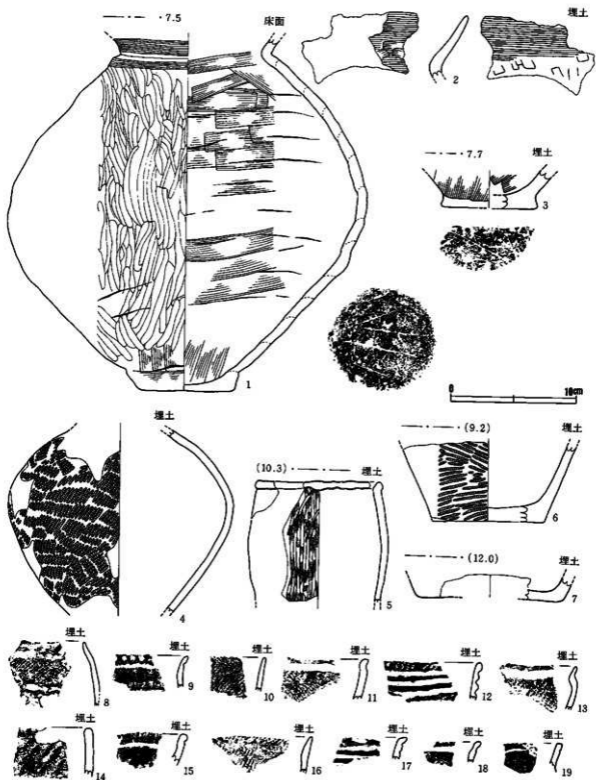


III C 53住居址

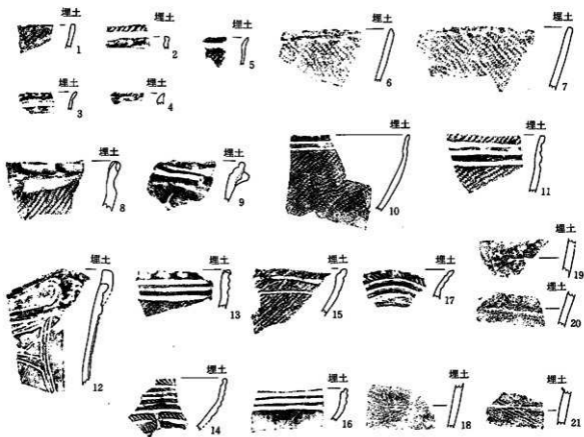
18.8 · 26.2 · 8.6



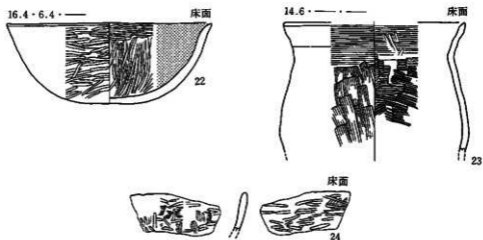
第45图 III B 54住居址 · III C 53住居址出土遗物



第46图 III C 53住居址出土遗物



III G 45住居址



第47图 III C 53住居址 · III G 45住居址出土遗物

13.2-5.2-7.1

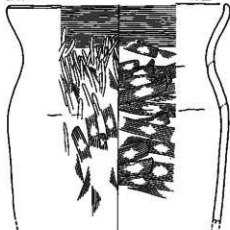
埋土



1

17.7

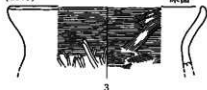
床面



2

(15.6)

床面



3

8.0

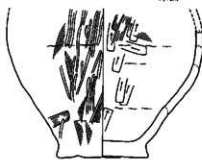
床面



4

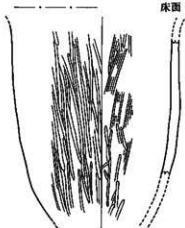
7.3

床面

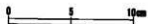


5

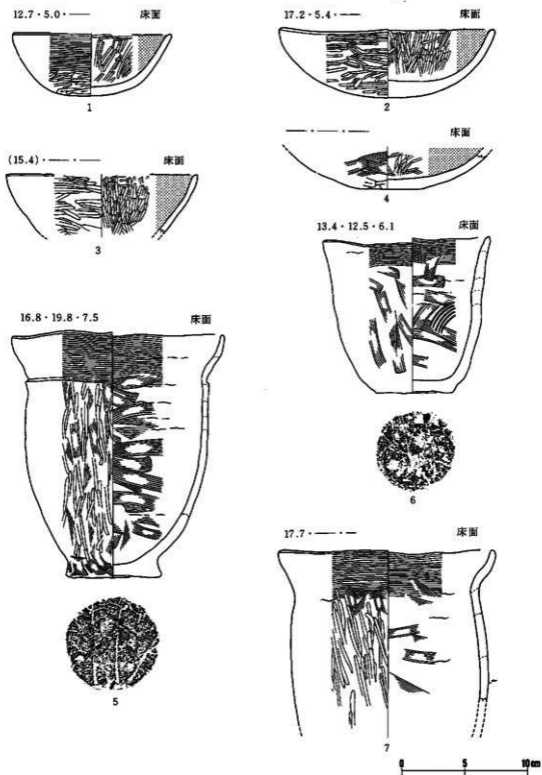
床面



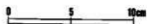
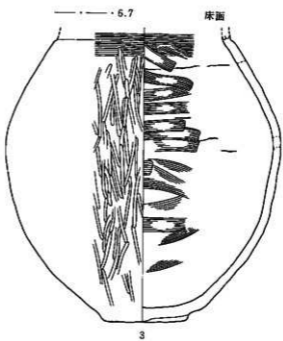
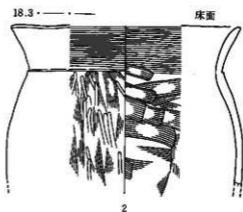
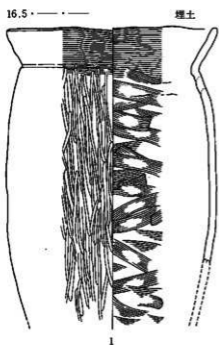
6



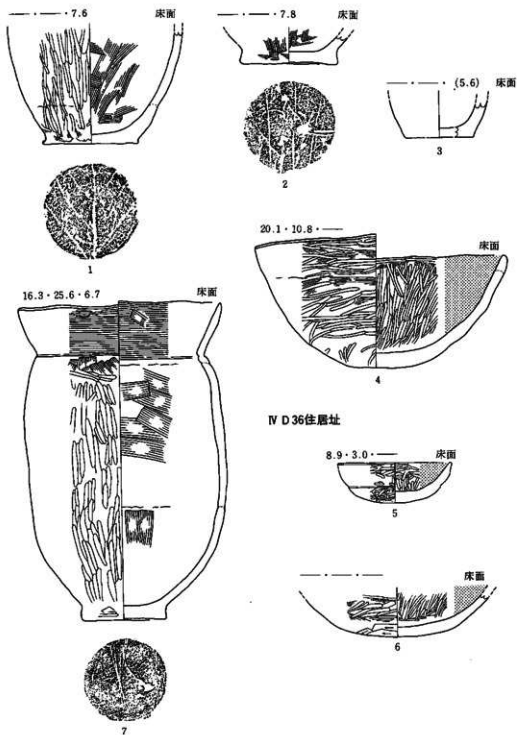
第48圖 IV B 36住居址出土遺物



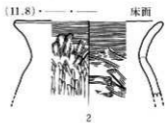
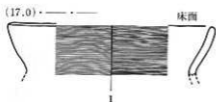
第49图 IV D 34住居址出土遗物



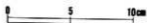
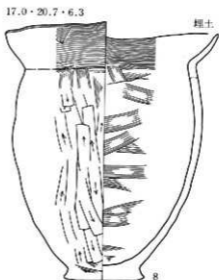
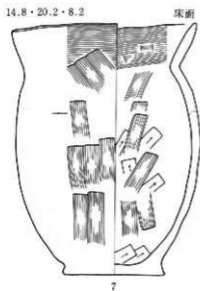
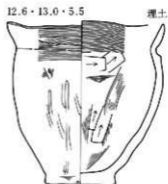
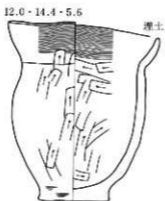
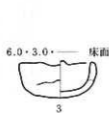
第50图 IV D 34住居址出土遗物



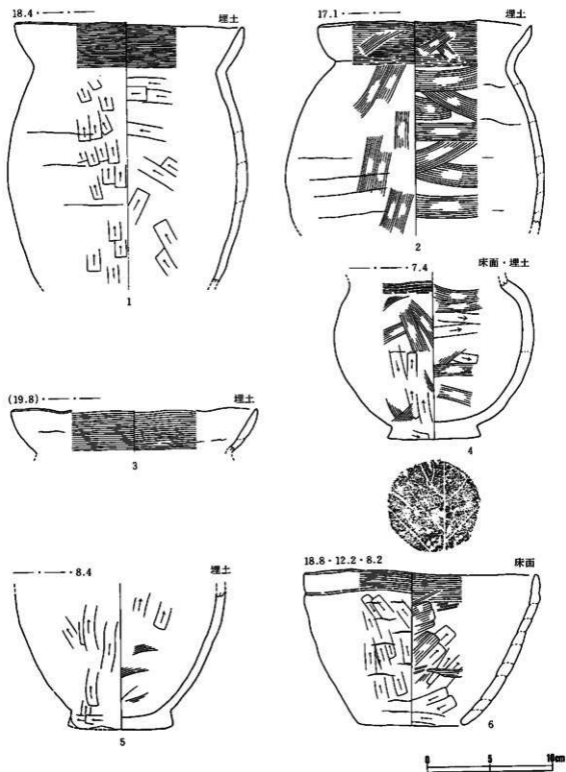
第51图 VI D 34 · IV D 36住居址出土遺物



IV D 39住居址



第52图 IV D 36 · IV D 39住居址出土遗物



第53図 IV D 39住居址出土遺物

28 · 3.3 · 床面



3.5 · 2.4 · 3.9 床面



--- 2.9 床面



床面



床面



床面



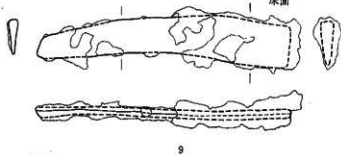
床面



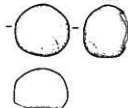
床面



床面



床面



10



第54图 IV D 39住居址出土遗物

6.7 · 2.7 · 4.3 床面



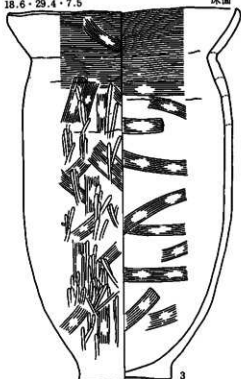
1

9.9 · 4.4 · — 床面



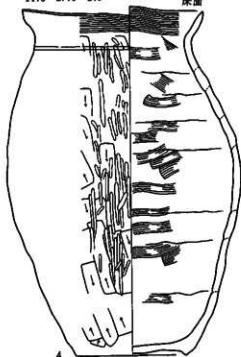
2

18.6 · 29.4 · 7.5 床面



3

14.6 · 27.9 · 8.9 床面



4



(15.8) · — — — 埋土



5

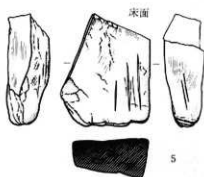
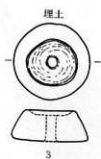
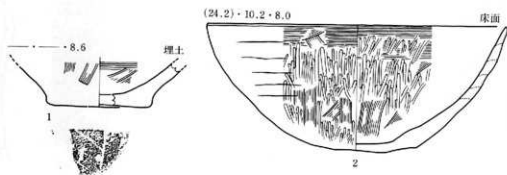
· 7.6 床面



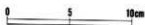
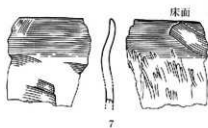
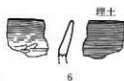
6



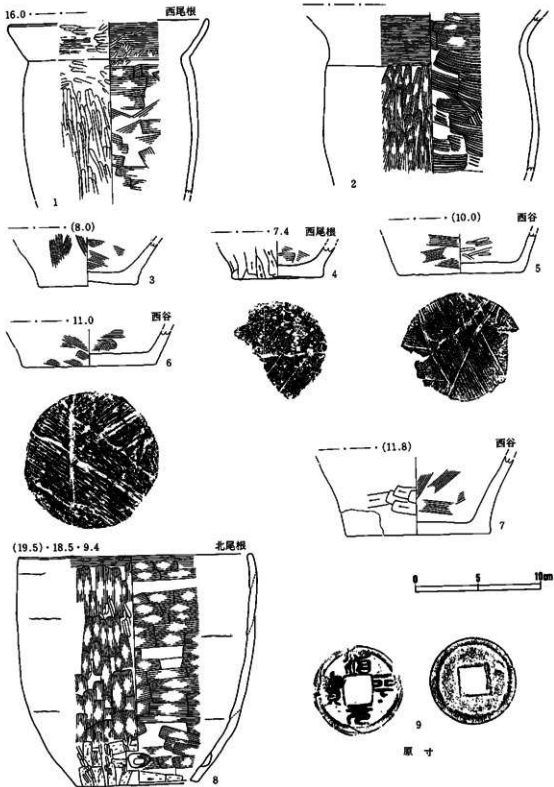
第55图 IV E 37住居址出土遗物



IV G 37住居址



第56图 IV E 37 · IV G 37住居址出土遗物



第57图 道槽外出土遗物

(2) 遺構外出土遺物

古代・中世の遺構外からの遺物には、土師器と古銭がある。土師器は、古代の住居址が検出された西尾根・西谷・北尾根地区に集中する。古銭は中央尾根稜線部からの出土である。

土師器（第57図1～8 写真図版47）

全て甕形土器である。1は西尾根地区から出土した長胴甕である。胴部は緩く内彎し、口縁部は外傾する。口縁部は内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ、胴部外面はヘラミガキ・内面はナデ調整が施されている。2は出土地が不明である。1と同様な長胴甕で、胴部が緩く内彎し、口縁部は外反して開く。頸部に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はナデ、一部ヘラミガキ・内面はナデ調整されている。3～7は底部片である。4の底面には木葉痕、5・6の底面には笹葉痕がみられる。8は北尾根出土の無底甕である。底部から強く外傾して立ち上った後、胴部下端から緩く外傾して口縁部に続く。胴部下端の内面には、1.6・1.2cm、深さ0.5cmの不整な楕円形を呈する凹みがある。これに對峙する部分は欠損しており、凹みの有無は不明である。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はナデ後一部ヘラミガキ、内面はナデ調整が施されている。

古銭（第57図 9 写真図版47）

中央尾根稜線部の東端から出土した。治平元賣（北宋銭）の篆書体で初鑄年は1064年である。

2. 中世の住居址

中世の遺構は、西谷左岸南部に存在する竪穴住居址2棟である。竪穴住居址が検出された付近の地形は、中央尾根が南流する沢に向って下る西側斜面下位の微傾斜地である。検出面はIV層上面である。

II J 76住居址 (第58図 写真図版48)

当遺構の西側は削刺されており、全体の平面形・規模は不明である。残存する部分と柱穴配置の状況から、平面形は南南東壁の東半に不整形の張り出しをもつ隅丸不整形と考えられる。張り出し部の中軸を通る遺構の長軸は、北北西-南南東(N-16°-W)にある。規模は、北北西-南南東の壁の間が3m、張り出し部を含めて3.6mである。埋土は表土直下のII層・III層起源の黒色シルトで、単層である。微量の炭化物を含み、汚れている。

壁は残存状況が不良であるが、東北東壁では床面に対して垂直に近く立つ。壁高は東北東壁で0.2mである。残存する床面の範囲は、平面図の中で1点鎖線と矢印で示した。床面はIV層を掘り込んで構築されており、平坦であるが西に向って微かに傾斜して下る。また全面が硬くしまっており、敲きしめられたことが考えられる。床面から検出された柱穴は $P_1 \sim P_{19}$ であり、張り出し部の南西外側に P_{11} がある。配置の状況から、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5 \cdot P_{10}$ が主柱穴と考えられ、桁行2.4m、梁間2.4mである。張り出し部の先端に位置する P_3 と P_4 間は0.9mである。

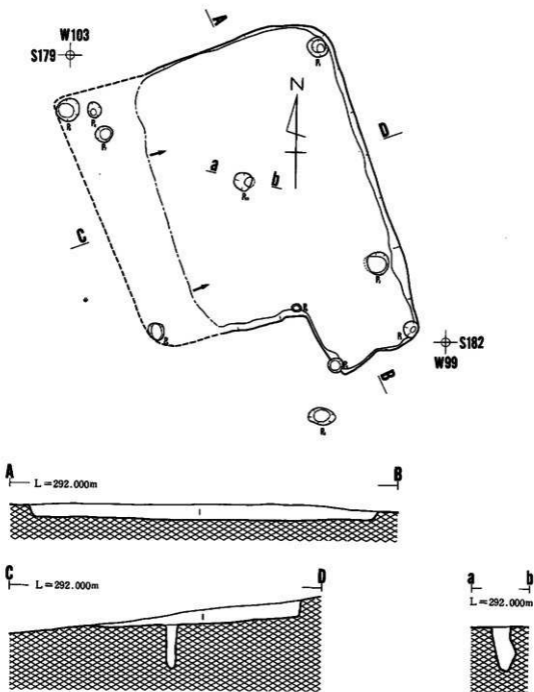
出土遺物はない。

III A 76住居址 (第59図 写真図版48)

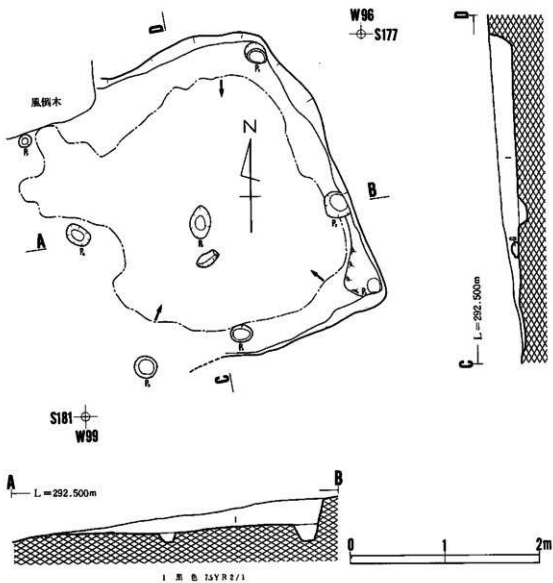
当遺構の西側は削刺されており、全体の平面形・規模は不明である。残存する部分と柱穴配置状況から、平面形は隅丸方形を基調としている。全容を検出できた東北東壁は北北西-南南東(N-24°-W)にある。規模は、北北西-南南東の壁の間が3.3mである。埋土は表土直下のII層・III層起源の黒色シルトで、単層である。微量の炭化物を含み、汚れている。

壁は残存状況が悪く、多くの部分では外傾している。壁高は0.25m以下である。床面の西側は削刺している。硬く敲きしめられたと考えられる部分を1点鎖線と矢印で図示した。壁隙を除いて不整形に広がり、北西部に張り出す。床面は平坦である。床面上の、中央よりやや南に偏して礫1個が検出された。検出された柱穴は $P_1 \sim P_8$ であり、配置から主柱穴と考えられる $P_1 \sim P_2 \cdot P_3 \sim P_4 \cdot P_5 \sim P_7 \cdot P_7 \sim P_1$ の距離は2.7mであり、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_5 \cdot P_7$ を結ぶ線は平行四辺形を呈する。 P_6 と P_7 の間は床面が堅くしまっており、堅い面は西側に張り出している。

出土遺物はない。



第58図 II J 76住居址



第59圖 III A 76住居址

3. 近世以降の遺構と遺物

(1) 鑄銭場跡

遺構 (第60図 写真図版49)

当遺構は遺跡南端の南斜面最下位に位置する。遺構が立地する地形は、南斜面の先端が西流する沢に向かって下る崖と沢までの間である。遺構が位置する東側と西側では崖の傾斜は40度以上となっているが、遺構の部分では長さ約8mのテラス状をなしており、ここにトレンチを掘って当遺構を検出した。テラスは、北側半分は地山への切土で、南側半分は盛土によって構築されている。盛土は土層断面図の2に相当する部分であるが、精査の過程では表土との識別ができなかった。トレンチから東側では遺物を含む黒褐色土を除去したが、これが盛土であった可能性がある。切土の行われている範囲は、東一西に長軸をもつ隅丸長方形に近く、規模は東一西約7.2m、南一北約1.5mである。また切土の北端から盛土の南端までは、土層断面図によると約3.5mである。テラスの上面は、切土の部分では固いローム(VII層)であり、南にかすかに傾斜している。盛土の部分では切土から連続する傾斜を保つ。

テラスの北西隅部は僅かに窪み、深さは最大で約10cmである。この窪みは埴塼片を含む炭化物で埋まっている。またテラスの中央よりやや西を起点として、南東方向に1条の溝がある。埋土は埴塼片と多量の炭化物を含む黒色土である。短軸での断面は緩い凹凸をもつが、概して浅皿状をなす。深さは約10cmであるが、南東端では消滅する。テラスから検出された柱穴は P_1 ・ P_2 ・ P_3 の3本である。柱あたりは検出されない。直径は約20cmであり、深さは P_1 が48cm、 P_2 が42cm、 P_3 が50cmである。 P_1 と P_3 はテラスの北端から約1.2m、両端からそれぞれ約0.5mの距離に位置し、芯芯間距離は約6mである。 P_2 は炉の南側約0.5mに位置する。

炉(コシキ、鑄鉄用熔解炉)跡はテラスの西側に1基存在する。残存するのは炉の底部であり、ピット状を呈する。平面形は不整形であり、規模は径約35cm、深さは約20cmである。壁はほとんど垂直であるが、西側では僅かに内傾する。底部に連続する部分では丸味をもち、底部は平坦である。壁面と底面は石のように硬く焼けしまっており、灰色に還元されている。炉の周辺は不整形円形に赤く焼けており、断面の観察によっても壁面と底面の周囲は極めて強い焼成をうけた焼土が見られる。

遺物 (第61~65図 写真図版50~54)

埴塼 (第61~63図)

埴塼は全て破片である。おびただしい出土量であったが、整理の都合上、残存状況が良好で反転実測が可能なものだけコンテナ(42×30×28cm)4個分を採取した。全体の器形がわかるのは5点であるが、これらは全て丸底である。第61図1~5の口唇部は丸む。第61図6の口唇

部は丸むが、外縁が高くなる。第61図7・8と第62図1～8の口唇部は平坦であるが、外縁が高くなるように削がれている。第63図1～6の口唇部は平縁に近い。体部は丸味をもって塊形となり、第62図2では内彎している。第62図4の口縁部は内側に段をもつ。埴埴の表面は剝落している部分が多いが、口縁部には厚くビートロがかかる。

鑄の羽口（第63図）

鑄の羽口は破片が6点出土した。図示したものは残存状況が良好で、実測可能だった1点である(7)。

錢（第64図1～3）

錢はテラスの覆土から1枚、沢の縁で2枚が出土した。材質は青銅である。銘文は表面に「寛永通寶」、裏に「千」である。

錢竿（第65図1～7）

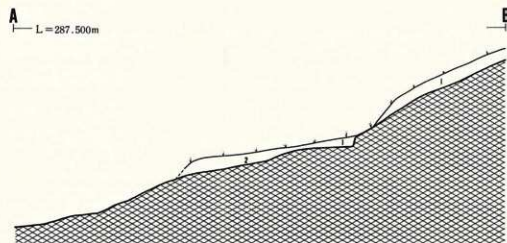
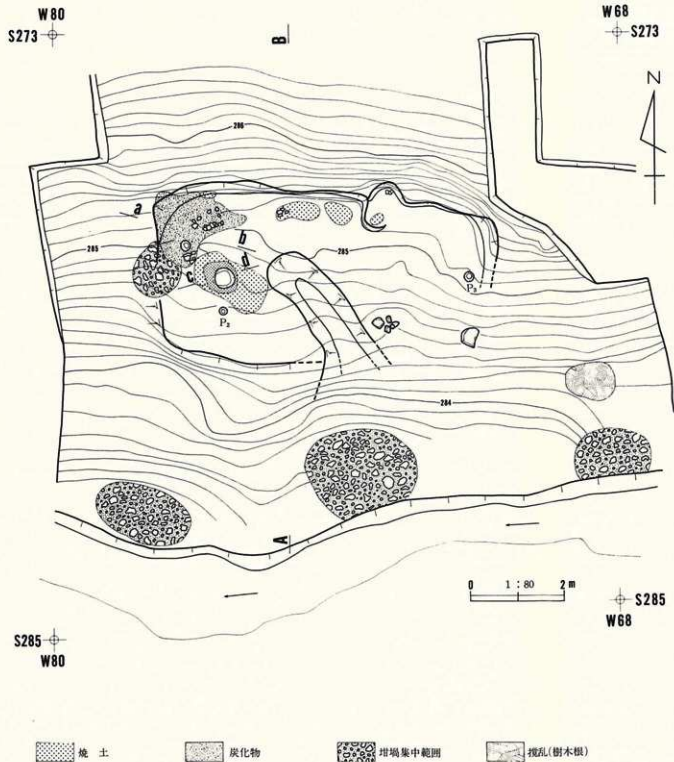
錢竿はテラスの覆土や沢の縁から7点出土した。いずれも両端に折れた痕跡をもつ。現存長で最大が10.5cm、最小が3.8cmである。形態は直線的な棒状を呈し、断面形は三角形を基調としている。ほぼ2.5cm間隔で湯道の痕跡を示す突起をもち、突起は断面の三角形の底辺から出ている。

湯放ち錢（第64図）

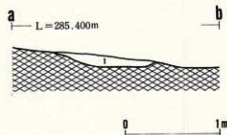
湯放ち錢は27点を図示し、細片は割愛した。材質は鉄であり、錆化が著しい。錆を除去して銘文が判読できたもの、拓本がとれたものから、銘文は全て「寛永通寶」と考えられる。湯道は「通」の右斜上方にもつもの1点、「寶」の左斜上方にもつもの4点、「寶」の右斜下方にもつもの2点である。

鉄器片（第65図8～10）

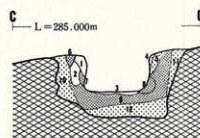
鉄器片は3点出土した。8は遺存する形態が舌状を呈しているが、周囲は全て破損した痕跡をもち、本来は板状を呈していたと考えられる。9は鉤状を呈しているが、両端は欠損している。10は釘状の鉄器で、一端を欠損している。



- 1 赤褐色土
2 黒褐色土: 赤褐色土を雜土に10%含む。



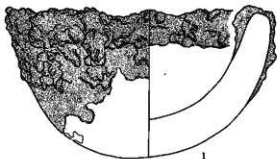
- 1 炭化材と炭化物物の層



- 1 灰サリープ色 5Y 5/2 礫物したシルト・ノロ(石灰・ガラス類)
2 灰 褐色 1.5YR 4/2 礫(樹皮)の小石混じり。礫れやさい
3 灰サリープ色 5Y 5/2 礫化したシルト(石灰)
4 黄 褐色 2.5Y 5/4 礫(樹皮)混じり。
5 明 褐色 2.5YR 5/6 礫(樹皮)混じり。小石を含む。
6 赤 褐色 2.5YR 4/8 礫(樹皮)混じり。小石を含む。
7 赤 褐色 2.5YR 4/8 礫(樹皮)混じり。小石を含む。
8 明 赤 褐色 5.5YR 5/6 礫(樹皮)混じり。小石を含む。
9 明 赤 褐色 2.5YR 5/6 礫(樹皮)混じり。小石を含む。
10 明 赤 褐色 5.5YR 5/8 シルト。断面がつかず。
11 明 赤 褐色 5.5YR 5/8 シルト。断面がつかず。
12 黄 褐色 2.5YR 5/4 シルト。断面がつかず。

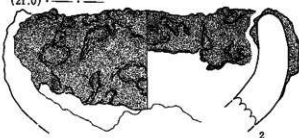
第60図 鑄錢場跡

21.0 · 11.8 · —



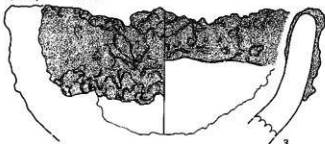
1

(21.0) · — · — · —



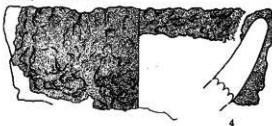
2

(25.0) · — · — · —



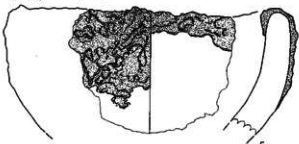
3

(21.2) · — · — · —



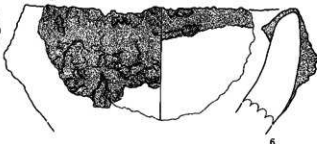
4

(22.0) · — · — · —



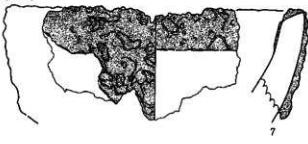
5

(22.0) · — · — · —



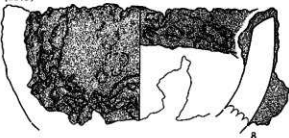
6

(23.2) · — · — · —



7

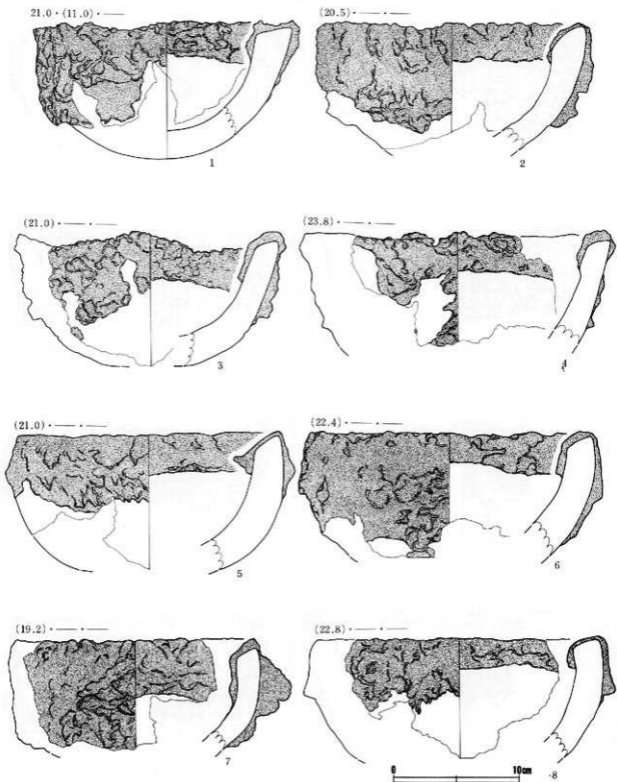
(21.5) · — · — · —



8

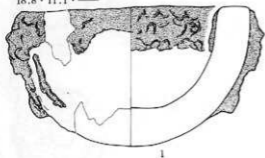


第61図 出土遺物(埴塼)



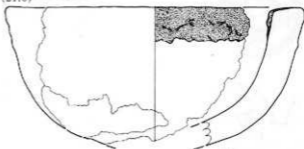
第62図 出土遺物 (埴埴)

18.8 · 11.1 ·



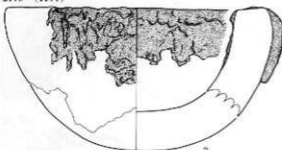
1

(24.0) ·



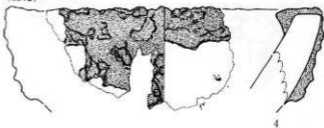
2

21.0 · (11.4) ·



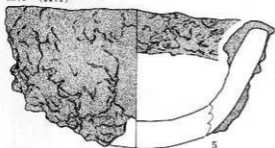
3

(25.2) ·



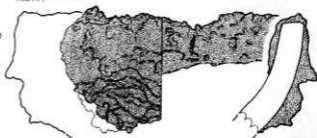
4

21.5 · (11.1) ·

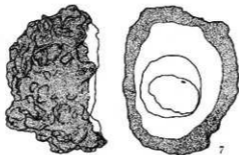


5

(22.0) ·



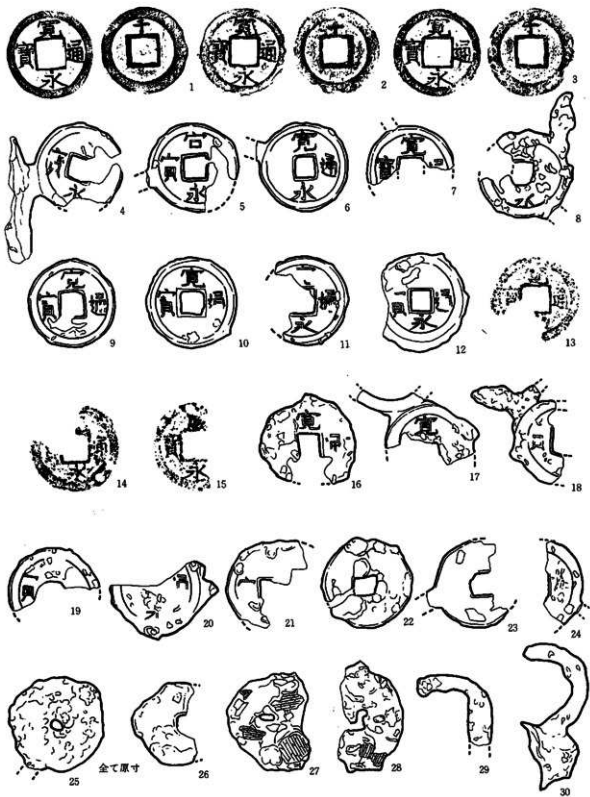
6



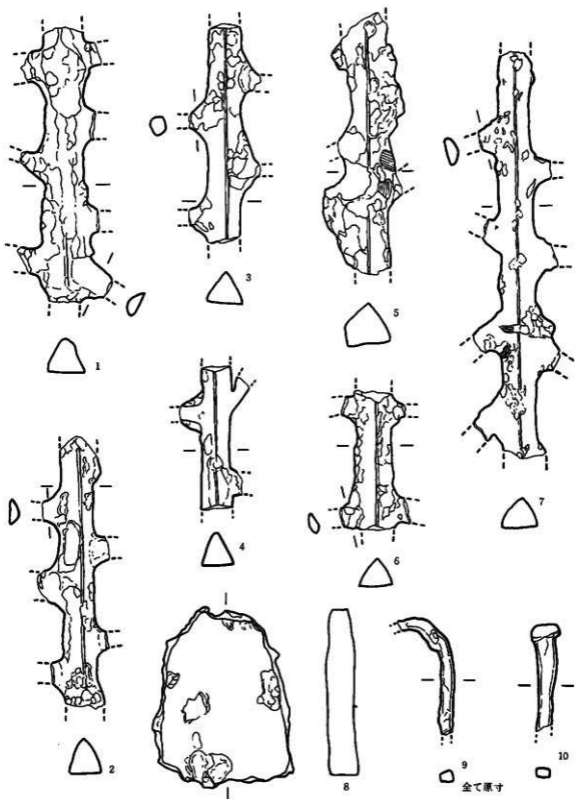
7



第63圖 出土遺物 (坩堝 · 羽口)



第64図 出土遺物（銭・湯放ち銭）



第65図 出土遺物（鉄竿・鉄製品）

(2) 炭窯跡

駒板遺跡で検出された炭窯跡は、平面形が長楕円形・円形・溝状を基調とするピットであることに特徴がある。これを炭窯跡としての他のピットと区別した理由は、埋土に多量の炭化材片を含むこと、底部に現地性焼土が存在することである。また当地方では明治時代末年まで、上部構造のない炭窯で木炭生産が行われたとの伝承がある。

〈西尾根〉

II B 47炭窯跡 (第66図 写真図版55)

この遺構は西尾根南端の南側斜面中位に位置する。検出面での平面形は不整形円形を呈し、底部では隅丸方形に近い。北端は開口部・底部とも角をもつ。規模は北西—南東約1.6m、北東—南西約1.5m、検出面からの深さは約0.3mである。埋土は暗褐色シルト・褐色シルトが主体で、炭化物を少量含む。壁は北側では垂直に近く、南側では丸味をもって開く。底部は平坦である。

II I 49炭窯跡 (第66図 写真図版55)

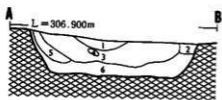
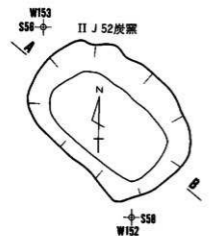
この遺構は西尾根南端の南東側斜面中位に位置する。検出できたのは北西壁とその両端隅部で、南東側は削刺されている。全体の平面形は不明であるが、等高線の方角である北東—南西に長軸をもつ隅丸長方形を基調としたものと考えられる。規模は、北東—南西約3.6m、底部が残存する幅は約0.7mである。埋土は炭化材を含む汚れた黒褐色土である。壁は外傾し、壁高は約0.3mである。底部は凹凸があるが、短軸の断面は舟底形にちかい。

II J 46炭窯跡 (第67図 写真図版56)

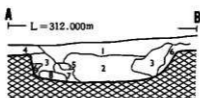
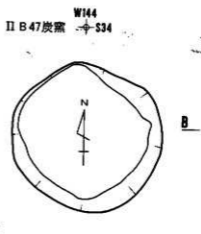
この遺構は西尾根南端の南東側斜面中位に位置し、II J 49ピットの上部を切っている。平面形は等高線に沿って東北東—西西北に延びる溝状を呈するが、幅は西側ほど狭くなる。規模は長さ約16.6m、幅は東端で約2m、西端で約1mである。埋土は場所によって状況異なるが、最下位は炭化材の層である。壁は丸味をもって外傾するが、南東側の掘り込みは浅い。壁高は最も高い地点で約0.4mである。底部は平坦であり、西側に向かって僅かに上っていく。底部の中程は礫層に達し、一部は焼成をうけている。

II J 52炭窯跡 (第66図 写真図版55)

この遺構は西尾根南端の南側斜面中位に位置する。平面形は、検出面では長軸を北西—南東にもつ不整形円形を呈し、南隅に角をもつ。底部では不整形隅丸方形を呈する。規模は、開口部が約1.8m×1.25m、底部が約1.3m×0.7m、検出面からの深さは中央部で約0.4mである。埋

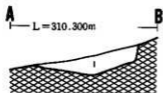
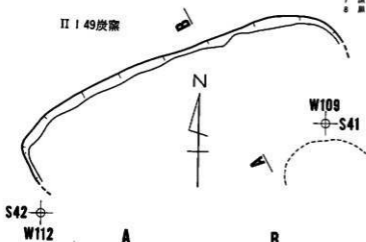


- 1 黒褐色 10Y R 2/2 パミス、炭化物を含む。
- 2 黒褐色 10Y R 3/2 パミス、炭化物を含む。
- 3 黒褐色 10Y R 2/2 パミス、炭化物を含む。
- 4 木炭
- 5 黒褐色 10Y R 3/2 パミス、炭化物を含む。
- 6 炭化材層 黒褐色土によって充填される。粘土を含む。



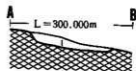
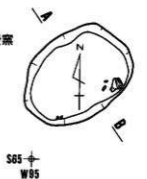
- 1 黒褐色 10Y R 2/2 パミス、炭化物を含む。
- 2 炭化材の層 黒色土によって充填される。
- 3 暗褐色 10Y R 3/4 パミス、炭化物を含む。
- 4 暗褐色 10Y R 4/4 パミス、炭化物を含む。
- 5 暗褐色 10Y R 3/4 パミス、炭化物を含む。
- 6 暗褐色 10Y R 4/6 パミスを含む。
- 7 黒褐色 10Y R 2/1 炭化材を含む。
- 8 黒褐色 10Y R 2/3 炭化材を含む。

II I 49炭窯

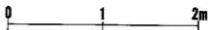


- 1 暗褐色 10Y R 3/4 パミス、炭化物を含む。

III B 53炭窯



- 1 黒褐色-暗褐色粘土 多量に木炭を含む。



第66図 II J 52・II B 47・II I 49・III B 53炭窯跡

土は中振浮石起源の黒褐色土であるが、南部浮石と炭化物の混入の具合によって4層に分けられ、自然堆積と認められる。最下層は炭化材の層で、焼土・灰を含む。壁は丸味をもって開き、一部は焼成をうけている。底部はほぼ平坦である。

〈西谷〉

III B 53炭窟跡（第66図 写真図版56）

当遺構は西谷右岸に位置し、西尾根から下る南東斜面下位に立地する。検出面は中振浮石層である。平面形は北東—南西に長軸をもつ楕円形を呈する。長軸方向は等高線と一致している。規模は1.2m×0.9m、検出面からの深さは0.1mである。埋土は中振浮石層起源の暗褐色土で、下位に炭化材を含む。壁は緩やかに外傾し、底部はほぼ平坦である。底部の壁際では一部に火熱を受けた部分がある。

〈北尾根〉

計10枚検出された。いずれも当尾根の南側斜面での検出である。規模は、最大が長軸4.0m×短軸1.3mのものもあるが、一般的には長軸が1.5m未満、短軸が1m前後のものが多く、形状は、隅丸長方形を基本とするようである。検出面は、基本層序第Ⅲ～Ⅴ層上面であり、掘り込みは概して浅い。さらに、これらの検出状況を見ると、長軸方向を斜面に直交させて構築していることも特徴の一つである。埋土からは炭化材が出土するが、これらは、栗・櫛・コブの木等である。時期的には近世に比定されよう。

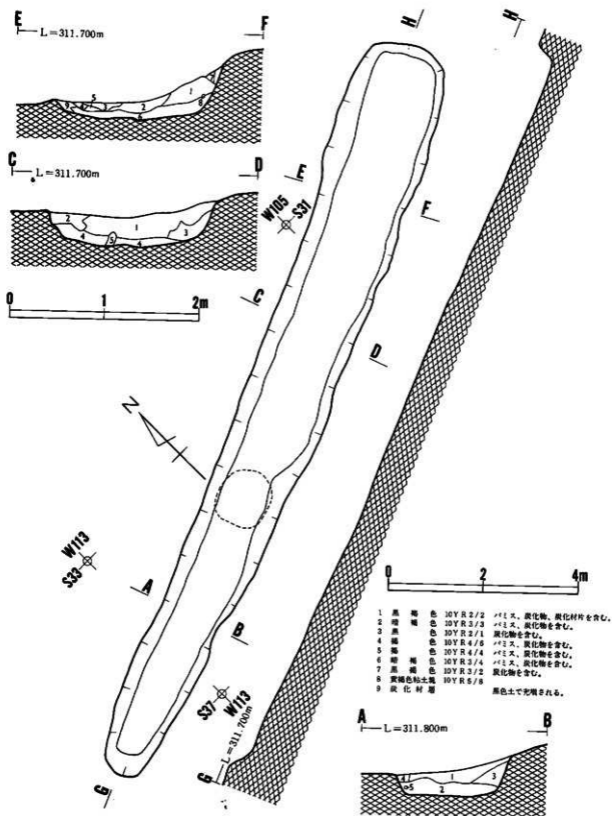
IV A 31炭窟跡（第68図 写真図版57）

当遺構は、北尾根南側斜面の南西端近くに位置する。ここは、地形的には、ほぼ南西向き緩斜面を呈し、十和田_田降下山灰および中振浮石を含む黒色～暗褐色土（第Ⅲ・Ⅳ層相当）が厚く堆積するところである。検出面はこの上面である。遺構の南東側は消滅しているが、元来の平面形は、長軸が斜面に直交する長方形であったと思われる。規模は長軸が不明であるが、短軸は0.7mである。掘込みは、検出面から約12cmである。底面は、ほぼ水平である。埋土の1には炭化材が含まれている。

なお、北壁に突刺さるように縄文土器の破片が出土したが、これは流込みによるものと思われる。また、炭化材については、栗との鑑定結果を得ている。

IV A 36炭窟跡（第68図 写真図版57）

当遺構は、北尾根南側斜面の南西端に位置する。ここは、地形的には、ほぼ南西向き斜面を



第67図 II J 46炭層跡

呈するところである。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面に直交する長方形である。規模は、1.4m×0.8mである。掘込みの深さは最深部が12cmで、第VII層上面まで達している。底面は斜面下位の南西側が低く、凹凸もみられる。埋土には炭化材が含まれており、この窯跡は、人為的に埋戻されたとも思われる。

なお、出土した炭化材は細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

IV B 39炭窯跡（第68図 写真図版57）

当遺構は、北尾根南側斜面の南西端に位置する。ここは、地形的には、南西向き斜面を呈するところである。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸がほぼ斜面に直交する長方形である。規模は、1.3m×0.9mである。検出面からの掘込みは15cm前後で、第VII層まで達している。底面は、斜面下位ほど低く凹凸もみられる。埋土には炭化材が含まれている。

なお、出土した炭化材は細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

IV E 31炭窯跡（第68図 写真図版57）

当遺構は、北尾根南側斜面の中央部に位置する。ここは、地形的には、南西向き斜面を呈する。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面にほぼ直交する長方形を呈する。規模は、1.1m×0.7mである。検出面からの掘込みは12cm前後で、第VII層上面まで達している。埋土1には少量の炭化材が含まれている。

なお、出土した炭化材は、少量かつ細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

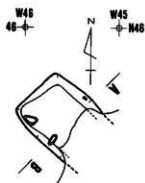
IV E 35炭窯跡（第69図 写真図版58）

当遺構は、北尾根南側斜面の南西に位置する。ここは、地形的には、南西向き緩斜面となっているところである。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面に直交する隅丸長方形を呈する。規模は、1.6m×1.2mである。検出面からの掘込みは約16cmで、第VII層まで達している。底面は中央部が若干凹凸。埋土1・4には炭化材が含まれている。

なお、出土した炭化材は、栗との鑑定結果が得られている。また、埋土上位から土師器の破片が数点出土しているが、これらは、当遺構の斜面上位から検出されているIV D 34竈穴住居址からのものと思われる、当遺構に共伴するものではない。

IV F 22炭窯跡（第69図 写真図版59）

当遺構は、北尾根南側斜面の北端近くに位置する。ここは、地形的には、ほぼ東一西に延びる尾根の鞍部から、南西に向かって下り始める緩斜面となっている。遺構は鞍部付近にあるた



- 1 黒色 10Y R 1/1 炭化材を含む。
- 2 黒褐色 10Y R 2/2 パリスを含む。

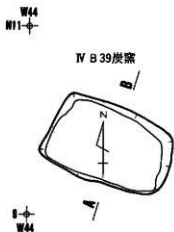
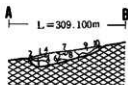
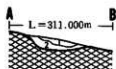
IV A 31炭窟



- 1 黒褐色 7.5Y R 2/2 パリス、炭化材を含む。
- 2 褐色 7.5Y R 4/6 パリスを含む。
- 3 褐色 10Y R 4/6 パリス、炭化材を含む。
- 4 褐色 10Y R 4/4 パリス、炭化材を含む。
- 5 紅褐色 10Y R 4/3 パリス、炭化材を含む。
- 6 黄褐色 10Y R 5/6 パリスを含む。
- 7 黒色 10Y R 2/1 パリスを含む。
- 8 紅褐色 10Y R 5/4 パリス、炭化材を含む。
- 9 黒褐色 10Y R 3/2 パリス、炭化材を含む。
- 10 明黄褐色 10Y R 6/8



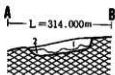
IV A 36炭窟



IV B 39炭窟



IV E 31炭窟



- 1 黒褐色 7.5Y R 2/2 パリス、炭化物、炭化材を含む。
- 2 暗褐色 7.5Y R 3/3 パリス、炭化物を含む。

- 1 炭化材層
- 2 暗褐色 10Y R 3/4 パリスを含む。
- 3 黒褐色 10Y R 2/2 パリス、炭化材を含む。
- 4 暗褐色 10Y R 3/4 炭化材を含む。
- 5 褐色 10Y R 4/6 パリスを含む。
- 6 黒褐色 10Y R 2/3 パリス、炭化材を含む。
- 7 黒褐色 10Y R 2/3 パリス、炭化材を含む。

第68図 IV A 31・IV A 36・IV B 39・IV E 31炭窟跡



め、自然的削平により残存状況が悪い。したがって、ほとんど掘込みはみられない。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面に直交する長方形を呈する。規模は、4.0m×1.3mで、検出面からの掘込みは、第VII層まで達する。底面直上から少量の炭化材が出土している。

なお、この炭化材は、少量かつ細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

IV I 25炭窯跡（第69図）

当遺構は、北尾根南側斜面の北端近くに位置する。ここは、地形的には、ほぼ東一西に延びる尾根の鞍部から、南西に向かって下り始める緩斜面となっている。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面に直交する隅丸方形に近い。規模は、1.1m×1.0mである。検出面からの掘込みは約10cmで、第VII層まで達している。底面は、若干の凹凸を呈する。埋土には炭化材が含まれている。

なお、出土した炭化材は、少量かつ細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

IV I 28-1炭窯跡（第70図 写真図版58）

当遺構は、北尾根南側斜面のほぼ中央部に位置する。ここは、地形的には、南向き緩斜面を呈している。検出面は、第V層上面である。IV I 28-2炭窯跡と重複するが、埋土の状況から当遺構が先行するものと思われる。平面形は、長軸がほぼ斜面と直交する隅丸長方形を呈する。規模は、2.2m×1.5mである。検出面からの掘込みは20cm前後で、第VII層まで達している。底面は、若干凹凸を示す。埋土3には若干の炭化材が含まれている。

なお、出土した炭化材は、少量かつ細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

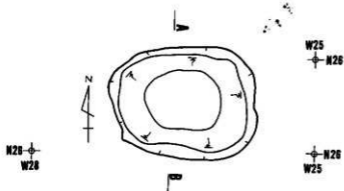
IV I 28-2炭窯跡（第70図 写真図版58）

当遺構は、北尾根南側斜面のほぼ中央部に位置する。ここは、地形的には、南向き緩斜面を呈している。検出面は、第V層上面である。当遺構は、IV I 28-1炭窯跡の北壁の一部を切っている。平面形は、長軸が斜面にほぼ直交させる不整隅丸長方形を呈する。規模は、1.2m×0.9mである。検出面からの掘込みは約20cmで、第VII層まで達している。底面は、若干の凹凸を呈する。埋土から炭化材が出土している。

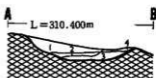
なお、この炭化材は、少量かつ細片で原形を留めず、樹種鑑定はできなかった。

VE 30炭窯跡（第70図 写真図版59）

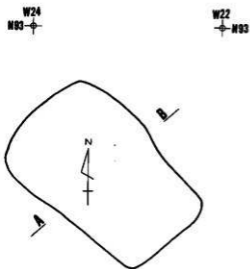
当遺構は、北尾根南側斜面の南東端近くに位置する。ここは、地形的には、南向き斜面を呈している。検出面は、第V層上面である。平面形は、長軸が斜面にほぼ直交させる不整楕円形



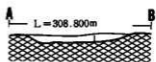
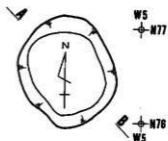
IV E 35 炭層



- 1 黑色 15Y R 2/1 矽石、炭化材を含む。
- 2 褐色 15Y R 4/6 矽石を含む。
- 3 暗褐色 15Y R 2/3 矽石を含む。
- 4 暗褐色 15Y R 3/3 矽石、炭化材を含む。

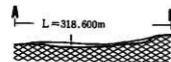


IV F 22 炭層



- 1 黑色 15Y R 2/1 矽石、炭化材を含む。

IV I 25 炭層



- 1 褐色 10Y R 4/6 矽石、炭化材を含む。



第69圖 IV E 35 · IV F 22 · IV I 25 炭層跡

を呈する。規模は、1.4m×0.9mである。検出面からの掘込みは12cm前後で、第VII層まで達している。底面は、若干の凹凸をみせる。埋土の壁際および底面から焼土が確認されているが、これは、現地性のものである。埋土からは炭化材が出土している。

なお、出土した炭化材は、粟との鑑定結果を得ている。

〈中央尾根稜線部・東斜面〉

計9枚が検出されている。占地的にみると、当地区の中でも、屈曲して南西に延びる尾根の鞍部ないしは両側へ下った斜面中位に位置している。形状は長方形を基調とし、長軸の長さが1.5m前後のものが多い。また、たいていが斜面に直交するように長軸方向があるのも北尾根等で検出された炭窯跡と共通する特色である。検出面は、基本層序第III層上面であり、表土が凹地を呈するもので容易に確認できる。

なお、遺構から炭化材が出土しているが、これらは、コブノ木・楡・栗・樺や針葉樹（樹種不明）等の鑑定結果を得ている。

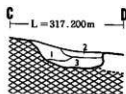
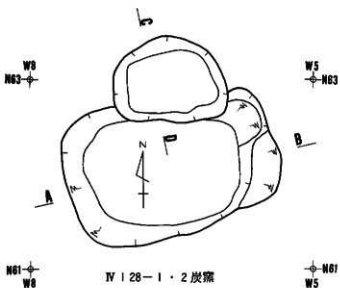
IVB77炭窯跡（第71図 写真図版60）

当遺構は、中央尾根稜線部の南西向き斜面に位置する。検出面は、第III層上面である。ただ、一年次の調査の際、第IV層上面まで掘りを行なっているため、遺構の大部分が削平されている。残存状況から、元来の平面形は長方形と思われる。長軸方向は、斜面と直行する北西—南東にあると思われる。規模は不明である。壁は、第VI層下位まで掘込まれている。埋土の1・2には、炭化材・炭化物・焼土粒が含まれている。

なお、炭化材については、コブノ木の鑑定結果が得られている。

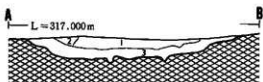
IVB81炭窯跡（第71図）

当遺構は、中央尾根稜線部南端に近い南西向き緩斜面に位置する。IVB80住居址（縄文時代）の炉跡と重複するが、検出面が異なり、直接の影響は受けていない。検出面は、第III層上面であるが、一年次の調査の際に第VI層上面まで掘りを行なっているため、遺構の大部分は削平されている。残存状況からは、元来の平面形は長方形と思われる。長軸は、斜面とほぼ直交するように、南—北ないしは北西—南東にもつと思われる。規模は不明である。壁は、第VI層まで掘込まれている。埋土1の上位には多量の炭化材が含まれている。この炭化材は極細片で、樹種は不明である。



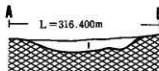
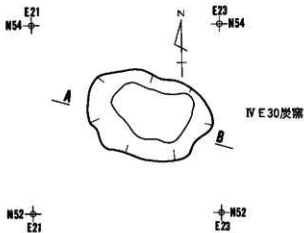
- 1 黒色 10Y R 2/1 灰土、燧石を含む。
- 2 褐色 1.5Y R 4/4 灰土を含む。
- 3 黒色 1.5Y R 2/1 灰土、炭化材を含む。

IV | 28-2 炭窟



- 1 黒褐色 1.5Y R 3/2 灰土を含む。
- 2 黒褐色 10Y R 3/2 灰土を含む。
- 3 黒色 1.5Y R 2/1 灰土、炭化材を含む。
- 4 褐色 10Y R 4/4 炭化材を含む。

IV | 28-1 炭窟



- 1 黒褐色 10Y R 2/2 炭化材、燧石を含む。



第70図 IV | 28-1 · 2 · IV E 30 炭窟跡

IV D74炭窟跡 (第71図 写真図版60)

当遺構は、中央尾根稜線部南半の中央部にあたる南西向き斜面に位置する。精査時の検出面は第VI層であるが、本来はIII層と思われる。平面形は、長方形を呈する。長軸は、斜面にほぼ直交する北西—南東にもつ。規模は、1.6m×0.9mである。壁は、第VI層下位まで掘込まれている。埋土には炭化材が多量に含まれている。

なお、この炭化材は、櫛および樹種は不明であるが針葉樹との鑑定結果が得られている。

IV E75炭窟跡 (第71図 写真図版60)

当遺構は、中央尾根稜線部の南西端に位置する。IV E65ピットと重複するが、当遺構の掘込みがピットの直上までであるため、直接の切合い関係はない。検出面は、第III層である。平面形は、長円気味である。長軸は、斜面と直交する北西—南東にもつ。規模は、1.5m×1.3mで、検出面から10~30cm掘込まれている。埋土2・3には多量の炭化材が含まれている。

なお、この炭化材は、栗・櫛との鑑定結果が得られている。

IV I83炭窟跡 (第72図 写真図版61)

当遺構は中央尾根南部の東側斜面下位に位置する。検出面はIV層上面である。東端の壁は削剥されている。平面形は長軸を東北東—西南西にもつて、帯状を呈する。長軸方向は等高線に平行する。規模は、長さ5.8m、幅は西側で1.1m、東側で0.7mである。埋土はIV層起源の砂質土で炭化物を含む。底部を薄く炭化材の層が覆う。壁は外傾し、壁高は北側で0.2~0.4m、南側では0.25m以下である。底部は平坦である。

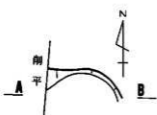
IV J79炭窟跡 (第72図 写真図版61)

当遺構は中央尾根南部の東側斜面下位に位置する。検出面はIV層上面である。南側の壁は削剥されており、全体の平面形と規模は不明である。炭化物の分布状況から、平面形は長軸を東北東—西南西にもつ帯状を呈し、長軸方向は等高線に平行する。規模は長さ4.2m、底部の幅は東側で0.9m、西側で0.8mである。埋土はIV層起源の黒褐色砂質土で、炭化材片を含む。残存する壁は外傾し、壁高は0.2m以下である。底部には緩やかな凹凸があり、東側ほど高い。

V B65-1炭窟跡 (第73図 写真図版61)

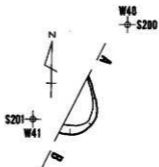
当遺構は中央尾根北部の東側斜面下位に位置する。検出面はIV層上面である。平面形は長軸を北東—南西にもつ帯状を呈し、端部は丸む。長軸方向は等高線に平行する。規模は長さ9.6m、幅は東端で1.6m、西端で0.95mである。埋土はIV層起源の黒褐色砂質土で、炭化材片の含まれ

W43
S184



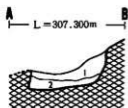
IV B 77 炭窯

W41
S184



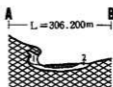
IV B 81 炭窯

S186
W43



- 1 褐色 10Y R 4/4 炭化材料片、炭化物、ハリスを含む。
- 2 暗褐色 10Y R 3/4 炭化物、粘土、ハリスを含む。

S186
W41



- 1 暗褐色 10Y R 3/3 ハリスを含む。
- 2 明褐色 5Y R 5/8 粘土、炭化材料小片を含む。

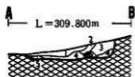
W31
S186

W30
S186



S186
W31

S186
W30

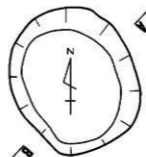


IV D 74 炭窯

- 1 褐色 10Y R 4/4
- 2 暗褐色 10Y R 3/3 炭化材料小片、小礫を含む。
- 3 暗褐色 10Y R 3/4 炭化材料片、小礫を含む。
- 4 高褐色 10Y R 2/3 炭化材料を含む。
- 5 褐色 10Y R 4/4 炭化材料小片を含む。
- 6 灰褐色 10Y R 5/5

W30
S123

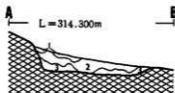
W29
S123



IV E 75 炭窯

S125
W30

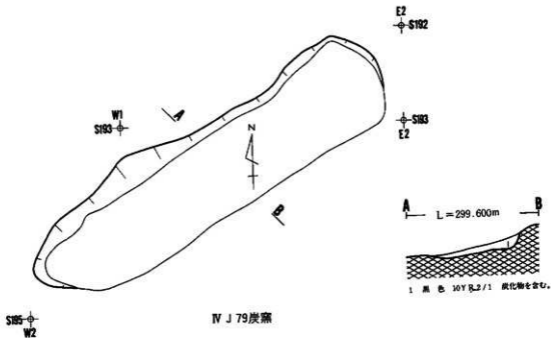
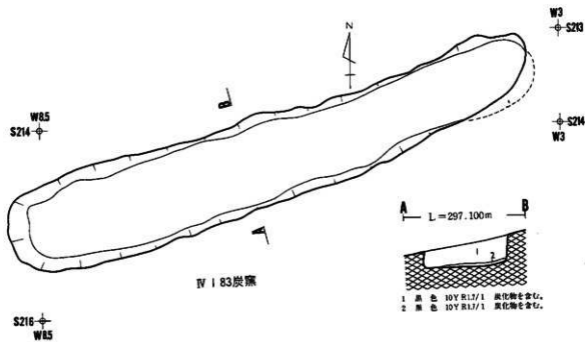
S125
W29



- 1 褐色 10Y R 4/6 ハリスを含む。
- 2 褐色 10Y R 3/4 ハリス、炭化材料小片を含む。
- 3 暗褐色 10Y R 3/3 炭化材料片の堆積層。

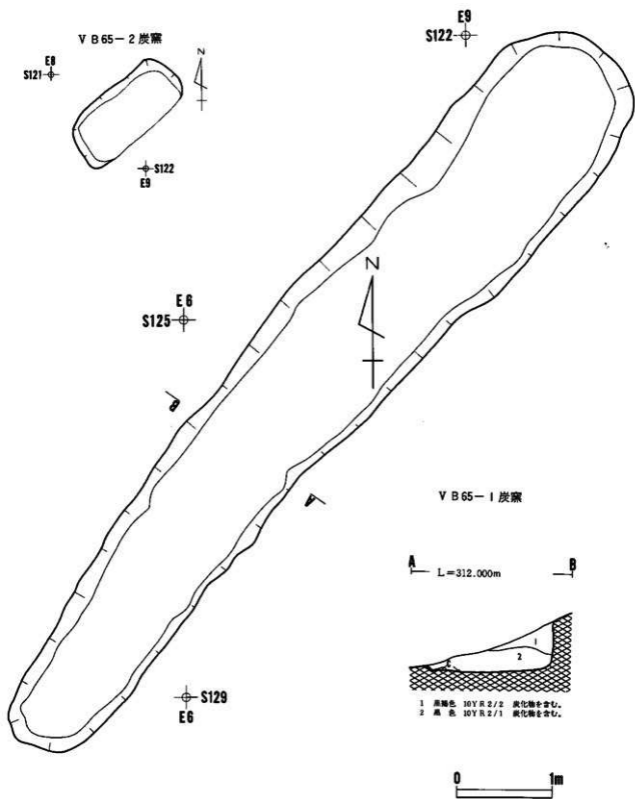


第71図 IV B 77・IV B 81・IV D 74・IV E 75 炭窯跡



0 1m

第72图 IV I 83 · IV J 79炭窯跡



第73図 V B 65-1・V B 65-2 炭窟跡

方によって2層に分けられる。底部は炭化材によって覆われる。壁は垂直に近く立つ。壁高は北西壁の東側では0.7m、西側では0.35mである。底部はほぼ平坦であり、傾斜は見られない。

V B 65-2炭窯跡 (第73図)

当遺構はV B 65-1炭窯跡の北東端北側に位置する。南東部は削剝されており、全体の平面形と規模は不明である。残存する底部は、長軸を北西-南東にもつ隅丸長方形を呈する。規模は北東-南西1.3m、北西壁で壁高0.2mである。底部は平坦である。V B 65-1炭窯跡とは至近にあり、その付属施設とも考えられる。

V E 65炭窯跡 (第74図 写真図版61)

当遺構は中央尾根北部の東側斜面下位に位置する。検出面はIV層上面である。南東壁の西半と底部が削剝されており、全体の平面形と規模は不明である。残存する部分から、平面形は長軸を北東-南西にもつ帯状を呈していたと考えられる。長軸の方向は等高線と平行する。検出できた規模は、長さ5.5m、幅1.4m、壁高は東側で0.4mである。埋土はIV層起源の黒色砂質土である。壁は外傾し、底部は平坦である。

<中央尾根南斜面>

II F 96炭窯跡 (第75図 写真図版62)

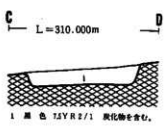
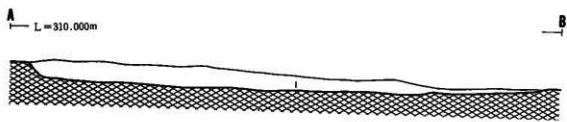
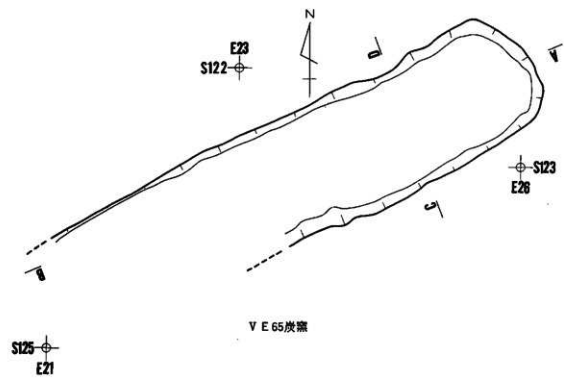
当遺構は、南斜面斜面下位の西端にある。検出面はIV層上面である。平面形は不整な隅丸長方形を呈する。規模は、長軸2.82m、短軸1.02m、壁高は東壁41cm、西壁7cm、南壁12cm、北壁32cmである。埋土は、炭化物を含む黒色～黒褐色土で構成され、下位には多量の炭化材を含んでいる。底面は平坦で、壁際にかけて焼土の発達が見られる。炭化材以外に出土遺物はない。

II J 95炭窯跡 (第75図 写真図版62)

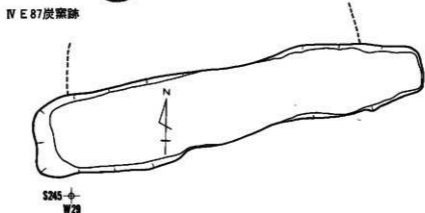
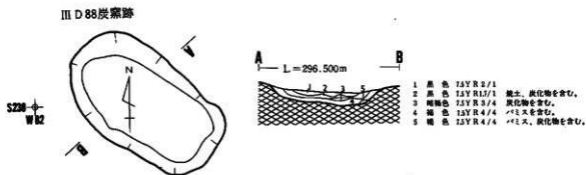
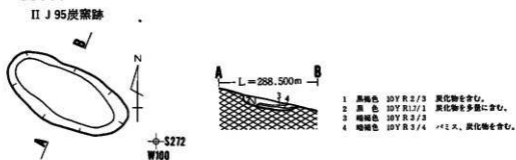
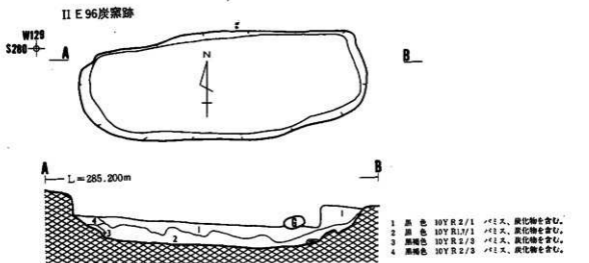
当遺構は、南斜面斜面下位の西側にある。検出面はIV層上面である。平面形は不整な小判形を呈する。規模は長軸137cm、短軸64cm、壁高は3～15cmである。埋土は、炭化物を含む黒色～黒褐色土で構成され、中位には多量の炭化材を含む。底面は平坦で、一部に焼土が形成されている。炭化材以外の出土遺物はない。

III D 88炭窯跡 (第75図 写真図版62)

当遺構は、南斜面尾根部の西側にある。検出面はIV層上面である。平面形は不整な小判形を



第74図 V E 65炭窟跡



第75図 II E 96・II J 95・III D 88・IV E 87 炭窯跡

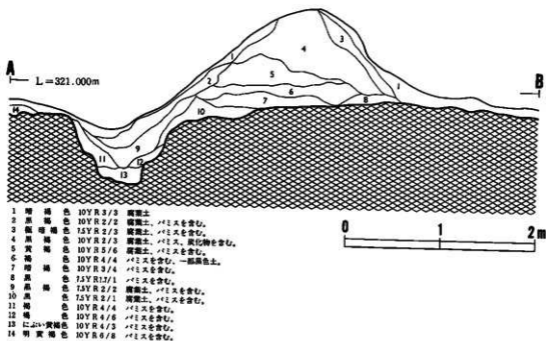
呈する。規模は長軸1.77m、短軸1.03m、壁高は2～16cmである。埋土は、炭化物を含む黒色～褐色土で構成され、中位では多量の炭化材を包含する。底面は平坦で、一部に焼土が形成されている。炭化物以外の出土遺物はない。

IVE 87炭窯跡 (第75図 写真図版62)

当遺構は、南斜面斜面下位の東端にある。重複するIVE 87住居址の精査時に検出されたもので、住居址の南半を切っている。遺構が斜面に立地していることや住居址の精査の際に削剝を受けたことから、埋土の状態を含めて不明な点が多い。平面形は、細い隅丸長方形を呈する。残存部での規模は、長軸416cm、短軸92cm、壁高は東壁10cm、西壁35cm、南壁4cm、北壁20cmである。底面は平坦である。出土遺物はない。

(3) 土 壘 (第76図 写真図版63)

西は、西尾根北側頂部から沢に向かって下り、東は北尾根線縁部を通して東側丘陵を越え、さらに東へと続いている。また、別にもう1本、VG25区よりわかれて西北西に延び、VB23区で向きを沢方向(北)に変えて延びている。全景の実測は時間の制約上省略し、断面のみ調査したものである。



第76図 土壘断面図

十和田 a 降下火山灰を含む層の上位に、腐葉土の混じる旧表土があり、その上に八戸火山灰層、南部浮土層、暗褐色～黒褐色土層を積み上げている。これらは、土塁の南側、北側を掘り上げたものである。特に南側は溝を深く掘り、八戸火山灰層まで掘り上げている。その溝の埋土下位(13層)は、八戸火山灰、砂、黒色土の互層になっている(これは、VF25-1住居址埋土の10層と同様である)。北側の溝は浅く、明確でない部分が多い。

* * *

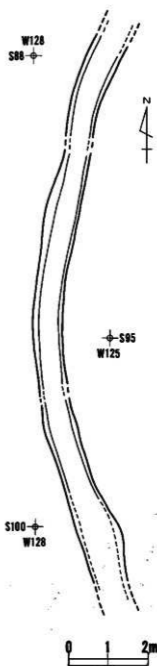
南部氏が当地方を領した時代に「牧」(一頭の牡馬を中心に十数頭の牝馬が配され、それから生まれた若い馬を含めて、約100頭が一群となっている。一頭あたり1町歩から1町5反歩の草地が必要だから100町歩くらいの面積に区切られていた。)が設置されている。なお、軽米城主北宣継の時代に、馬産に力を注ぎ、君成田に100町歩の牧場を開いたという記録がある。

* 軽米町誌(昭和50年)軽米町

4. 時期不明の溝跡

II E 58溝跡(第77図 写真図版63)

当遺構は西谷右岸の南部に位置する。検出面は中叢浮土層上面である。遺構の両端は削刺されており、全体の規模と平面形は不明である。検出された平面形は、南一北に長軸をもち、西方に弧を描く。検出できた長さは15m、幅は0.8~0.9mであり、検出面からの深さは0.3m以下である。埋土は暗褐色土が主体である。壁と底部の断面形は皿状を呈する。底部は北から南に緩傾斜している。人為的な溝跡と考えたが、兩裂の可能性も否定できない。また時期についても特定できない。



第77図 II E 58溝跡

III. ま と め

1. 古代の遺構と遺物について

当遺跡から検出された古代の竪穴住居址（以下住居址と略す）は15棟である。区域別にみると、西尾根6棟、西谷3棟、北尾根6棟である。中央尾根地区では、尾根部・南斜面部とも古代の遺構は検出されなかった。以下、これらの住居址および共伴する遺物について、簡単に整理してみたい。

(1) 竪穴住居址

〈規模〉 15棟中最大のもの、西尾根から検出されたII I 41-1住居址で6.2×6.6m、最小のものは、西谷III G 45住居址・北尾根IV G 37住居址で一辺約2.5mの規模である。この他の住居址は全て、一辺3.5～4.5mの範疇に納まる。

〈平面形〉 ほとんどの住居址は隅丸正方形を基調としているが、西尾根III A 45住居址は隅丸台形に近く、西谷III C 58住居址は不整な六角形に近い。しかし、これらも台形や六角形を意図して構築されたものではないと考えられる。

〈埋土〉 全ての住居址の埋土上位には、十和田 a 降下火山灰の堆積が観察された。層の厚いものでは最大45cmにも達するものもある。

〈壁〉 ほとんどの壁は、垂直あるいはやや外傾して立ち上がる。壁高は0.1～1mと各住居址毎にさまざまで一様ではない。この壁高の高低と住居址の規模や立地場所等との相対関係について、類型化できるだけの資料は見い出せなかったが、概して小規模なものや、カマドを持たないもの、場所的には斜面の上位に立地する住居址では壁が低い傾向にあるように思われる。

〈床〉 床の形態には、地山をそのまま床面とするタイプと、部分的なものも含めて貼床を施すタイプがある。西尾根では2棟の住居址が貼床を持ち、西谷の住居址は全て地山を床面としている。北尾根では6棟中5棟の住居址に貼床が施されていた。北尾根の住居址にも貼床が施される割合が多いことは、床面レベルでの地層との相関関係が考えられる。これらの住居址の床面レベルは、南部浮石層（基本層序第VI層）にあたる。南部浮石は、粒径0.5～3cmの発泡の良いバミスで、当地区での層厚は約40cmに達する。このため、ある程度の平坦さや硬さを必要とする床面を形成するには、同浮石層はまことに不適当な土質といえる。したがって、当地区に立地する住居址は、貼床を施す必然性があつたものと考えられる。

特殊な例としては、西尾根II 44-1住居址では、これと重複し先行するII I 44-2住居址の貼床面を再利用している。また、II G 46住居址では、2面の貼床が確認されている。

〈柱穴〉 はっきりとした柱穴が検出された住居址は、西尾根ⅡG46住居址・ⅡI44-1住居址の2棟のみである。ⅡF44-1住居址は、前述した如く15棟中最大の規模を持つ。ⅡG46住居址も4.2×5.2mの規模で3番目に大きい。いずれも、4個で構成され、ⅡG46住居址は正方形・ⅡF44-1住居址は長方形の配置を示す。ⅡF44-1住居址に次ぐ規模(5.3×5.0m)をもつ西谷ⅢC53住居址では、床面の東隅と南隅に小規模な柱穴状ピットが検出されたが、柱穴配置など詳細は不明である。

〈カマド〉 完掘できなかつた西尾根ⅡG41住居址を除く14棟中、カマドを持ったものは11棟である。カマドは全て北西壁の中央部に1基ずつ設けられている。煙道部の形態は1棟を除き地山を掘り抜くトンネル式(割貫き式)で、いずれも良好な残存状況を示す。また、残存状況の悪い1棟の煙道についても、掘り込み式ではなく割貫き式の天井部が崩落したものと考えられる。

燃焼部は崩壊が著しく、残存状態は良くないが、検出状況からみると長い角礫を用い、これに粘土やシルトを貼り付けて構築されていたと推定できるものが数棟ある。袖部はほとんどのものが礫を芯材として、これを粘土やシルトで覆って作られている。特殊な例として、一部分地山を削り出し、この部分に礎柱す形で礫と粘土による袖部を構築している北尾根ⅣB36住居址がある。

〈主軸方向〉 カマドが付設されている壁及びこれの対称壁にほぼ直交するように引いた線のカマド側を主軸方向とした。また数値は、北からの角度である。

確認されたものは全て、北西-南東方向に主軸をもつ。この中で若干特異な傾向を示すものは、北尾根ⅣD39住居址と西尾根ⅡH41住居址で、前者は他の住居址よりやや西方向に、後者はやや北方向に主軸をもつ。この他の住居址の主軸は、30°~50°の角度で西に偏する。

〈焼失住居址〉 西尾根3棟・西谷1棟・北尾根3棟の7棟が焼失を受けている。炭化材の樹種鑑定の結果、ほとんどがクリ材であった。この他の樹種としては、北尾根ⅣD34住居址で「青ダモ」、ⅣD39住居址で「ケヤキ」が確認されている。これらの材の形態(板材・丸太材・角材などの別)は不明である。さらに、材の検出状況から上屋構造を想定することはできなかった。

〈占地〉 区域毎に地形と住居址の分布状況を概略的に述べる。西尾根地区は、北から南西に張り出す尾根の突端部分と北西~西側の斜面の一部が調査区域となっており、尾根全体における住居址の占地は不明である。しかし、調査区に限ってみるならば、当地区の住居址は、西谷に続く南東斜面の上位に集中する。また、調査区域外にかかるⅡG41住居址の在り方から推定すると、住居址群は尾根頂部の平坦地にも広がる可能性をもつ。しかし、尾根の南斜面以西の区域では、遺構が集中する高度と同じ標高の部分においても住居址は検出されなかった。西谷地区の住居址は、南下する小規模な沢による開析地に占地する。この部分は、西尾根から続く

斜面の端に当たり、緩い南西斜面となっている。北尾根部の住居址は、東西に伸びる尾根の南斜面に占地する。そしてこの部分は、西谷地区を流れる沢の谷頭に近い。なお、北尾根区と西尾根・西谷区の間には遺構の空白地が存在するが、この部分は、沢に続く埋没谷地形を呈しており、住居址の立地には適さない区域であると考えられる。

以上のことから推定すると、検出された15棟の住居址が同一時期に存在したか否かは不明なもの、地形的にみると、これらの住居址の在り方は、西谷の沢を取り巻く南一南東斜面を強く意識した占地であることが窺える。

(2) 出土遺物

出土した遺物には、土器・土製品（勾玉4点・土玉1点・紡錘車2点）・石製玉・鉄製鎌・砥石がある。このうち、勾玉4点と鉄製の鎌は、北尾根IVD39住居址からの出土である。

土器は、全てクロコ末使用の土器で須恵器は出土していない。器種には坏・高坏・甕・甔・鉢・手捏ね土器がある。しかし、全体量・完形品とも少なく、類型化できるだけの資料には乏しい。ここでは比較的出土量の多い坏形土器と甕形土器を中心に形態と調整技法について若干のまとめを行いたい。

〈坏形土器〉 図化できたものは、西尾根9点・西谷1点・北尾根9点の19点だけである。

西尾根・西谷地区出土の10点の底部形態は全て丸底である。このうち体部に段を有するものはII G46住居址出土の1点だけで、これは内面にも段をもつ。器形は体部が内彎ぎみに立ち上がるものばかりで、外傾するものや外反するものはみられない。口径値では、14～17cmのものが6点と多いが、17cmを越えるものと10cm以下のものがそれぞれ2点ある。器高値では4～6cmのものが6点、6cm以上のもの4cm以下のものがそれぞれ2点ある。しかし、口径値と器高値との相対関係では個体差が著しく傾向化は見られない。

調整技法では、内面は割合丁寧なヘラミガキの後黒色処理が施されている。外面の調整もヘラミガキを主体とするものが多いが、内面のそれに比べて簡略化されている。また、体部に段をもつII G46住居址出土の坏はヨコナデ調整されているほか、II I44-1住居址・III A45住居址出土のものでは3底部にヘラケズリ調整の痕を残している。

北尾根地区出土の9点では、IV B36住居址出土の1点を除き底部形態は丸底である。IV D36住居址・IV D39住居址出土の2点は体部に段をもつ。器形は、ほとんどのものが体部が内彎ぎみに立ち上がるが、体部に段をもつIV D39住居址出土の小型坏は、段より上部が外反ぎみに立ち上がる。口径値では10cm以下のもの3点、12～14cmのもの2点、15cm以上のもの2点となり、西尾根に比べてやや小型の坏が多い。

調整技法では内外面ともヘラミガキ調整を主体としているものが多いが、総じて雑な調整である。IV D34住居址・IV E37住居址出土のものは、底部外面に粗いヘラケズリ調整が施されて

いる。また、製作技法もかなり粗雑なものが目立つ。

〈甕形土器〉 環形土器に比べて出土量は多いものの、破損品が多いため細部の形態分類や法量での細分はできなかった。器形から、体部にあまり膨らみをもたない長胴甕と体部に膨らみをもつ球胴甕に分類される。出土数量では前者が多い。

西尾根・西谷地区の長胴甕では、西谷ⅢC53住居出土の1点を除き最大径を口縁部（口径）にもつ。口唇部は丸く、口縁部に段や稜はもたない。頸部に段や沈線をもつものがあるが、これは、後述する調整技法との関係が窺われる。底部形態では、外面にわずかに台状の張り出しをもつものが多く、内面は緩い丸底のものが多い。

調整技法では内面の調整に、1. ヘラミガキを多用するタイプと、2. ナデやハケメを主体とし、ミガキを簡略化するタイプがある。出土数量が少なくいちがいに言えないが西尾根ⅡG46住居址、西谷ⅢC53住居址は1のタイプに属し、2のタイプには西尾根ⅢG45住居址・ⅡH41住居址・ⅡG41住居址が属する。また、西尾根ⅡI44-1住居址では、両タイプが混在している。1のタイプに属する甕では、調整が口縁部にまで及び頸部に段や沈線はみられない。これに対し、2のタイプに属する甕では、頸部に段や沈線をもつものが多い傾向にある。内面の調整では、1のタイプの属するものではナデ調整が多用されるが、2のタイプのものでは新たにハケメ調整されるものが現われる。

球胴甕は4点と量が少なく対比できるだけの資料性に乏しいが、調整技法からみると長胴甕と同様な傾向が窺われる。しかし、頸部の段や沈線は調整技法の別とは関わりなく、長胴甕より顕著に見られる。

北尾根地区出土の長胴甕では、西尾根・西谷地区に比べ、器高が15cm以下の小型の甕が多い傾向がある。最大径は、ⅣE37住居址出土の1点を除き口縁部にもつ。口唇部の形態もほとんどのものは西尾根・西谷地区と類似するが、ⅣD34住居址出土の小型甕は、頸部にくびれを全くもたない。頸部に段や沈線をもつものともたないものがあるが、雑なものにしろ何らかの境目をもつものが多い。底部形態では、外面にわずかに台状の張り出しをもつものが多いが、前述の小型甕は張り出しをもたない。内面は、緩い丸底を呈するものと平底に近いものがある。

調整技法では、1. ヘラミガキを多用するタイプ、2. 最終的にヘラミガキ調整されるが、部分的でナデ調整の痕を残すタイプ、3. ナデ・ケズリを多用するタイプがある。これら3つのタイプの土器は共伴して出土しており、住居毎に明確な類型化はできないが、ⅣD36住居址は1のタイプの甕が多く、ⅣB36住居址・ⅣD34住居址・ⅣD36住居址・ⅣE37住居址では2のタイプに属するものが多い、ⅣD39住居址では3のタイプの甕が多い傾向がみられる。しかし、北尾根地区でみられるヘラミガキ調整は、西尾根・西谷地区のそれと比べて粗雑な調整である。球胴甕は出土量が少ないが、共伴する長胴甕と同様の調整が施される。

この他に北尾根地区出土の土器組成の中で特徴的なものに手捏ね土器がある。この種の土器は西尾根・西谷地区からは出土していない。IVD39住居址から5点・IVE37住居址から1点出土しているが、環形土器に分類したIVB36住居址の土器も、製作技法がこれらに類似する。

〈時期〉

以上検出された15棟の住居址について形態と出土した土器の様相についてみてきたが、ここでは駒板遺跡と同様に、ロクロ未使用の土師器を伴う住居址が多く検出されている二戸地方の遺跡と比較し、当遺跡の古代住居址の位置づけを行いたい。

二戸地方でロクロ未使用期の住居址が多く検出されている代表的な遺跡には、堀野遺跡・上田面遺跡・長瀬遺跡・中曽根遺跡などがある。これらの遺跡は、共伴した土器の形態や組成・器面の調整技法等により、堀野遺跡→上田面遺跡→長瀬遺跡→中曽根遺跡の順で編年されている〔関(1981)・高橋(1982)・相原(1983)〕。この指標としては、堀野・上田面遺跡では、環形土器は大型で丸底のものを主体とするのに対し、長瀬遺跡では小型・平底・平底風のものが出現し、中曽根遺跡ではこれが定着すること、甕形土器は底部形態が外面に張り出しをもち、内面が尖底や丸底を呈するものから、張り出しをもち、内面が平底化していくことがあげられている。また、甕の調整技法では、堀野・上田面遺跡のものは丁寧なヘラミガキ調整されるのに対し、後者ではヘラミガキは簡略・省略化し、代ってナデやハケメ・ケズリ調整が多用されることも指摘されている。環の調整も甕ほど顕著ではないものの、ヘラミガキ調整の簡略化がみられるようである。さらに手捏ね土器は、後者の土器組成の中に集中することがあげられている。なお、堀野遺跡に7世紀後半・中曽根遺跡には8世紀末の年代が与えられている。

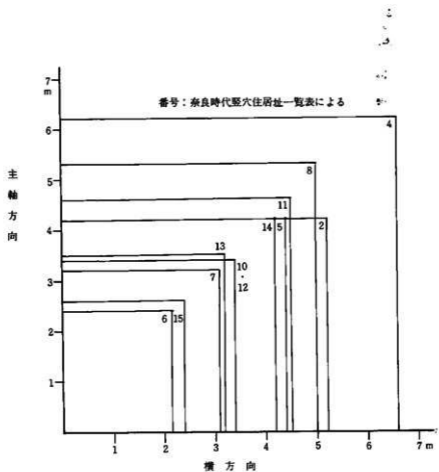
当遺跡の環形土器では、17cmを越える大型のものもある一方、15cm以下のものが多く、これらが混在する。底部形態では、1点ではあるが平底のものが混ざる。調整技法では、丁寧なヘラミガキのものは少なく、大半は簡略化したものである。甕形土器では、ほとんどのものが底部外面に張り出しをもち、内面は丸底である。調整技法の点では、ヘラミガキを多用するものと、ナデ・ケズリ・ヘラケズリを多用するものがある。等々の特徴を示す。住居址別では、甕形土器の調整技法から、ヘラミガキ調整が割合多く用いられる。西尾根II G46・II I44-1住居址・西谷II C53住居址・北尾根IVD36住居址にやや古い要素がみられ、ナデ・ハケメ・ヘラケズリ調整を多く用いる西尾根II G41・II H41住居址・西谷III G45住居址・北尾根IVB36住居址・IVD34住居址・IVD39住居址にやや新しい要素がみられる。しかし、これらの要素は混在するうえ、環形土器の共伴状況にはあまり差はなく、これら15棟の住居址はほぼ同時期のものと考えてよいと言えよう。

二戸地区の遺跡との比較では、丸底の環が多い点や甕の底部形態・調整技法にやや古い要素が窺えるものの、全体としてみれば、調整技法の簡略化・環の小型化が始まる長瀬遺跡の時期

の遺物に類似しており、時期的には、8世紀中葉～後半に位置づけられるものと考えられる。

〈参考引用文献〉

- (1) 草間俊一 (1965)：廻野遺跡、福岡町教育委員会。
- (2) 関 豊 (1981)：中曾根II遺跡発掘調査報告書、二戸市教育委員会。
- (3) 高橋信雄他 (1982)：岩手の土器、岩手県立博物館。
- (4) 相原康二 (1983)：岩手県南部(北上川中流域)における所謂第1型式の土師器・前期土師器の内容について、考古学論叢①、芹沢長介先生還暦記念論文集刊行委員会。



第78図 奈良時代竪穴住居址規模図

第5表 奈良時代堅穴住居址一覧表

No.	図版	地区	住居址名	平面形	規模	主軸方向	埋土	柱穴	貼床	カマド			焼失	出土遺物	備考
										位置	構の構築	煙道			
1	12	西尾根	II G41 住居址	隅丸方形(横)	不明	不明	To-a含む	無	不明	不明	不明	有	甕		
2	13-16	"	II G46 住居址	隅丸長方形	4.2×5.2	N-40°-W	To-a含む	4	部分	北西・中央	礎を芯材	制貫	無	甕・坏	
3	17・18	"	II H41 住居址	隅丸方形	3.6×?	N-25°-W		無	無	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕・坏	
4	20-22	"	II I44-1住居址	隅丸方形	6.2×6.6	N-53°-W	To-a含む	4	部分	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕・坏・紡錘車	
5	23	"	II I44-2住居址	隅丸方形	4.2×4.4	N-53°-W		無	無	北西・中央	不明	不明	不明		④の下位
6	24	"	III A45 住居址	不整隅丸古形	2.4×2.2			無	無	無	無	無	無	坏	
7	25・26	西谷	III B54 住居址	不整隅丸方形	3.2×3.1	N-31°-W	To-a含む	不明	無	北西・中央	礎を芯材	制貫	無	土器片	
8	27-29	"	III C53 住居址	不整隅丸方形	5.3×5.0	N-38°-W	To-a含む	無	無	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕	
9	30	"	III G45 住居址	不整隅丸方形	2.5×?	N-30°-W	To-a含む	無	無	北西・中央	礎を芯材	制貫?	無	甕・坏	
10	31	北尾根	IV B36 住居址	隅丸方形	3.4×3.4	N-50°-W	To-a含む	無	部分	北西・中央	礎を芯材	制貫	無	甕・坏	
11	32・33	"	IV D34 住居址	隅丸方形	4.6×4.5	N-49°-W	To-a含む	無	全面	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕・坏・鉢	
12	34	"	IV D36 住居址	隅丸方形	3.4×3.4		To-a含む	無	全面	無	無	無	無	甕・坏	地床坪有
13	35・36	"	IV D39 住居址	隅丸方形	3.5×3.2	N-72°-W	To-a含む	無	全面	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕・坏・コシキ 礎・土製勾玉	
14	37・38	"	IV E37 住居址	隅丸方形	4.2×4.2	N-48°-W	To-a含む	無	部分	北西・中央	礎を芯材	制貫	有	甕・坏・鉢 紡錘車・砥石	
15	39	"	IV G37 住居址	隅丸方形	2.6×2.4		To-a含む	無	無	無	無	無	無	甕	

2. 鑄銭場跡について

鑄銭場の復元

当遺構で検出された鑄銭場跡は、床面と僅かな地下構築物であり、全容を解明することは不可能である。そこで、調査できた事項をもとに、その構造を考えてみたい。

鑄銭場跡が立地する地形は、西流する沢に臨む崖である。この崖は、南に延びる尾根の先端であり、斜面が傾斜を次第に緩めながら下り、次いで沢に向かって落ちる南側斜面縁辺部にあたる。崖の規模は、傾斜約40度、沢からの比高は約3mである。湧水地点は遺構の約80m東方である。鑄銭場はこの崖の斜面の中位に設けられており、斜面上方を切土し、下方を盛土によって東一西約7.2m、南一北約3.5mのテラスを造成している。鑄銭の作業はこのテラスと、沢までの斜面でなされたものと考えられる。遺物が分布する範囲は沢の北岸で、東一西約13mに及ぶ。

鑄銭場の上屋構造については、検出された P_1 ・ P_2 ・ P_3 の柱穴から考えざるを得ない。 P_1 と P_2 はテラスの長軸に並ぶものであり、 P_3 には対応する柱穴が検出されなかった。このことから上屋は、芯芯間約6m(約15尺)の P_1 ・ P_2 を棟持柱とした東西棟で、屋根は北側の斜面上方へ葺きおろした片屋根と考えられる。 P_3 はその位置から、コシキの上部にあたる垂木を支えた柱跡ではなかろうか。

コシキはテラスの西方にあり、底部はテラスを円形に掘りこんだピットとなる。竈の位置は不明であるが、コシキの至近にあったはずである。

遺構について

駒板遺跡で検出された鑄銭場跡について、その性格を明らかにするため若干の考察を進めたい。そこで、これを記録に残る銭座、特に幕府や藩によって公設された正規の銭座と比較したい。一般に近世の銭座の状況は不明な点が多いとされている。その理由の一つは、当時の文献史料が少ないことにある。これは密銭鑄造を防止するために、意図的に残さなかったためとも考えられる。また銭座の発掘調査例が皆無に近く、管見のかぎりでは岩手県釜石市の粟林銭座のみであろう。こうした中で「中考覚」(「南部貨幣史」所収、盛岡市高橋幸市氏蔵本)は小規模な私炉の開設計画書と考えられ、貴重である。また仙台藩石巻銭座の稼業を描写した「銭座絵巻」も具体的である。これを岩手県内に所在した銭座について第6表にまとめてみた。第6表で、8ヶ所の銭座のうち銅銭を鑄造したのは栗川銭座だけである。また県内に所在する仙台藩の銭座は文久山銭座だけである。この文久山銭座で鑄造されたのは、文久山鉄山での山内通用銭が中心であり、また文久山鉄山で生産された鉄は石巻銭座に供給されている。

第6表 岩手県内所在の銭座一覧

銭座名	所在地	原料供給鉱山	種類	鑄造期間	運営経営者	型場	従業員	牛・馬	運上金
大迫銭座	大迫町外川目字大倉台	鏡野鉄山	幕府認可 (盛岡)	慶応2年5月～ 明治2年6月	(棟梁長瀬五郎) 外川又産	20	1,200人	不明	5,150 貫
薬林銭座	釜石市薬林町大沢	薬林鉄山	大迫銭座分 座(盛岡)	慶応3年8月～ 明治2年	砂子田 潜六	20	680人 (炭地350人)	不明	500 貫
砂子渡銭座	釜石市甲子町砂子渡	砂子渡鉄山	請負(盛岡)	慶応4年8月～	近江屋治郎兵衛 高 須 清次郎	12	不明	不明	5,000 貫
鏡野銭座	釜石市鏡野町青の本	鏡野鉄山	請負(盛岡)	慶応4年6月～	井筒屋権右衛門 外川又産	36	約1,000人	牛150 馬40	
大橋銭座	釜石市甲子町大橋	大橋鉄山	請負(盛岡)	慶応4年9月～	高 須 清次郎	不明	約800人	牛100 馬40	25,000 貫
笹川銭座	盛岡市東中野	鹿角郡遠去沢関山	盛岡藩直営	慶応4年3月～9月	(棟梁藤田善九郎)				
住比内銭座	遠野市上郷町	住比内鉄山	請負(盛岡)	慶応4年～	井筒屋権右衛門	不明	不明	不明	
文久山銭座	大槌町島海	文久山鉄山	請負(仙台)	慶応4年～	戸 文 十 郎				

銭座の所在地は原料を供給する鉱山と一体化している例が多く、供給鉱山も離れているのは大迫銭座と薬川銭座だけである。このうち鉄を供給した鉄山は、全て洋式高炉を用いて大量生産を行うものである。銭座の経営の形態は藩からの請負いによるものが多く、幕府が認可し、藩が直営した大迫銭座も慶応4年からは請負制となっている。また銭座の創業時期は慶応4年に集中している。この現象は、江戸幕府が倒壊し、藩が独自の権限で銭を鑄造できる状況もたらされたことと関係していようし、また幕府鑄造の官銭が十分に流通しておらず、銭の不足があったことと関係していよう。

駒板遺跡の鑄銭場と正規の銭座を比較した場合、以上のような原料供給地との関係、交通の便、規模などの点で大いに異なる点が指摘できる。駒板遺跡の鑄銭場の場合、原料となった鉄がどのように供給されたか不明である。至近な鉄山としては、同郡大野村の玉川鉄山(軽米町大字小軽米の小玉川)と万谷鉄山(大野村)がある。また薪炭を供給した所も不明であるが、周辺の山林が利用できたであろう。これについて当遺跡内で検出された炭酸鉄との関連が考えられよう。また交通の便については、正規の銭座と比べて極めて劣悪な状態であった。明治初年の主要な道路を「岩手県管轄地誌」で見ると、晴山村を通る県道九戸街道(現国道391号)を晴山村観音林で分岐して伊保内村へ向う伊保内道が山内村を縦貫している。今の国道340号に相当する道である。当遺跡はこの伊保内道の東方約2kmに位置し、当時の集落からは全く隔絶している。最も近い道は、九戸街道を軽米宿で分岐し、山内村の伊保内道の和堂地を怪て福岡宿に出る道があり、今の県道軽米福岡線となっている。これは脇道であるが、種市方面から盛岡城下に送られた塩荷は軽米からこの道を辿り、君成田(大字軽米)に野宿して早朝に福岡に向ったとの伝承がある(小笠原吉亮「南部鑄銭考」昭和7年^{注2})。ただしこの道からも約1kmの距離

があって、途中の尾根と沢で隔絶されている。また規模については、「中考覚」が記す黙許の私炉が6ヵ所の型場で4間×10間の建物と付属の小屋3ヵ所であるから、当遺構の施設・規模はかなり貧弱なものと云える。以上のことから、当遺跡の鑄銭場跡は黙許の私炉とも性格を異にするものと考えられ、当時軽米代官所管内で盛行した密銭鑄造に関わる遺構と判断したい。

遺物について

出土した「寛永通寶」青銅銭は3枚であり、分量・書体からこれらは同一の銭座で鑄造されたと考えられる。背面に「千」の銘があり、郭と接して「舌」字となる。表面にある銘のうち「寶」は「王」の字が水平なことで、「貝」が「ウ」寇の中心から垂直に下げた線からやや左に寄るもので、進貝寶と称されているものである。この「千」字と「寶」字の特色と分量から、この銭は小字千進貝寶と称されているものの系統に包括される。この小字背千進貝寶は明和年間(1764~1770年)に石巻銭座で鑄造されており、その後の仿鑄品の模範となっている。これを模範とした銭は、当遺跡の近くでは文政~天保年間(1818~1844年)に葛巻村(軽米代官所管内。現岩手郡葛巻町)で密鑄された十字銭と舌千大襟がある。

当遺跡で出土した湯放ち銭について、背面の銘については錆化のため確認できなかつたが、表面は全て「寛永通寶」の銘をもつものだけが確認されている。また湯放ち銭と青銅銭との直径はほとんど同じ23mmであるが、この銅銭を種銭として利用したか否かについては何とも言えない。一般に密鑄銭は創作的な鑄貨はないとされ、伝鑄にあたって背千字銭を模範としたことは十分考えられよう。

文献史料について

八戸藩領での密銭鑄造については、文献史料では軽米代官所管内の上館村・軽米村と葛巻村が知られており、山内村では史料がない。これについて「九戸郡誌」(昭和11年)には、慶応年間(1865~1868年)に山内村駒板の松太郎が山中で銭を鑄造し、捕えられたことを記している。山内村の小字の中には駒板と称する所が2ヵ所あり、当遺跡の山林と他の一つは伊保内道に沿う駒板集落である。「九戸郡誌」のいう駒板は後者を指すと考えられるが、当遺跡はこの事件との関連は十分考えられよう。「九戸郡誌」の記事は極めて簡略にすぎ、鑄銭が行われた場所や鑄銭場の規模や形態などについては不明である。この原史料を探してみたが、八戸藩の「勘定所日記」・「御用日記」(「八戸市史」所収)や軽米町の元町文書^{註4}などにも見当たらない。「軽米町誌」(昭和50年)によれば、「九戸郡誌」のこの記述は小笠原吉亮の調査研究によるものとする。小笠原吉亮は当時の軽米村に住み、大正7年設立の岩手古泉会の指導的メンバーである。既に明治35年には白雲居士と号し、全国古泉番付にも載る古銭研究の第一人者であった。従って、山内村駒板の松太郎逮捕のことは村人達の記憶にも残っていたであろうし、小笠原吉亮がこの伝えを聞きとり調査したことも十分考えられる。

さて、九戸郡東部は近世における鉄の産地であるが、近世の野田村の江川鉄山は正保5(1648)年の見立てであり、同じく樺穴鉄山は宝暦2(1752)年の見立てと云われている(新渡戸非仏^{注5}「破草鞋」大正3年?)。寛文5(1665)年に南部藩は八戸藩と盛岡藩に分かれたが、九戸郡の鉄山地帯である久慈通が八戸藩に、野田通が盛岡藩に領有された。しかし盛岡藩が鉄を自給できるようになったのは下閉伊郡での鉄産業が興隆してからと云われている(「九戸地方史」昭和45年)。野田通で産した鉄は野田街道を通して盛岡に運ばれたが、九戸郡軽米通の葛巻村葛巻宿はその宿駅で、寛政6(1794)年12月までの鉄荷宿は市三郎店であり、後に文助店に移っている(「八戸藩勘定所日記」)。葛巻村も密銭が盛んなところとして知られ、文政4(1821)年に捕えられた葛巻村廣の巢の鷲塚平八郎らは大量に密鑄したようである(「破草鞋」)。

九戸郡久慈通の大野村の鉄山は近世後期には6ヵ所が知られ、文化3(1806)年に大野村晴山文四郎から製鉄願が提出されている(「八戸藩勘定所日記」)。しかし経営は藩政改革の失敗と共に不振となり、藩は経営を軽米村の在郷商人元屋五郎助(測沢円右衛門)に委ねた。元屋が経営を担当したのは天保5(1834)年～天保9(1838)年で、この間に経営を再建する一方、農具の生産も手掛けている(元屋文書「鉄山日記」)。一方、軽米宿に至近な上館村のうち、九戸街道に沿う元村(上館)・沢里・車門は鑄物業が盛んであった。上館村の鑄物業の発祥は不明であるが、寛政12(1800)年に役人の見分があり、1ヵ年の礼金20兩で営業が許可された。文政3(1820)年には焔屋が50軒ほどあり、1回の“吹き”で20貫文～26貫文の生産額があった(「八戸藩勘定所日記」)。ここで鑄物業が興隆したのは良質の土に恵まれていたためで、鉄は大野村からもたらされた。

この頃上館村では密銭鑄造も盛行しており、文政2(1819)年7月には藩による捜査が開始された。この結果9月には車門の吉五郎・松ノ脇の弥七郎とその子助右衛門・上館の忠右衛門・与租右衛門・倉右衛門・荒谷の与平治・軽米村の文治・軽米町の寅奈らが捕えられ、家財没収・入牢・追放・科料などの刑をうけた(「八戸藩勘定所日記」^{注6})。注目したいのは松ノ脇弥七郎・荒谷の与兵治の身分は山守であり、村の中では上層の百姓で密銭の探索を命じられていた人物である。文政3(1820)年6月には軽米方面での密銭鑄造に関して禁令が出され(「八戸藩史料」^{注7})、8月21日には藩の御目付2人が元屋の銭箱・文庫蔵に納められていた銭の中から組銭24貫文を取り出し、叭に入れて封印している(元屋文書「万日記」^{注8})。

軽米方面で密銭鑄造が盛行しえたのは、その背景に鑄物業があったことと、農民の出稼ぎ先として仙台藩石巻銭座、後には盛岡藩大迫銭座などがあったためである。銭座に出稼ぎに行った者は、鑄銭技術と種銭を持ち帰ったと伝えられている。種銭は藩の摘発が繰り返えされるたびに没収され、そのため鑄銭者は種銭不足を補うため通用銅銭を加工して種銭としたと伝えられている(「南部鑄銭考」)。

注1 森喜兵衛・板橋源「栗林銭座発掘報告書」昭和35年 釜石市教育委員会

注2 小笠原吉亮「南部鑄銭考」昭和7年 発行されたか不明。県立図書館蔵本は原稿用紙11枚を綴じたものである。

注3 「九戸郡誌」（昭和11年）による鑄銭の状況——次ページ参照。

注4 「元屋文書」軽米町軽米在住沢沢鉄馬氏蔵。沢沢氏は近世からの在郷商人で、多くの古文書を所蔵している。「永代御用日記」・「万日記」・「御鉄山日記」などは貴重である。

注5 新渡戸非弘「破草鞋」

注6 「八戸藩勘定所日記」上杉文書。八戸市立図書館蔵。「八戸市史」所収。

（文政2年7月3日）一、野村武一拝知百姓上館御松之監弥七郎八日町乙妻荒谷村与兵治右之人数御陸掛被仰付御目大関文弥御奉行日沢登御勘定頭波々伯部伝右於九郎太方宅被申達之。

御物書接待五藏御徒目付長牛治太夫右以御目付被申達之

（文政2年9月4日）一、野田境江追放被仰付牢舎荒谷村与兵治右以御書付御町奉行御勘定頭江被申達之。

一、田地家屋敷家附調所之上市川境江追放被仰付牢舎上館村与租右衛門右同断以御書付被申達之。

一、田地家屋敷家附調所之上市川境江追放被仰付牢舎輕米村文治右同断以御書付被申達之。

一、同牢舎上館村倉右衛門右同断御書付を以被申達之。

（文政2年9月6日）一、牢舎御免科料百五拾貫文被仰付軽米町寅泰右以御書付御町奉行御勘定頭江被申達之。

（文政2年9月10日）一、入牢被仰付井上勘兵衛百姓車門村吉五郎野村武一百姓松館村（上館村字松ノ脇の旗りか——筆者）張七郎大槻藤右衛門百姓上館村忠右衛門松ノ脇弥七郎子助右衛門右路々相守居候山ニ於て隠掛相企債ニ付以御書付御町奉行御勘定頭江被申達之。

（文政6年4月1日）一、大槻藤右衛門拝知百姓上館村忠右衛門同村寛兵衛沢里村直吉御後頼懸被仰付御目付新宮右兵衛御町奉行日沢登御勘定頭波々伯部伝右於御席被申達之。

（文政6年4月19日）一、大槻藤右衛門拝知百姓上館村御呼出之者共御後頼懸掛被仰付波々伯部伝代瀬沢庄吾右何連茂於御席被申達之。

（文政6年12月28日）一、市川境江追放煙山七郎治百姓小軽米村三十郎右御書付ヲ以御町奉行御勘定頭江被申達之。

注7 「八戸藩史料」昭和4年、八戸郷友会

（文政3年）六月三日是より先軽米方面に於て密に通用鉄銭を偽造して正銭と混同して使用し来れるを以て藩より嚴重なる禁令を發し密造者を探偵搜索したるも彼等巧みに踪跡を暗まし容易に実功を奏せず倍々不良新銭の増加するが故に又々左の触書を發せり。

新銭通用御停止之儀は兼々個數御沙汰被置候通相心得可申万一心得違等有之候得は公辺へ対しても難被為濟事に候間此上心得違無之様相心得可申候

注8 「万日記」（文政4年8月21日）……みせ銭箱并文庫蔵御封印被遊……粗銭より分け、二十四貫文一駄ニ入御封印被遊候己酉、直に御磨り也、暫々不用成べしと御喃のみ。

注3。「九戸郡誌」(昭和11年)による鑄銭の状況

軽米方面

年 代	場 所	密鑄者氏名	概 要
慶応の末年	軽米町の東方約三町小字坊里澤の山陰	山本 宗太郎 府 藤 倉 吉	山田の輩なるものを銭頭に履ひ密鑄した、初裏に千の字の一厘鉄銭後に西文の鉄銭を吹いた、四文銭は金主あって傍に盛岡領に出した
嘉永の頃	軽米の西方山田部落の山中「かおうち」	?	一厘銭を密鑄した
慶応末年	同 所	外山 太郎兵衛	一厘銭を密鑄した
嘉永の頃	軽米の南方大字上館字洞の沢	?	千字の標銭を用ひて密鑄した
慶応の初頃		上館の 工 藤 春 松	曾て箱館の鑄場に勤めたものが密鑄した
明治2年	自宅 で	上館の 佐々木 茂 吉	四文銅銭を密鑄した
安政の頃	上館の沢里の山中内沢	小笠原 興七郎 岡 和 三郎 工 藤 善之助 岡 祐 助	藤の實と称する小銅銭を種とし密鑄した
明治2年	上館字沢里の山中千貫平	?	大因作の歳であった關係か軽米の有志は相談して黄金を投じ細民の救済的に大規模の密鑄を行った
嘉永年間	天馬の沢	上館車門の 日山 大右衛門	同村藤原惣八、岡九郎治と密鑄の計画あったが上司の知るところとなり誰材料及山まで没収された
慶応の末年	車 門	日 出 宇 八 登 沢 浮次郎 中 條 西 松	車門の岩陰で一厘の鉄銭を密鑄した
慶応年間	上館村増子内字小森	沢田の 典兵衛 増子内の菅兵衛	玉川屋敷の松太郎は銭頭で鉄銭を密鑄した、初めは千字鉄後に西文の鉄銭を鑄た四文銅は当時通用銭を種銭に使った
慶応年代	同 増子内の上流塚ア座	軽米の大川定吉 堀 島 徳 平	増子内の浮次郎を銭頭に西文鉄銭を密鑄した

小軽米方面

慶応の初年	小軽米西方約数丁(専坊)	?	種銭は皆千字一厘銭を密鑄した
慶応の末頃	同	兼 田 金次郎	大迫の鑄銭場から帰って西文の鉄銭を密鑄し盛岡領に送った
同	小軽米の蛇口山字下平	小軽米蛇口の中 黒與一、西館和 太郎、同末吉	西館和太郎は大迫銭座に勤め同所から種銭を得た
慶応年間	四子山の彌山山田の「かおうち」	小軽米村四子の 小林種吉、岡久 吉	一厘鉄銭を鑄て上司に現場を発見され逃走した
同		四子宮沢の大崎 種吉、宮川市太 郎	西文鉄銭を密造し以て入れ盛岡領に取送した
慶応の末年	蜂ヶ須の甲地	小軽米字宮沢の 葛島、蜂ヶ須貝 の勘之助	西文の鉄銭を密造し坂町の商人へ売渡した

晴山方面

慶応年間	山内の山中	晴山村山内字駒板の林野下某	山中に礎を築いて密造した
明治15年頃		晴山村字小手屋森の鍛冶職某	二銭銅貨を鑄造と同じ方法で鑄造した

江刺家方面

嘉永の頃	日影山	江刺家村の野辺地茂吉	盛んに一厘鉄銭を密造した
嘉永安政の頃	江刺家村山屋部落の東方「マダノサア」	岡村林清盛、中山惣十郎外数名	一厘銭を密造した
慶応4年	江刺家村日影山「ドエノ沢」	江刺家村大石清作外数名	同
明治初年頃	江刺家村の館坂山下南山日向山	?	?

伊保内方面

安政の頃	伊保内村長興寺の向山	?	一厘の鉄銭を盛んに吹いたという
安政4年	伊保内村長興寺	武松	天保銭を鑄造した
明治2年	伊保内村字二ッ谷	曾兵衛	一厘鉄銭を鑄造したが1日5貫文の運上金を納めて許可を得たものと云う

葛巻方面

文政の頃	葛巻村字鷹巣	鷲原某	石巻千字銭を模して密造した、寛政年中葛巻村の幕八なる者盛岡藩沢内通で密銭を行使した
------	--------	-----	---

長内方面

慶応4年	小久慈字堀内	小久慈の勇吉	許可を得て山中に4個の鑄場を設け職人14~5人を雇い寛永因文の鉄銭を鑄造し湯大工は継米の工藤久七郎、岡浅吉
------	--------	--------	---

大野方面

慶応年間	?	大野村水沢の地頭	水沢の地頭青沢某は其の所有山林で密造し鑄造場なる山まで没収された
------	---	----------	----------------------------------

3. 炭窯跡について

駒板遺跡で検出された炭窯は合計28枚である。これを分布の状況で見ると、西尾根で4枚・西谷1枚・北尾根10・中央尾根東斜面5枚・同稜線部4枚・同南斜面4枚となり、いずれも斜面に営まれている。平面形は遺存状況が良好な底部で見た場合に、方形・長方形・楕円形および溝状となるものに分類できよう。位置と形状との関係を示すと次のとおりである。

	隅丸方形	楕円形	長方形(隅丸長方形)	溝状(帯状)	合計
西尾根南～南東斜面中位	1	1	1	1	4
西谷右岸		1			1
北尾根南斜面上・中位	1	1	8		10
中央尾根東斜面下位(東谷)			1	4	5
中央尾根稜線部	1		3		4
中央尾根南斜面		2	2		4

これらの炭窯跡は、現在も利用されている炭窯と異り、上部構造をもたなかったものと考えられる。筆者らはかつて田老町小堀内遺跡でビール瓶を共伴する炭窯跡を調査したが、この炭窯は粘性の強いロームを方形のブロックとし、これで底部・壁を構築するものであった。当遺跡で検出された炭窯は、こうした底部・壁および上部構造の痕跡は全く確認できなかった。

岩手県北部で上部構造をもつ炭窯が導入されたのは明治末年であり、軽米地方に檜崎窯が入ったのは明治45年頃といわれている。それ以前の在来窯は、奥行き5尺の円形で、地面に穴を掘って煙しつけたにすぎなかったと伝えられている。この炭窯で焼く木炭の多くは、炭化不十分で赤炭と称したといわれる^{注1}。以上のことから、当遺跡で検出された炭窯跡は明治時代以前のものであると考えられるが、どこまで溯れるかについては不明である。

なお南斜面の下位で鑄銭場跡が検出されたが、そこで出土した坩堝の量から、鑄銭場では相当量の木炭を消費したはずである。これら炭窯が鑄銭場と関係があったことが十分考えられよう^{注2}。

注1 「軽米町誌」軽米町誌編纂委員会 昭和50年1月1日

岩手県木炭協会早坂松次郎氏の教示によれば、伏せ焼きと称し、在来の製法であって、不良炭が多く生産されることから、明治以後築造されることが少なくなったという。

注2 同上早坂松次郎氏によれば、伏せ焼きによる木炭は火力があまり強くなく、フイゴによる火力調整がしやすいことから、改良窯普及後も鍛冶炭として生産されることがあった。ただし、その際はクリの木が良いとされたという。

写真図版



昭和57年度調査分



昭和58年度調査分

写真図版 I 遺跡全景



西谷・昭和57年度調査分

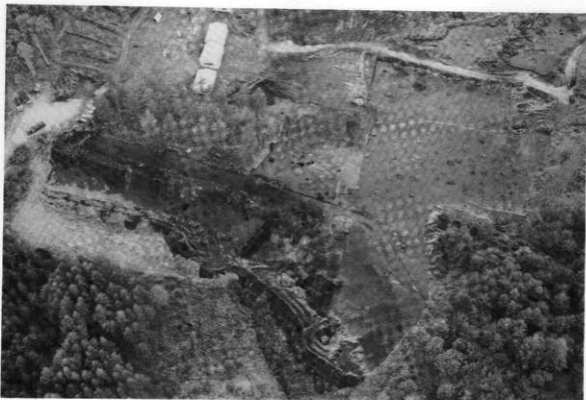
(上が西)



西尾根・昭和58年度調査分

(上が東)

写真図版2 西谷・西尾根調査状況



北尾根東側・昭和57年度調査分

上が南



北尾根西側・昭和58年度調査分

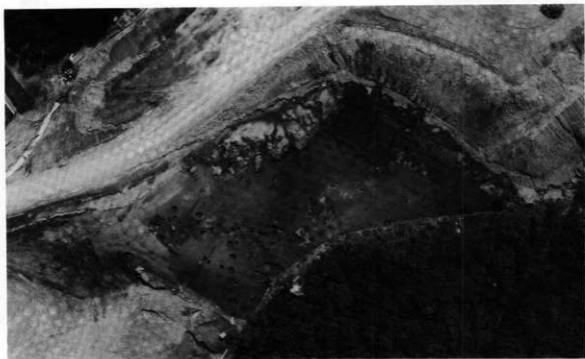
上が東

写真図版3 北尾根調査状況



中央尾根・昭和57年度調査分

上が西



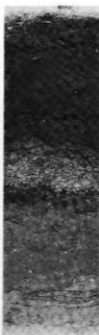
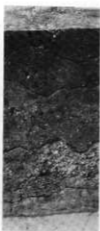
中央尾根南斜面・昭和58年度調査分

上が南東

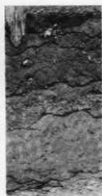
写真図版 4 中央尾根調査状況



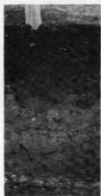
北尾根南斜面



北尾根北斜面



中央尾根稜線部



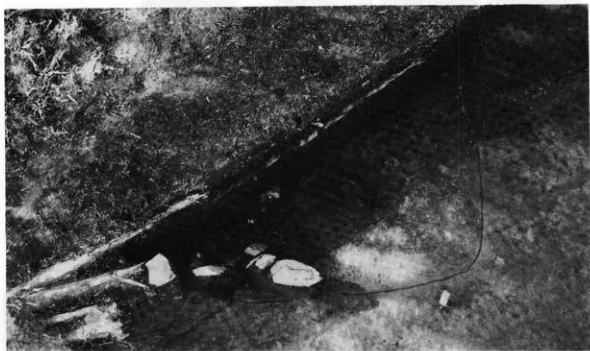
中央尾根南斜面



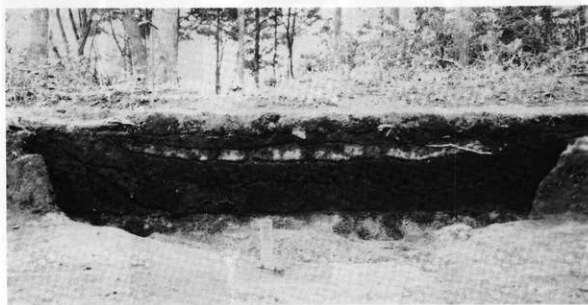
西谷左岸



写真図版 5 土層断面

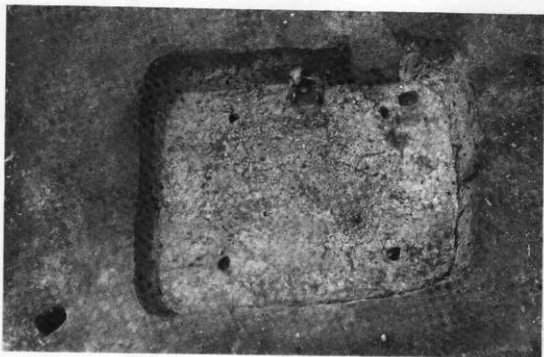


全 景

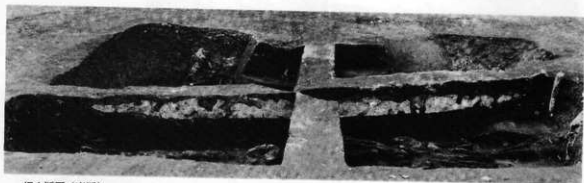


埋土断面

写真図版 6 II G 41住居址



全景



埋土断面(東西)



埋土断面(南北)

写真図版 7 II G 46住居址(1)

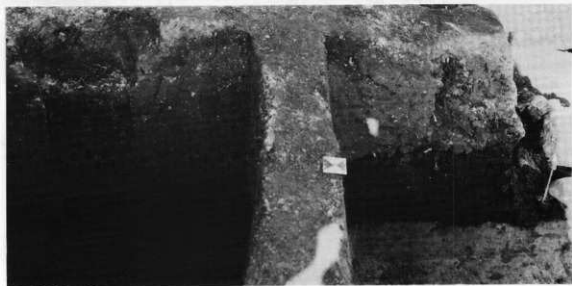


炭化材出土状況

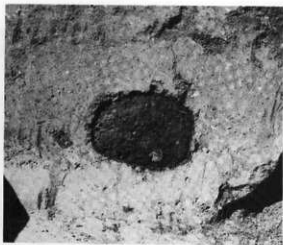


掘り方の状況

煙道縦断面



写真図版 8 II G 46住居址(2)



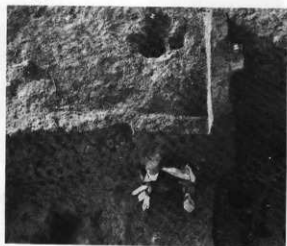
煙道



カマド



カマド付近

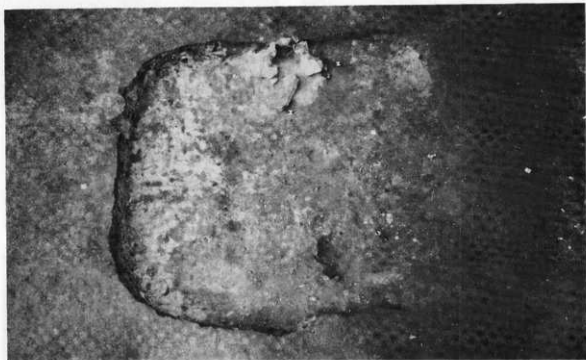


カマド精査



カマド拡大

写真図版 9 II G 46住居址(3)



全 景



埋土断面(東西)



(南北)

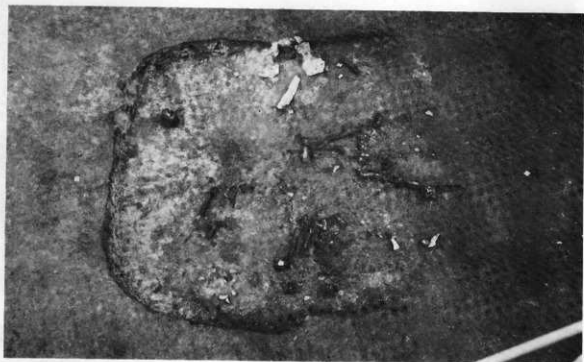


カマド



カマド焼境部

写真図版10 II H 41住居址(1)



ⅡH41住居址炭化材出土状況



ⅡI44-1住居址炭化材出土状況

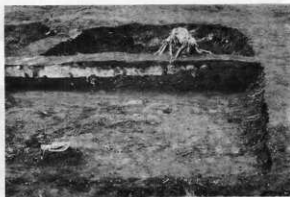
写真図版11 ⅡH41住居址(2)・ⅡI44-1住居址(1)



全景



埋土断面(東西)



埋土断面(南北)



写真図版12 II | 44-1 住居址(2)



カマド



カマド横断面



カマド横断面



カマド芯石組

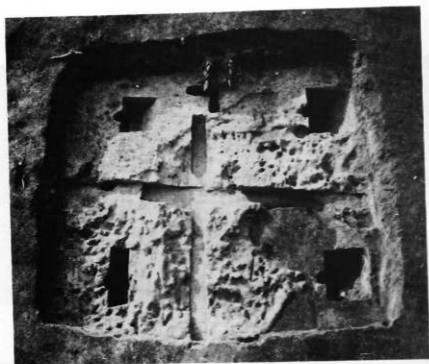


煙道縦断面



煙道

写真図版13 II | 44- | 住居址(3)



II I 44-1 住居址掘り方



II I 44-1 住居址

柱穴 1



柱穴 2



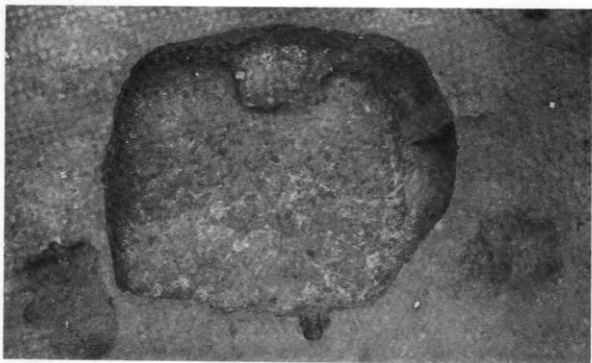
III A 45 住居址全景



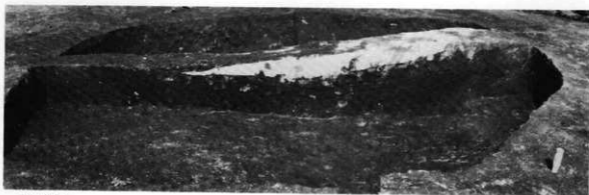
柱穴 3



柱穴 4



全景



埋土断面



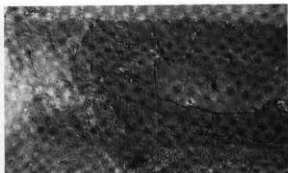
炭化材出土状況



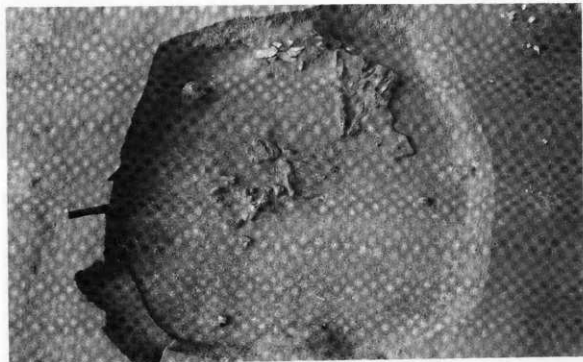
写真図版15 III B 54住居址(1)



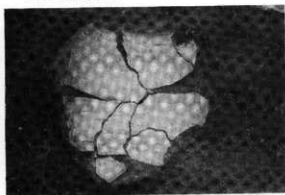
III B 54住居址カマド



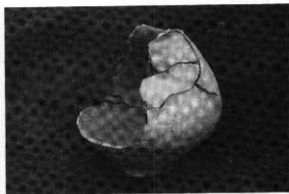
左同煙道縦断面



III C 53住居址全景(1)



土器出土状況



写真図版 16 III B 54住居址(2)・III C 53住居址(1)



全景 (2)



埋土断面



カマド

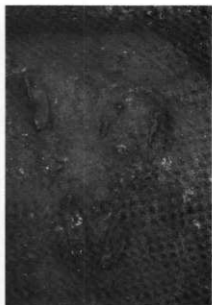


煙道縦断面

写真図版17 III C 53住居址(2)



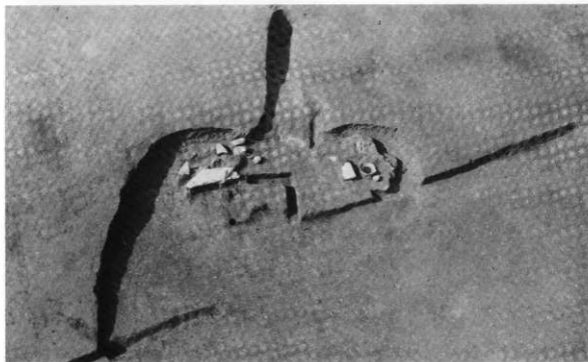
III G 45
住居址
炭化材
出土状況



III C 53住居址・炭化材出土状況

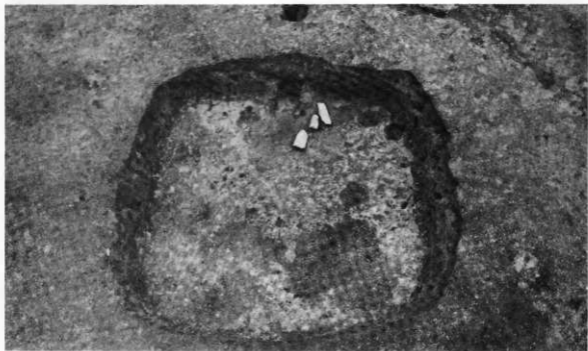


IV G 45
住居址
埋土断面



III G 45住居址全景

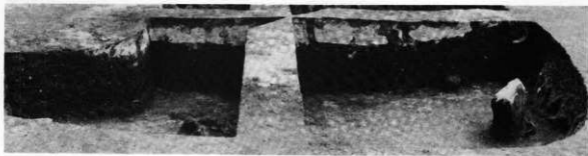
写真図版 18 III C 53住居址(3)・III G 45住居址



全 景

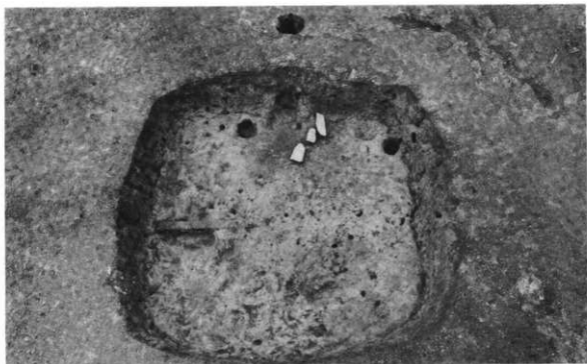


埋土断面(東西)

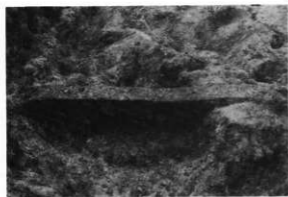


埋土断面(南北)

写真図版19 IV B 36住居址(1)



掘り方



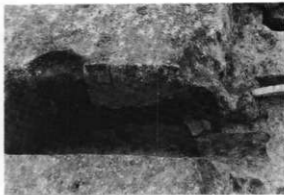
貼床断面



カマド焚口部

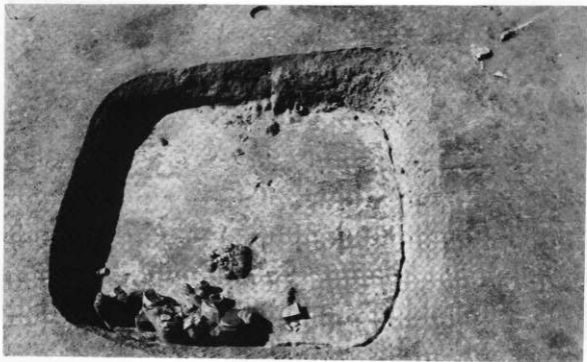


カマド断面(ヨコ)

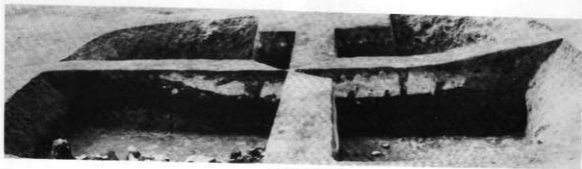


カマド断面(タテ)

写真図版20 IV B 36住居址(2)



全景

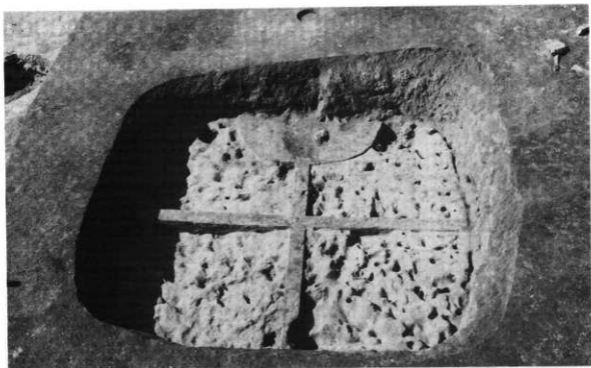


埋土断面(東西)



埋土断面(南北)

写真図版21 IV D 34住居址(1)



掘り方



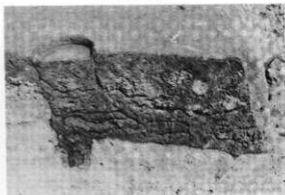
カマド焚口部1



カマド焚口部2

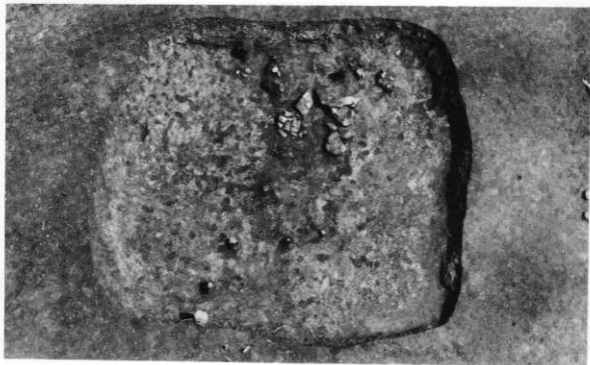


カマド断面(ヨコ)



カマド断面(タテ)

写真図版22 IV D 34住居址(2)



全 景

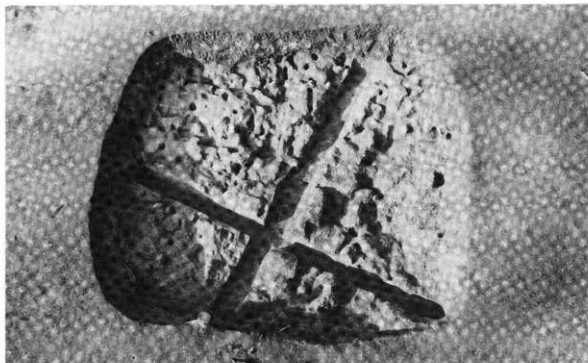


埋土断面(東西)

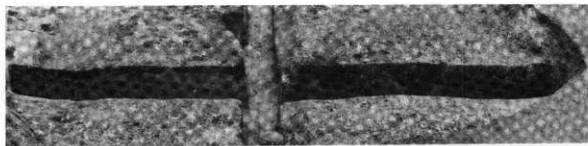


埋土断面(南北)

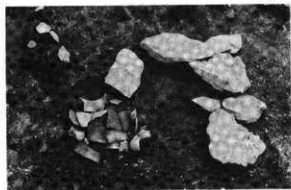
写真図版23 IV D 36住居址(1)



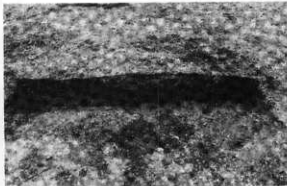
掘り方



貼床断面

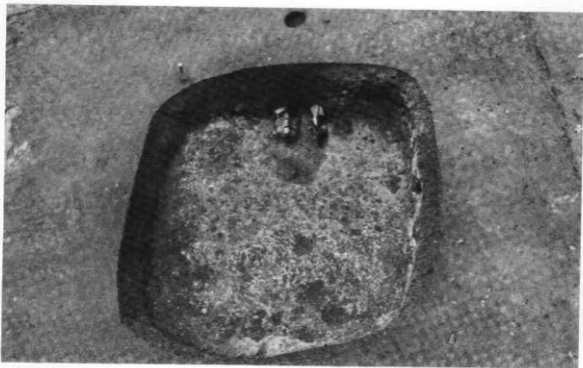


遺物出土状況



地土断面

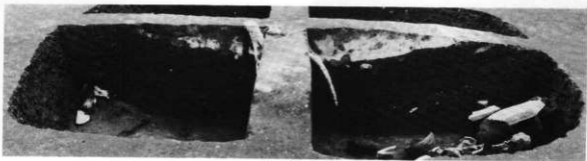
写真図版24 IV D 36住居址(2)



全景



埋土断面(東西)



埋土断面(南北)

写真図版25 IV D 39住居址(1)



遺物出土状況



遺物出土状況

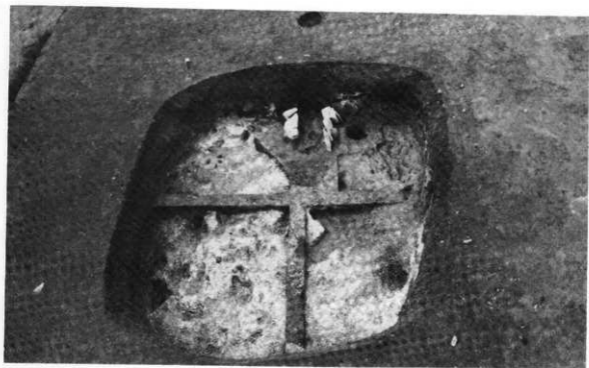


遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版26 IV D 39住居址(2)



撮り方



カマド焚口部

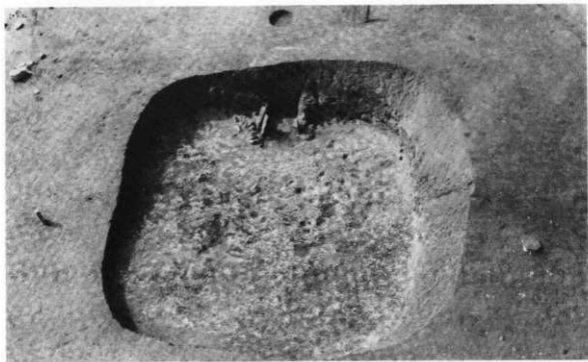


カマド断面(ヨコ)



カマド断面(タテ)

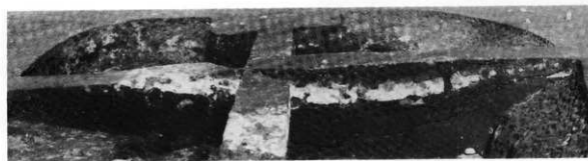
写真図版27 IV D 39住居址(3)



全景

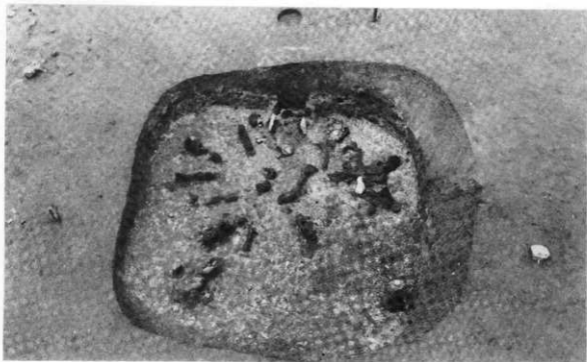


埋土断面(南北)



埋土断面(東西)

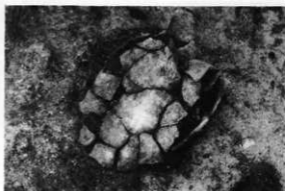
写真図版28 IV E 37住居址(1)



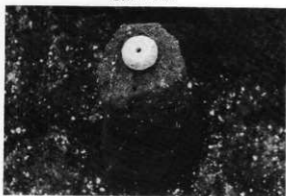
炭化村出土状況



遺物出土状況

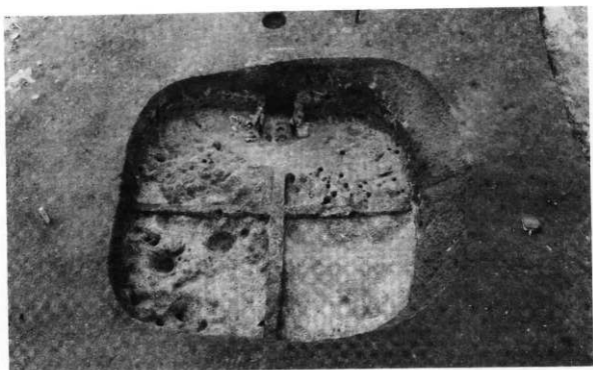


遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版29 IV E 37住居址(2)



掘り方



カマド焚口部

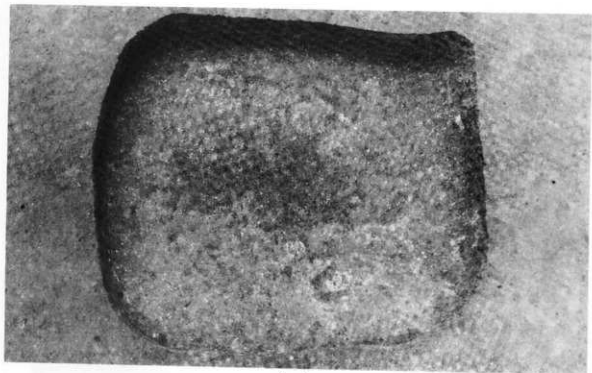


カマド断面(ヨコ)

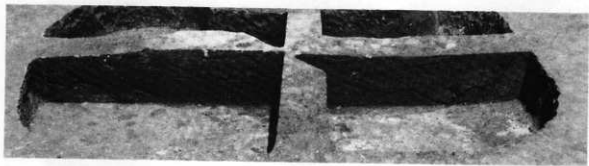


カマド断面(タテ)

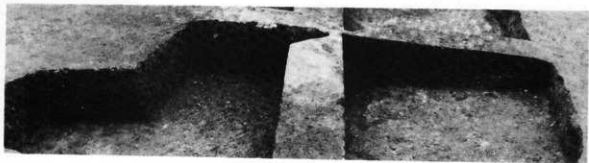
写真図版30 IV E 37住居址(3)



全 景

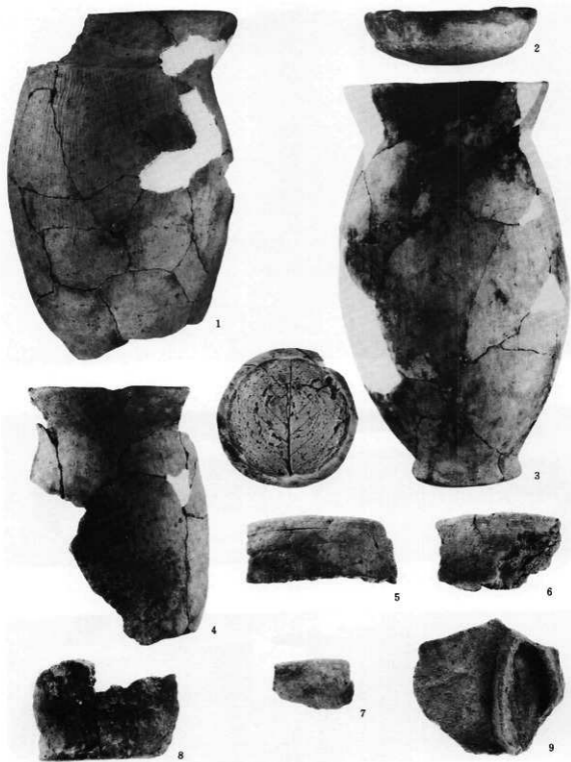


埋土断面（東西）



埋土断面（南北）

写真図版31 IV G 37住居址

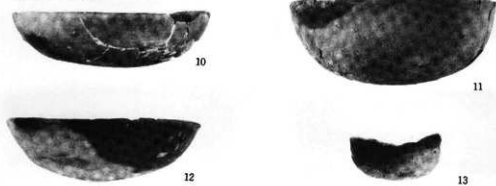


写真図版32 II G 41・II G 46住居址出土遺物

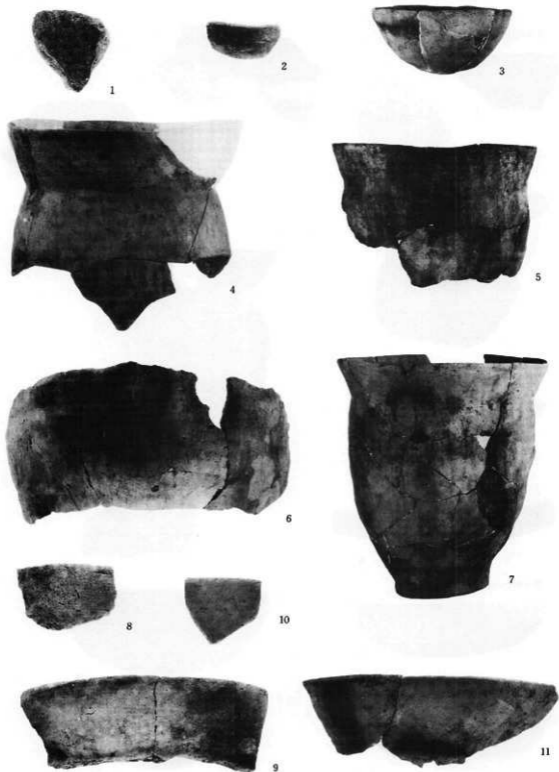
Ⅱ H 41 住居址



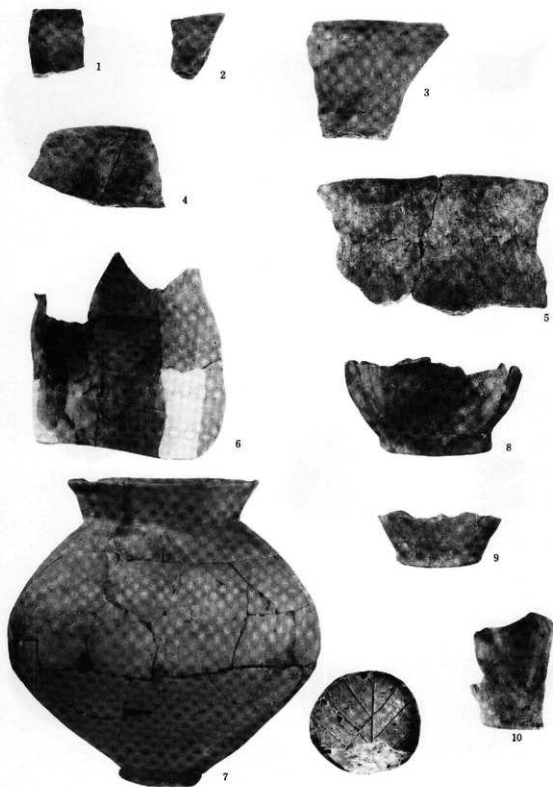
Ⅱ I 44-1 住居址



写真図版33 Ⅱ H 41・Ⅱ I 44-1 住居址出土遺物



写真図版34 II | 44- | 住居址出土遺物



写真図版35 II | 44- | 住居址出土遺物



1

II I 44-1 住居址



2



3



4



5



6



7

III A 45住居址



9



8



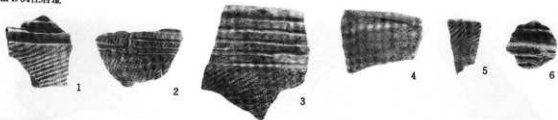
10



11

写真図版36 II I 44-1・III A 45住居址出土遺物

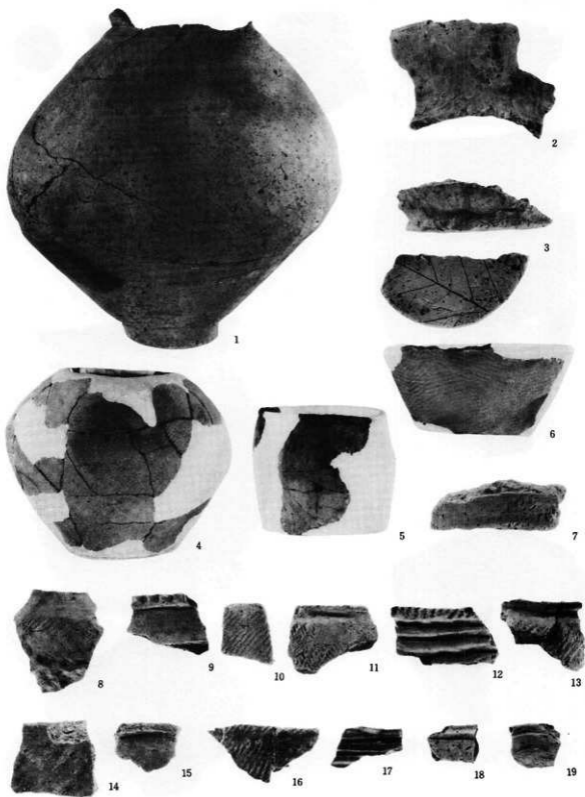
III B 54住居址



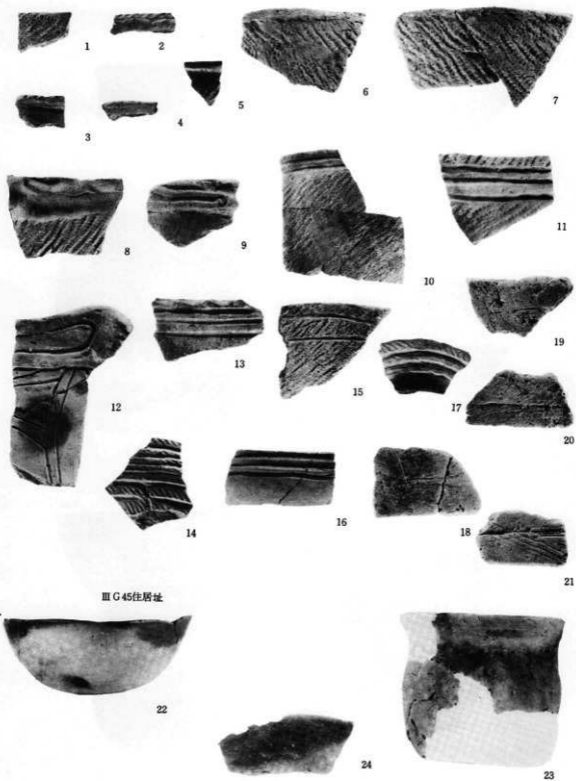
III C 53住居址



写真図版37 III B 54・III C 53住居址出土遺物



写真版38 III C53住居址出土遺物



写真図版39 III C 53・III G 45住居址出土遺物



1



3



4



2

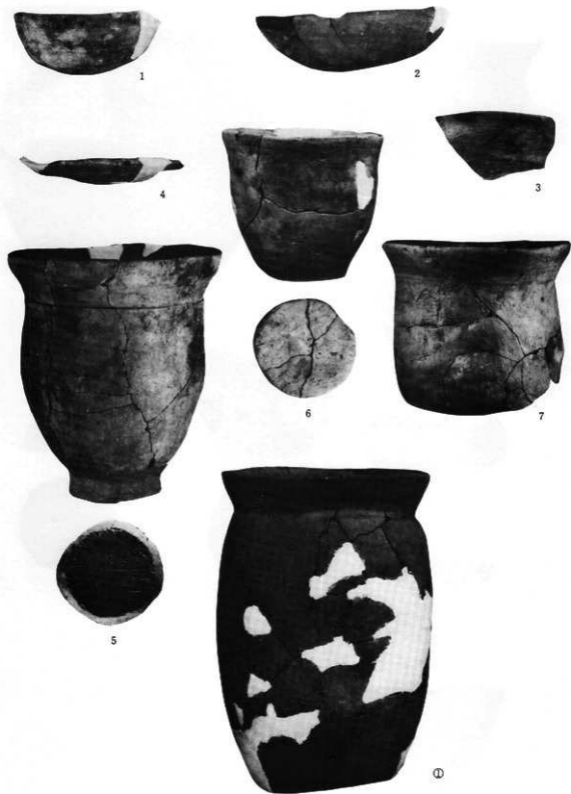


6



5

写真図版40 IV B 36住居址出土遺物



写真図版41 IV D 34住居址出土遺物



②



③



④



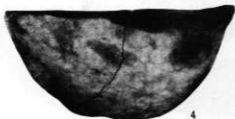
3



1



2



4

写真図版42 IV D 34住居址出土遺物

IV D36住居址



5



6



①



②



7

IV D39住居址



③



④



⑤

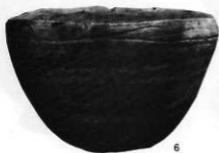


⑥



⑦

写真図版43 IV D36・IV D39住居址出土遺物



写真図版44 IV D 39住居址出土遺物

IV D39住居址



IV E37住居址



写真図版45 IV D39・IV E37住居址出土遺物



⑤



2



1



3



4

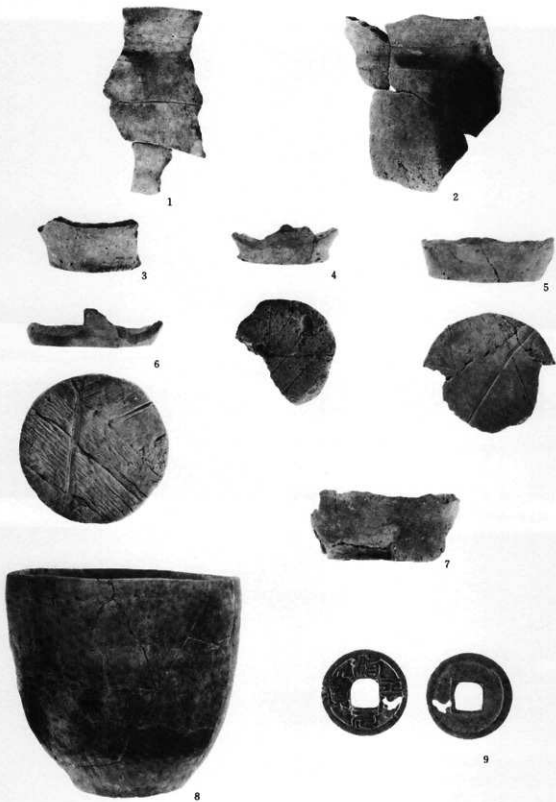


5

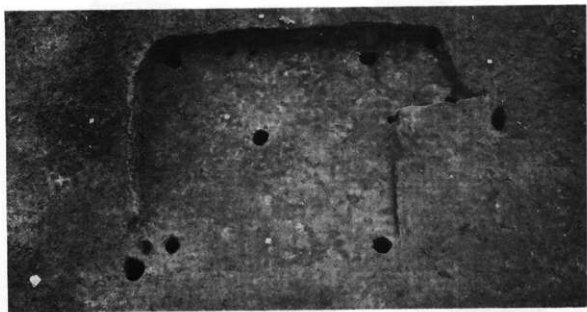


7

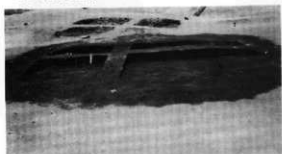
写真図版46 IV E 37・IV G 37住居址出土遺物



写真図版47 遺構外出土遺物



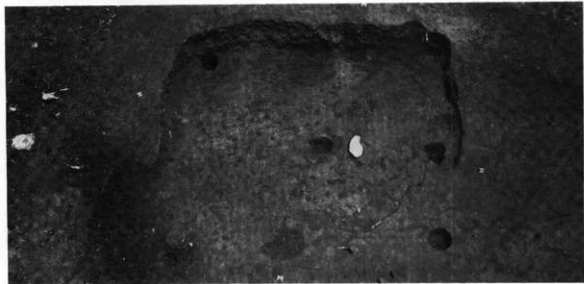
II J 76住居址全景



同上埋土断面図（南北）



同上埋土断面（東西）

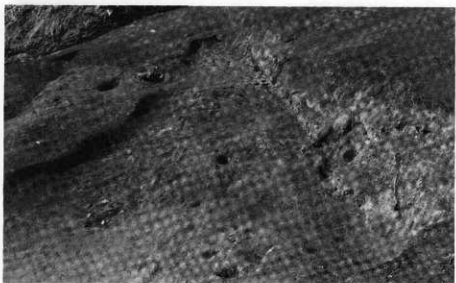


III A 76住居址

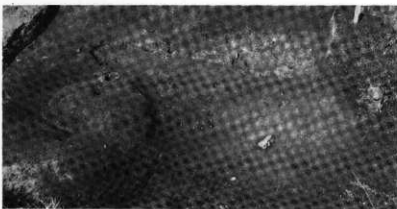
写真図版48 II J 76、III A 76住居址



発掘風景



全景



全景及び
炉跡

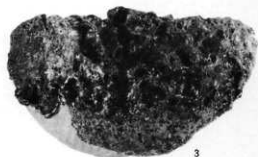
写真図版49 鑄銭場跡



1



2



3



4



5



6



7

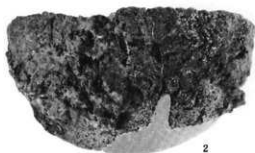


8

写真図版50 出土遺物（埴塼）



1



2



3



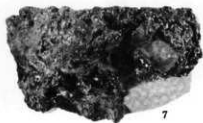
4



5



6

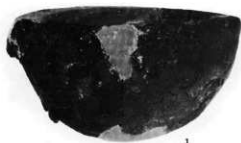


7

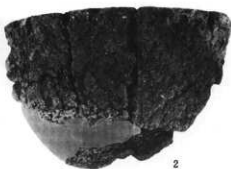


8

写真図版51 出土遺物（埴埴）



1



2



3



4



5



6



7

写真図版52 出土遺物（埴埴・羽口）



写真図版53 出土遺物（銭・湯放ち銭）



1



3



5



7



4



6



2



8

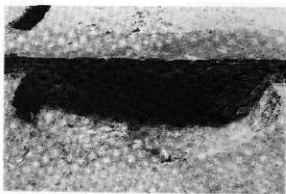
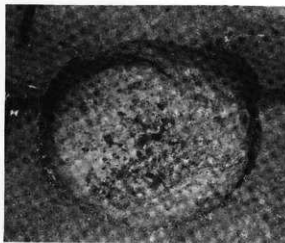


9



10

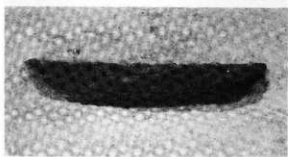
写真図版54 出土遺物（鉄竿・鉄製品）



II B 47 炭窯跡



II I 49 炭窯跡

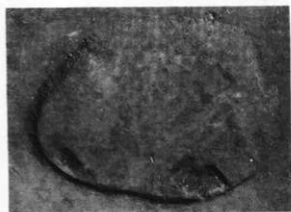


II J 52 炭窯跡

写真図版55 II B 47 · II I 49 · II J 52 炭窯跡



II J 46炭窯跡



III B 53炭窯跡

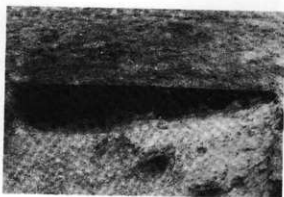
写真図版56 II J 46・III B 53炭窯跡



IV A 31 炭痕跡



IV A 36 炭痕跡



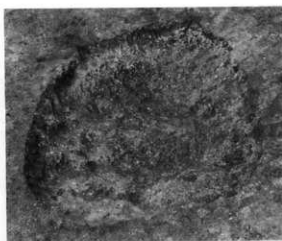
IV B 39 炭痕跡



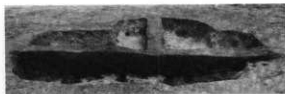
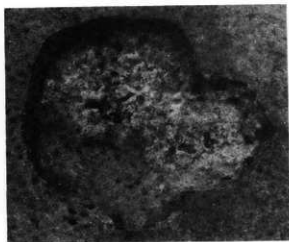
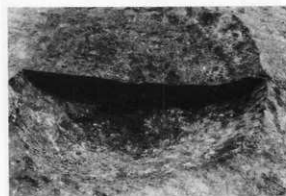
写真図版57 IV A 31 · IV A 36 · IV B 39 炭痕跡



IV E 31 炭窟跡

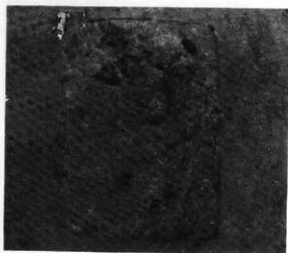


IV E 35 炭窟跡

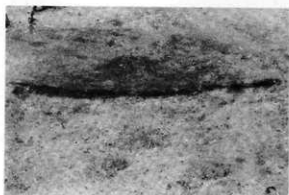


IV I 28-1・2 炭窟跡

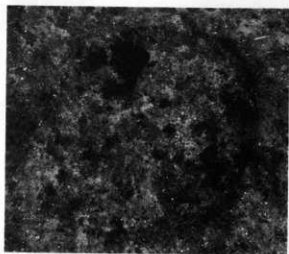
写真図版58 IV E 31・IV E 35・IV I 28-1・2 炭窟跡



IV F 22炭窟跡



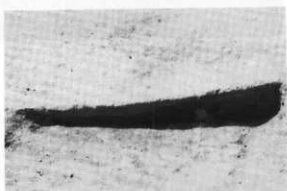
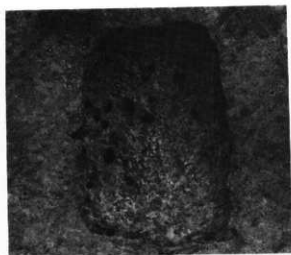
VE 30炭窟跡



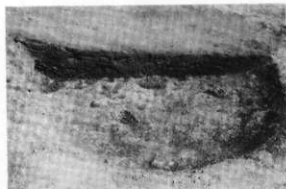
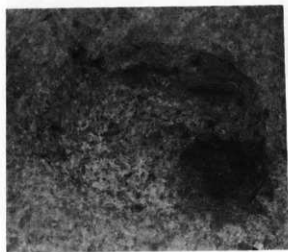
写真図版59 IV F 22・VE 30炭窟跡



IV B 77炭痕跡



IV D 74炭痕跡



IV E 75炭痕跡

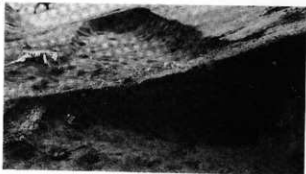
写真図版60 IV B 77・IV D 74・IV E 75炭痕跡



IV J 79炭窯跡



IV I 83炭窯跡



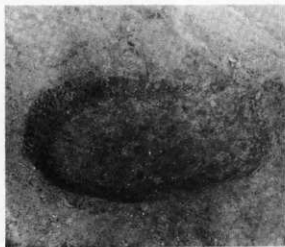
V B 65-1炭窯跡



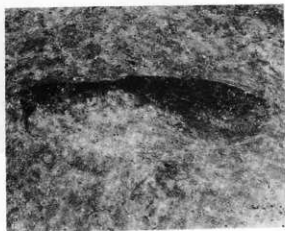
V E 65炭窯跡



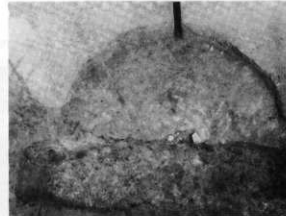
写真図版61 IV I 83・IV J 79・V B 65-1・V E 65炭窯跡



II E 96炭窯跡



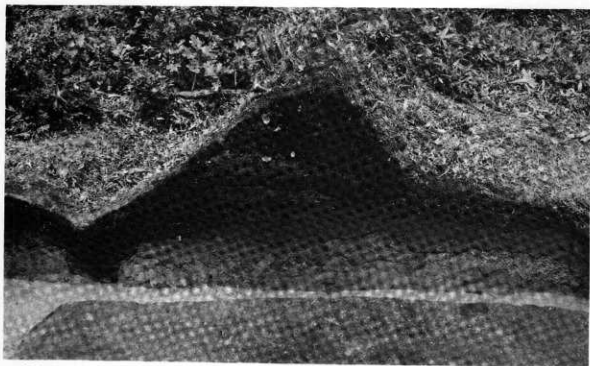
II J 95炭窯跡



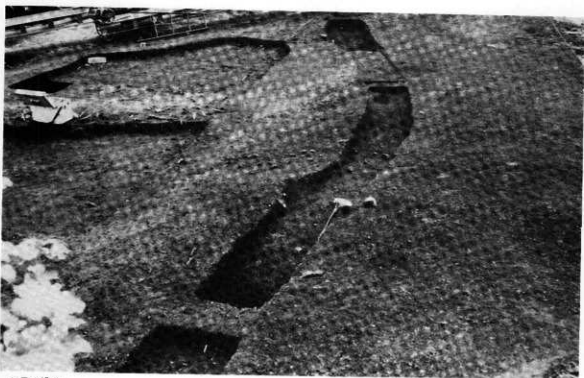
IV E 87炭窯跡

III D 88炭窯跡

写真図版62 II E 96 · II J 95 · III D 88 · IV E 87炭窯跡



土壘断面



II E 58溝跡

写真図版63 土壘断面・II E 58溝跡

財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
 副 所 長 宮 英 一
 (管理課)
 課 長 千 葉 久 夫
 課長補佐 阿 部 詔 夫
 主 事 立 花 多加志
 技 能 員 佐 藤 春 男

〔調査課〕

課 長	近 藤 宗 光		
主任文化財専門調査員	昆 野 靖		
文化財専門調査員	片 方 宗 明	文化財専門調査員	光 井 文 行
〃	長 沼 彬	〃	玉 川 英 喜
〃	菊 池 利 和	〃	石 川 長 喜
〃	渡 辺 洋 一	〃	三 浦 謙 一
〃	佐々木 嘉 直	〃	工 藤 利 幸
〃	平 井 進	〃	中 川 重 紀
〃	中 村 良 一	〃	高 橋 与 右 工 門
〃	田 村 壮 一	〃	高 橋 義 介
〃	岩 渕 久	〃	酒 井 宗 孝

〔資料課〕

課 長 名 須 川 滋 男
 文化財専門調査員 田 鎖 寿 夫
 〃 佐 々 木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集

駒板遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査
(第1分冊 古代～近世編)

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月25日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下坂田11の185

☎0196(38)9001-2

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 岩手県盛岡市本町通二丁目13番8号

TEL 0196(23)3351